

浜松城跡13

Hamamatsu Castle
The 24th excavation report

浜松市教育委員会

2019年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2019



浜松城跡 13

HAMAMATSU CASTLE

The 24th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2019

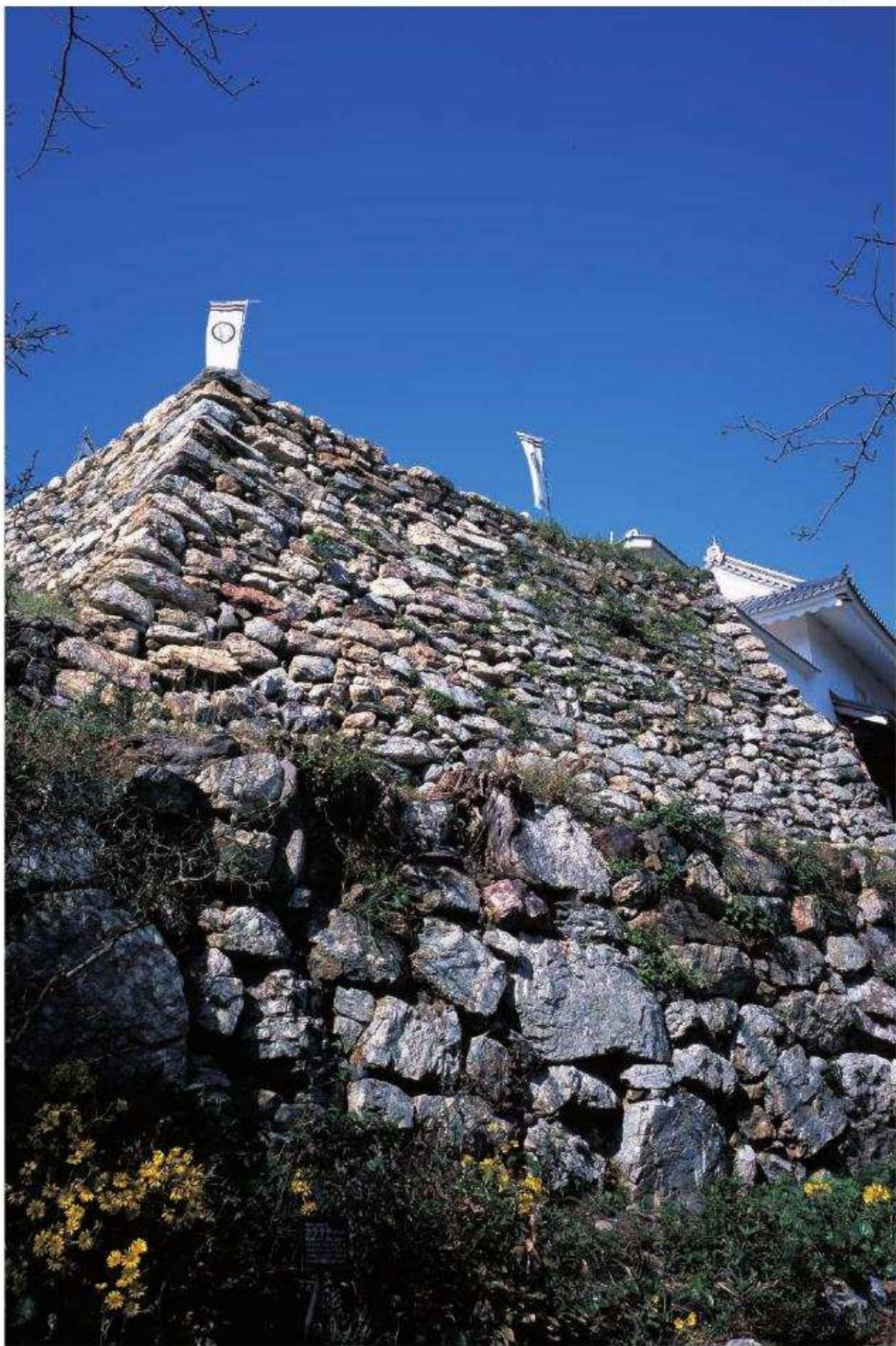
浜松市教育委員会



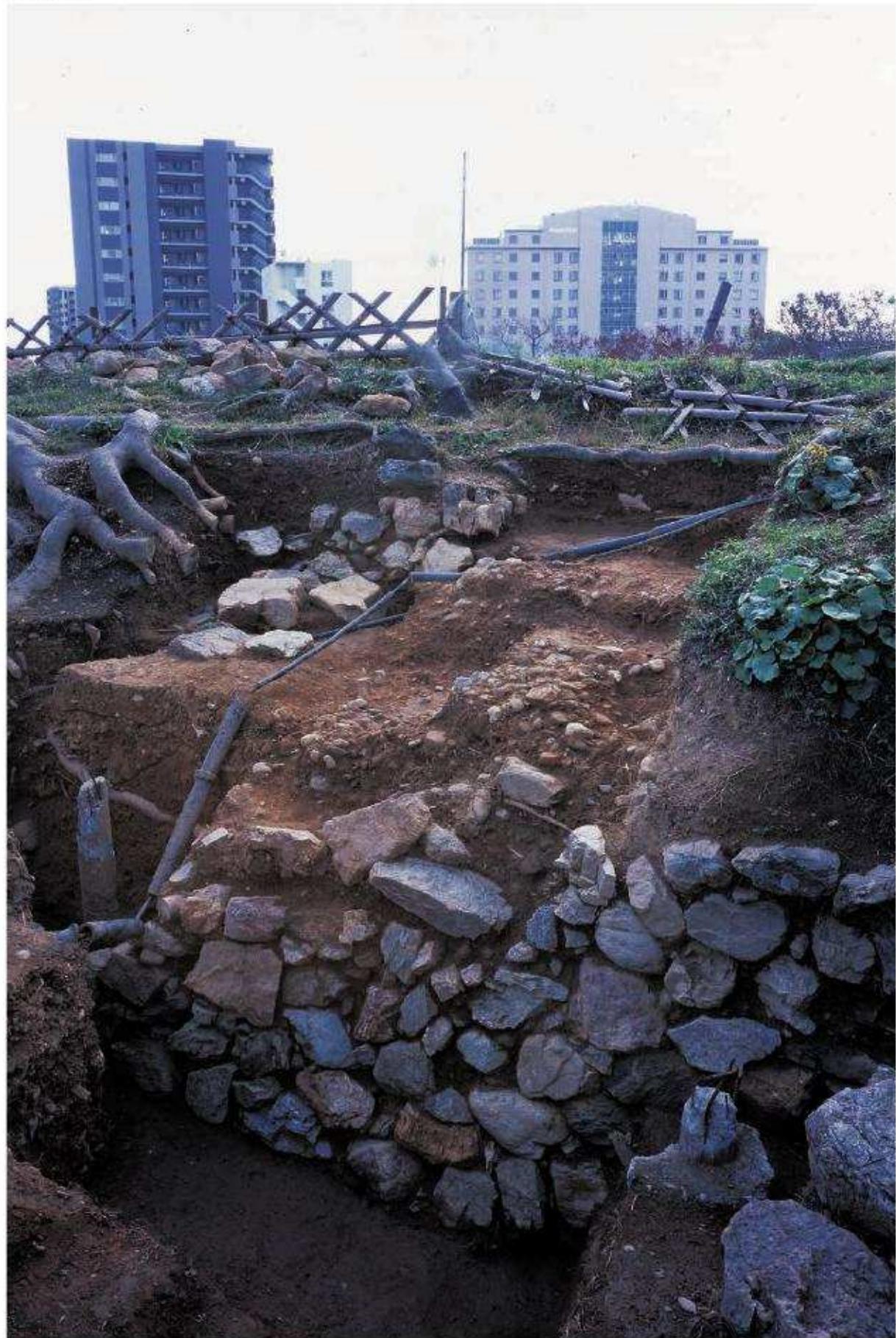
天守曲輪南東隅瓦溜り (SX01) 検出状況 (2トレンチ・南東から) ※画像一部加工・修正



天守曲輪南東隅石壁検出状況（1トレンチ・北東から）



天守曲輪南東隅石垣（南東から）



天守曲輪南西部石垣検出状況（4トレンチ・北東から）

例　　言

- 1 本書は、浜松市中区元城町に所在する浜松城跡の24次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、浜松城公園歴史ゾーン整備事業に先立ち、実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）を行い、浜松市から委託を受けた株式会社フジヤマが実務を支援した。調査にかかる費用は、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、次の通りである。
調査面積 約50m²
調査期間（現地調査） 平成30年（2018）8月1日～平成30年（2018）12月21日
（整理作業） 平成30年（2018）12月25日～平成31年（2019）3月29日
- 4 発掘調査は、鈴木一有・川西啓喜（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、渥美賢吾、坂下俊介（株式会社フジヤマ）が実務を支援し、杉山佳奈（株式会社フジヤマ）が補佐した。
- 5 本書の執筆は、第1章1を川西、第1章2・3を杉山、第1章4・5、第2章を坂下、第3章を鈴木が行った。現地における写真撮影は鈴木と坂下が、遺物写真撮影は坂下が行った。編集は鈴木の総括のもと、実務を坂下が行った。陶磁器類の記載については、山内伸浩（株式会社フジヤマ）が補佐した。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いる座標値は世界測地系（8系）に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。
教育委員会 → 教委　　(財) 浜松市文化振興財団 → 浜文振
- 3 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 4 1・2トレンチは層位が複雑なため、土層番号はそれぞれFig. 13（1トレンチ）とFig. 16（2トレンチ）を基準として、本文中や観察表に記載している。
- 5 本報告には、23次調査8トレンチ（24次調査2トレンチ内）出土の瓦も掲載している。
- 6 本書の作成にあたり、以下の方々からご協力・ご指導を賜った。（敬称略、順不同）
岩原剛、加藤理文、北野博司、木村聰、小谷徳彦、柴田稔、千田嘉博、松井一明、三浦正幸、向坂鋼二

浜松城跡13

目 次

例 言

凡 例

第1章 序 論 1

- 1 調査にいたる経緯 1
- 2 浜松城をめぐる環境 2
- 3 浜松城跡の調査履歴 3
- 4 浜松城跡の層位と時期区分 7
- 5 調査の方法と経過 8

第2章 調査成果 9

- 1 検出遺構 11
- 2 出土遺物 19

第3章 後 論 31

- 1 浜松城跡における軒瓦と鰐瓦について 31
- 2 浜松城跡天守曲輪の瓦溜りと櫓の想定 39
- 3 今後の展望 46

図 版

図 版 目 次

巻頭図版

- | | |
|---------------------------------------|------------------------------|
| 1 天守曲輪南東隅瓦溜り (SX01) 検出状況 (2トレンチ・南東から) | 3 天守曲輪南東隅石垣 (南東から) |
| 2 天守曲輪南東隅石墨検出状況 (1トレンチ・北東から) | 4 天守曲輪南西部石垣検出状況 (4トレンチ・北東から) |

図 版

- | | |
|---------------------------------------|------------------------------|
| 青山家御家中配列図 (天守曲輪拡大) | 6 天守曲輪南西部石垣検出状況 (4トレンチ・南東から) |
| 1 天守曲輪南東隅瓦溜り (SX01) 検出状況 (2トレンチ・北西から) | 7 1 3トレンチ 石墨南西隅検出状況 (北東から) |
| 2 1 1トレンチ 石列検出状況 (北から) | 2 4トレンチ 石墨石垣検出状況 (南東から) |
| 2 1トレンチ 石列検出状況 (南西から) | 8 1 1トレンチ 出土瓦 |
| 3 1トレンチ 石列下部検出状況 (東から) | 2 2トレンチ SX01 出土軒瓦 |
| 3 1 2トレンチ SX01 検出状況 (北東から) | 9 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (1) |
| 2 2トレンチ SX01 検出状況 (北西から) | 10 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (2) |
| 3 2トレンチ SX01 検出状況 (西から) | 11 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (3) |
| 4 1 2トレンチ 石垣検出状況 (北から) | 12 2トレンチ SX01 出土平瓦 (1) |
| 2 2トレンチ SX01 断ち割り断面状況 (東から) | 13 1 2トレンチ SX01 出土平瓦 (2) |
| 3 2トレンチ 石墨及び裏込め検出状況 (東から) | 2 2トレンチ SX01 等出土道具瓦 |
| 4 2トレンチ 石墨及び裏込め検出状況 (北から) | 14 1 2トレンチ 出土瓦 |
| 5 1 2トレンチ SX02 全景 (南東から) | 2 4トレンチ 出土丸瓦 |
| 2 2トレンチ SX02 検出状況 (北西から) | 3 その他・表採瓦 |
| 3 2トレンチ SX02 検出状況 (南東から) | 4 近現代出土遺物 |

挿 図 目 次

- | | | | |
|----------------------------------|----|----------------------------------|----|
| Fig.1 浜松城跡の位置 | 1 | Fig.23 2トレンチ SX01 出土軒瓦 | 21 |
| Fig.2 浜松城跡復元図 | 2 | Fig.24 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (1) | 22 |
| Fig.3 浜松城下町の構成 | 3 | Fig.25 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (2) | 23 |
| Fig.4 調査対象地の位置 | 4 | Fig.26 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (3) | 24 |
| Fig.5 トレンチ配置図 | 6 | Fig.27 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (4) | 25 |
| Fig.6 天守台表採遺物 | 7 | Fig.28 2トレンチ SX01 出土平瓦 (1) | 26 |
| Fig.7 天守曲輪基本土層図 | 7 | Fig.29 2トレンチ SX01 出土平瓦 (2) | 27 |
| Fig.8 公開発掘風景 | 8 | Fig.30 2トレンチ SX01 等出土道具瓦 | 28 |
| Fig.9 現地説明会 | 8 | Fig.31 2トレンチ 出土瓦 | 29 |
| Fig.10 24次トレンチ配置図 | 9 | Fig.32 4トレンチ 出土丸瓦 | 30 |
| Fig.11 天守曲輪トレンチ配置図 | 10 | Fig.33 近現代出土遺物 | 30 |
| Fig.12 1トレンチ 実測図 | 11 | Fig.34 浜松城跡出土軒丸瓦集成図 | 33 |
| Fig.13 1トレンチ 土層断面図 | 12 | Fig.35 浜松城跡出土平瓦集成図 | 35 |
| Fig.14 2トレンチ 実測図 | 13 | Fig.36 浜松城跡出土鏡瓦集成図 | 37 |
| Fig.15 2トレンチ瓦溜り (SX01) 実測図 | 14 | Fig.37 天守曲輪遺構推定図 | 41 |
| Fig.16 2トレンチ 土層断面図 | 15 | Fig.38 構想定位置図 | 42 |
| Fig.17 2トレンチ SX01 土層断面図 | 15 | Fig.39 想定櫓台断面模式図 | 43 |
| Fig.18 1・2トレンチ 土層断面図 | 16 | Fig.40 天守曲輪南東隅 | 43 |
| Fig.19 2トレンチ SX02 実測図 | 16 | Fig.41 階段遺構図 | 44 |
| Fig.20 3トレンチ 実測図 | 17 | Fig.42 石墨断面模式図 | 45 |
| Fig.21 4トレンチ 実測図 | 19 | | |
| Fig.22 1トレンチ 出土瓦 | 20 | | |

挿 表 目 次

- | | | | |
|----------------------------|----|----------------------------|----|
| Tab.1 浜松城跡における調査等の履歴 | 5 | Tab.4 浜松城跡出土瓦における諸属性 | 40 |
| Tab.2 浜松城の時期区分 | 7 | Tab.5 出土遺物観察表 (1) | 47 |
| Tab.3 浜松城跡出土瓦集成一覧表 | 38 | Tab.6 出土遺物観察表 (2) | 48 |

第1章 序論

I 調査にいたる経緯

静岡県浜松市中区に所在する浜松城は、市の中心市街地に位置する。周辺は市街地化が進行しているが、天守曲輪を中心とした城域中心部は、築造当時の石垣等が残存しており、市指定史跡として保護されている。また、城跡の一部は浜松城公園として整備され、市民をはじめ多くの人々の憩いの場として活用が図られている。

浜松城公園は近年、利用者ニーズの多様化や施設設備の老朽化に伴い、再整備の必要性が求められてきた。浜松市（主管課：公園緑地部公園課（当時））は、浜松城の歴史的な魅力を高め、かつ長期的な視野に立った整備を検討し、2009年に浜松城公園歴史ゾーンの整備基本構想を、2011年にはその基本計画を策定した。

基本計画の策定後、2014年には天守門が復元され、2019年には本丸南広場の整備が行われるなど、基本計画に基づいた再整備が進められている。その一方で、整備に向けた検討材料を得るために、2018年1月～3月に富士見櫓跡と天守曲輪の発掘調査が行われた（23次調査）。その結果、富士見櫓跡では良好な状態の石垣が、天守曲輪では石塁及び南東部において完形に近い瓦が大量に確認され、櫓の存在が想定された。これらの発掘調査結果を受け、浜松市（都市整備部公園課）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が協議を行い、天守曲輪の整備に向けさらに詳細な検討材料を得る必要性を相互に確認した。この協議結果を受け、天守曲輪における石塁の残存状況及び南東部の遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査（24次調査）を実施することとなった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した株式会社フジヤマが支援した。現地調査は、2018年8月1日から12月21日にかけて実施した。調査面積は、50 m²である。

（川西）

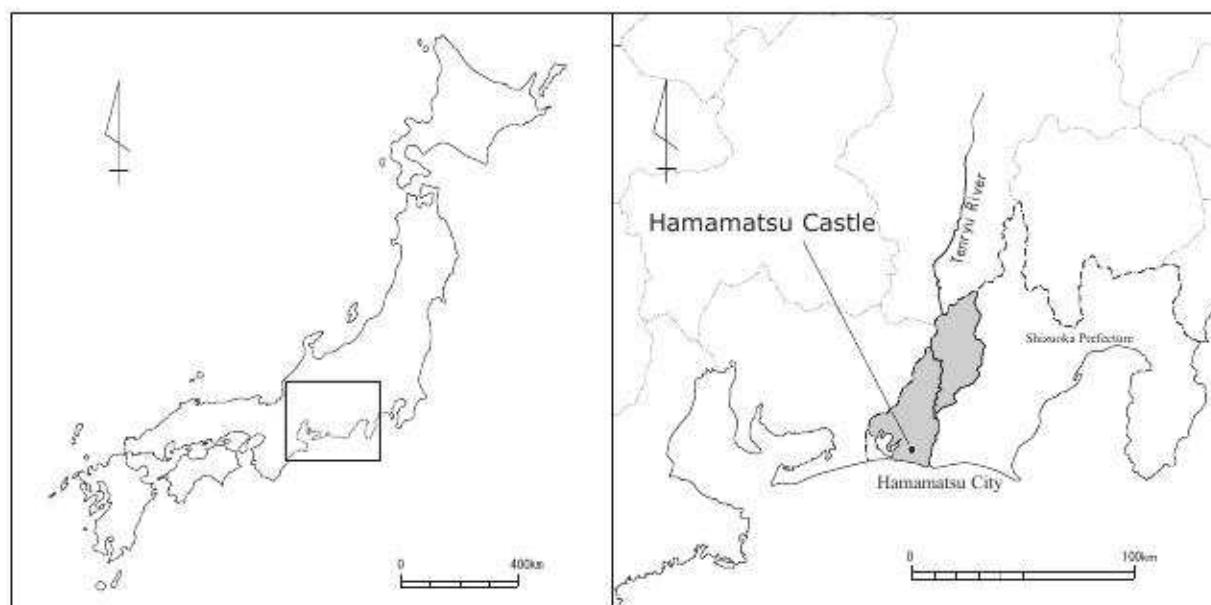


Fig.1 浜松城跡の位置

2 浜松城をめぐる環境

(1) 立地環境

浜松城跡は、三方ヶ原台地の東縁にあたる河岸段丘上を利用して築城された平山城である。城域は最大で東西 600 m、南北 700 m を測り、最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって本丸、二の丸、三の丸と曲輪が続く。また、浜松城跡は周囲を谷や低湿地に囲まれており、それらをうまく利用した堀や曲輪の配置となっている。

(2) 歴史的環境

原始・古代 浜松城周辺では、天守曲輪の北西部に位置する作左山横穴から出土した須恵器をはじめ、古墳時代から古代の遺物が確認されている。

中世 浜松城の前身は、現在の東照宮付近一帯の丘陵地に築かれた引馬城である。築城主は不明だが、15世紀頃から存在したと考えられ、16世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が城主を務めていた。16世紀後半に遠江を侵攻した徳川家康は、対武田軍の前線基地として引馬城に入城、浜松城と改称し城域の拡張や整備を行った。ただし、この時の浜松城は石垣や瓦葺き建物を配さない東日本的な軍事拠点の姿を呈していた。

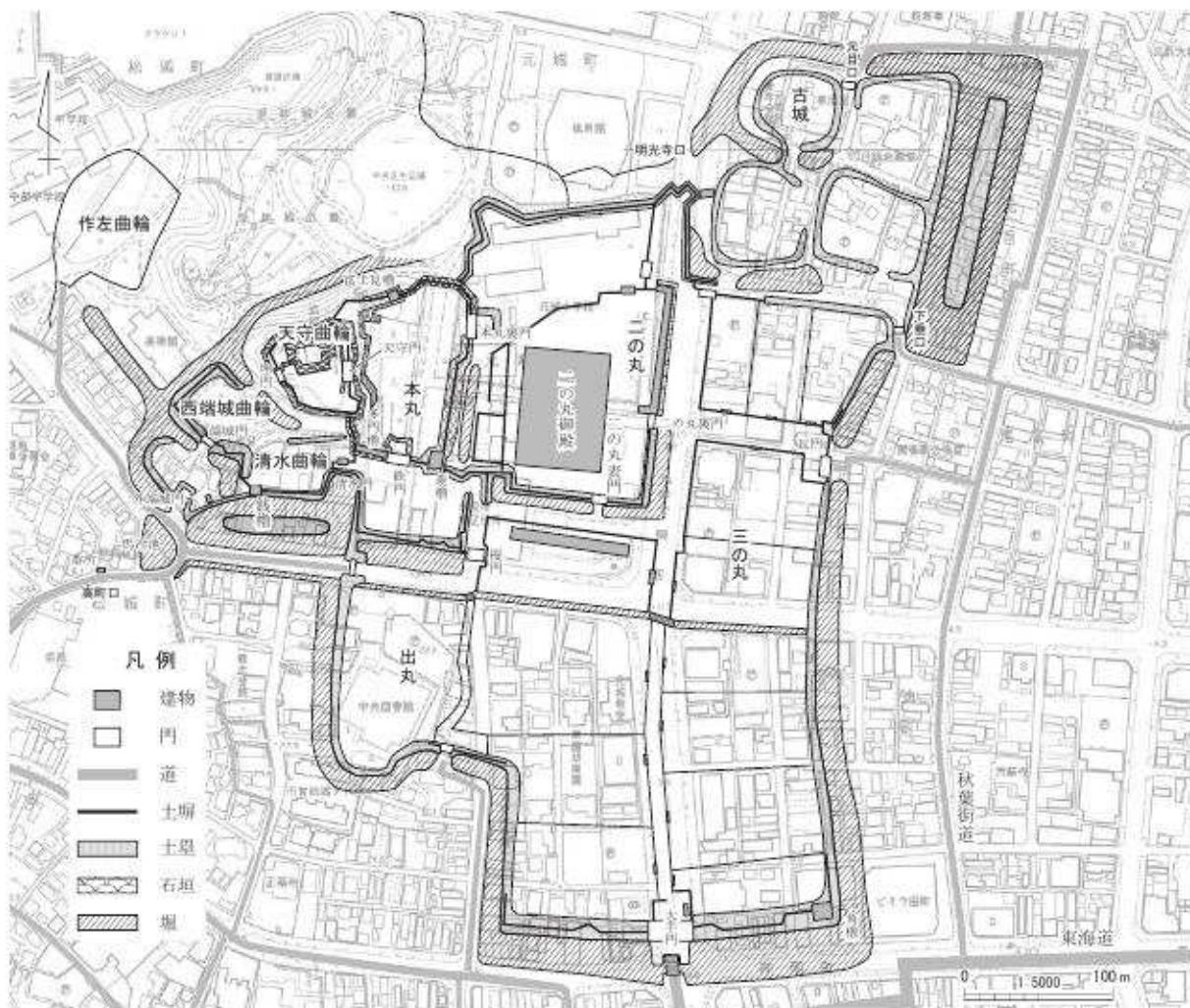


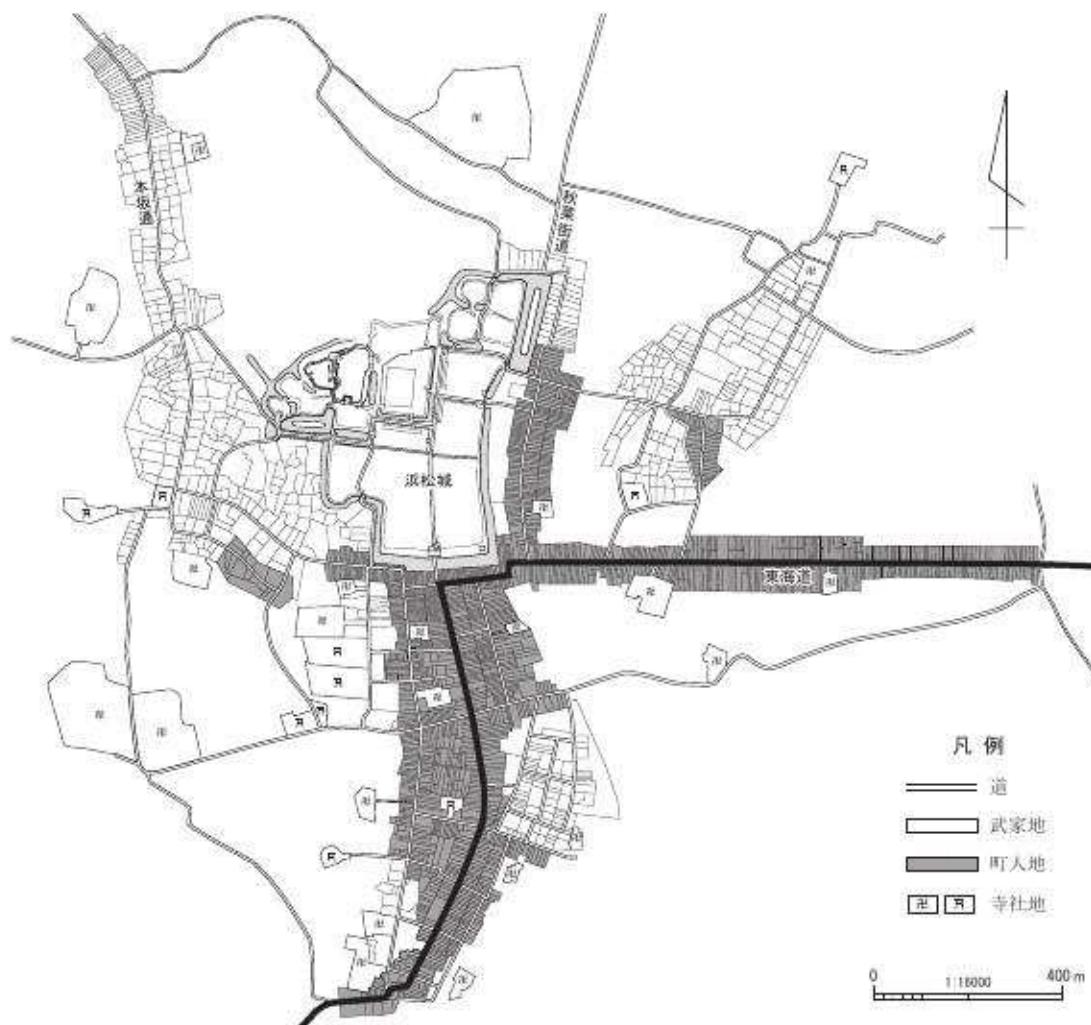
Fig.2 浜松城跡復元図

天正 18 年 (1590)、豊臣秀吉が小田原の北条氏を滅ぼし天下統一を成し遂げると、家康は関東へと移封された。東海地方の家康旧領の諸城には秀吉家臣の武将が配され、浜松城には堀尾吉晴が入城した。堀尾氏によって、浜松城は石垣や瓦葺き建物を持つ織豊系城郭へと一新され、現在みられるような姿へと大きく変わった。

近世 関ヶ原の戦いにおいて東軍が勝利すると、浜松城からは豊臣色が払拭され、徳川譜代の城となった。17世紀に描かれた絵図をみると、堀尾氏が創建したとみられる天守は既に失われ、新たに三の丸や城下町の整備が行われたことが確認できる。城下を通る東海道は大手の前で折れ曲がるように変更され、沿道には宿場町を形成し、東海道往来の際には大手門や三の丸隅櫓が眺望できるようにするなど大手門が浜松城を代表とする建物となった。

また、江戸時代の浜松城は大名にとって幕閣への登竜門として通過する城の一つでもあり、江戸時代を通じての歴代城主は九家二十二代を数える。

近現代 明治 5 年 (1872)、廃城令に先立ち、浜松城の建物や土地は民間に払い下げられ、三の丸、二の丸は宅地化が進行した。浜松城域の景観は大きく改変されたものの、天守曲輪と本丸の一部は開発から免れた。昭和 25 年 (1950) には天守曲輪を中心に浜松城公園が開設され、昭和 33 年 (1958) に堀尾氏時代から残る天守台上に復興天守が建築された。その後、天守曲輪と本丸の一部は昭和 34 年 (1959) に浜松市の史跡に指定され、現在に至る。
(杉山)



3 浜松城跡の調査履歴

今回の調査は、浜松城跡発掘調査の24次にあたる。その他、工事立会や不時発見等を含めると30回以上の調査が行われている(Fig. 4)。今回の調査は、23次調査において確認された天守曲輪の石壘の基底面及び星線の屈折状況の確認、瓦溜りの平面的広がりの把握、さらに推定櫓台の礎石等を確認することを目的として実施した。

(杉山)

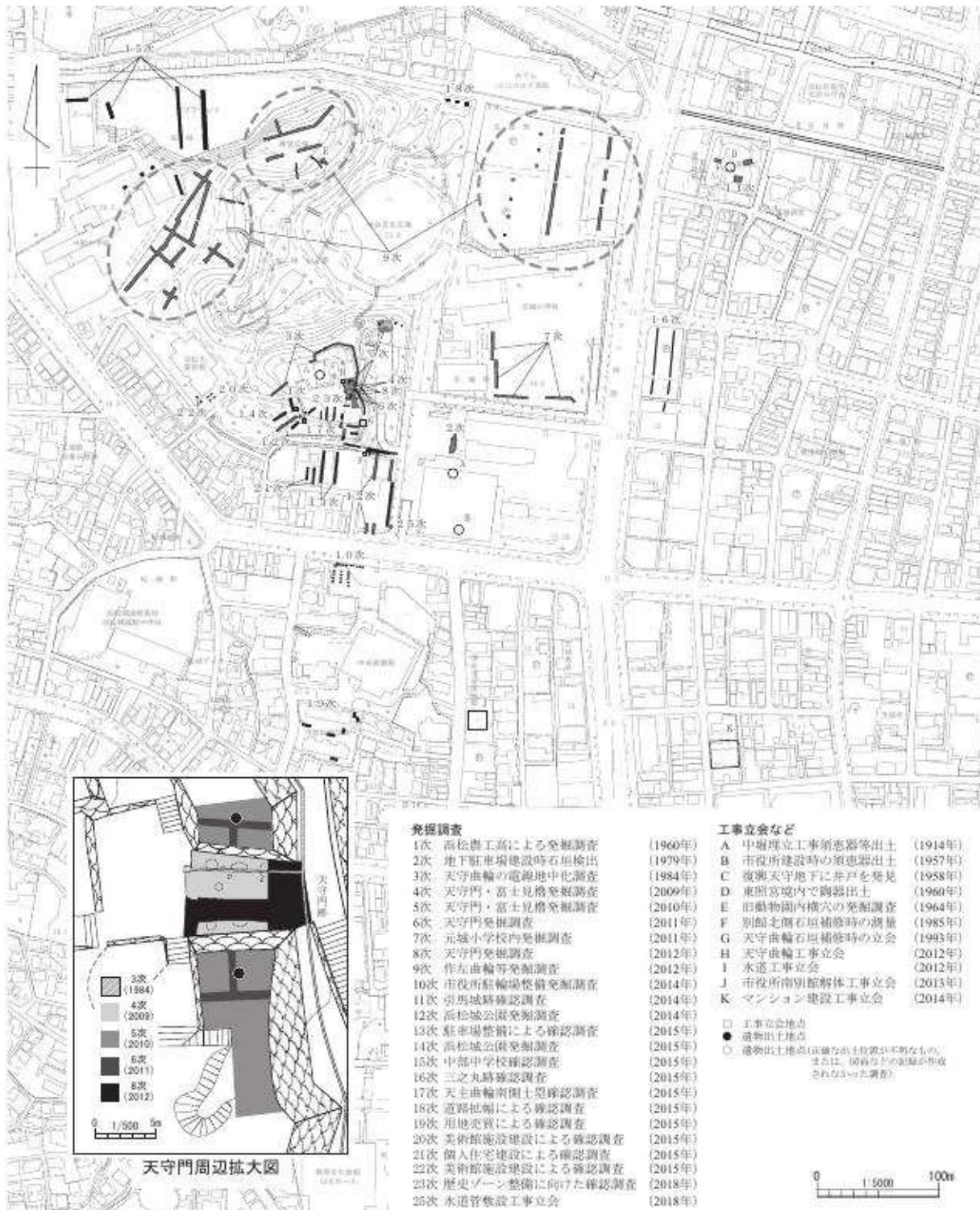


Fig.4 調査対象地の位置

Tab.1 浜松城跡における調査等の履歴

発掘調査

名称	年次	調査事由	成果等	文献
1次	1960年	浜松農工高による確認調査		
2次	1979年	市役所地下駐車場整備	工事時に石垣が発見され、測量等を実施	浜松市教委 1996
3次	1984年	電線地中化工事	天守曲輪周辺の調査で、未知の石垣等を確認	浜松市教委 1984 浜松市教委 1996
4次	2009年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の基礎等を確認	浜文振 2010
5次	2010年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の確認調査で、天守門構部の基礎構造と考えられる根石列等を確認	浜文振 2011
6次	2011年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡の確認調査で、櫓台石垣の裏込石等を確認	浜文振 2012a
7次	2011年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二の丸の確認調査で井戸等を確認	浜文振 2012b
8次	2012年	天守門復元工事	天守門に付随する瓦積み排水設備の全体像を確認	浜松市教委 2013a
9次	2012年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作左曲輪等の確認調査で、柱穴等を確認	浜松市教委 2013b
10次	2014年	市役所駐輪場整備	溝等を確認	浜松市教委 2015b
11次	2014年	遺構残存状況把握のための確認調査	引馬城跡（古城）の確認調査で、土塁等を確認。かわらけが多數出土	浜松市教委 2016b
12次	2014年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪、本丸西側土塁と登り堀を確認	浜松市教委 2015b
13次	2015年	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12次調査で確認したものと同一の可能性がある大型溝を確認	浜松市教委 2016a
14次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪、本丸西側土塁と登り堀を確認	浜松市教委 2016a
15次	2015年	中部中学校確認調査	浜松城跡の範囲内であるが、城郭に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2016a
16次	2015年	三の丸跡確認調査	三の丸跡に係る遺構は未確認であるが、戦国期以前の遺構と遺物を確認	浜松市教委 2017
17次	2015年	天守曲輪南側土塁確認調査	天守曲輪南側土塁の依存状態、土塁西側石垣基底部、曲輪内整地面の状況を確認	浜松市教委 2018a
18次	2015年	道路拡幅による確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
19次	2016年	用地売買による確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
20次	2015年	美術館施設建設による確認調査	堀とみられる落ち込みを確認	浜松市教委 2018b
21次	2015年	個人住宅建設による確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2018b
22次	2015年	美術館施設建設による確認調査	20次調査で確認したものと同一の可能性のある堀跡を確認	浜松市教委 2018b
23次	2018年	歴史ゾーン整備に向けた確認調査	富士見櫓跡周辺で残存状況の良好な石垣を確認。天守曲輪において、高さ2m以上の石壁の埋没状況と瓦集積を確認	浜松市教委 2018a
25次	2018年	水道管敷設工事立会	近世～近代の遺物を確認	2019年度報告予定

工事立会など（主要なもの）

記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914年	中堀埋立工事	須恵器出土	静岡県 1930
B	1957年	市役所庁舎建設	須恵器出土	浜松市教委 1996
C	1958年	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委 1996
D	1960年	元町東照宮社殿建設	境内より陶器等が出土	浜松市教委 1996
E	1964年	動物園内施設整備	作左山横穴を確認	向坂 1976
F	1985年	駐車場拡張工事	本丸南側石垣を確認	浜松市教委 1996
G	1993年	天守曲輪石垣修繕	天守台の盛土や裏込の状況等を確認	浜松市教委 1996
H	2012年	天守曲輪ミカン改植	瓦が出土	浜松市教委 2013c
I	2012年	水道工事	引馬城（古城）北側の堀を確認	浜松市教委 2014
J	2013年	市役所南別館解体工事	出丸から三の丸にかけての堀を確認	浜松市教委 2015a
K	2014年	マンション建設	三の丸東側の堀を確認	浜松市教委 2016c

参考文献

- 静岡県 1930『静岡県史』第1巻（旧版） 浜松市教育委員会 2013c『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
- 向坂鋼二 1976『浜松市動物園内作左山横穴墳』『森町考古』10 浜松市教育委員会 2014『平成24年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』 浜松市教育委員会 2015a『平成25年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 1996『浜松市指定文化財 浜松城跡－考古学的調査の記録－』 浜松市教育委員会 2015b『浜松城跡10』
- ㈱浜松市文化振興財团 2010『浜松城跡4次』 浜松市教育委員会 2016a『浜松城跡11』
- ㈱浜松市文化振興財团 2011『浜松城跡5次』 浜松市教育委員会 2016b『浜松における中世城郭の調査』
- ㈱浜松市文化振興財团 2012a『浜松城跡6次』 浜松市教育委員会 2016c『平成26年度 浜松市文化財調査報告』
- ㈱浜松市文化振興財团 2012b『浜松城跡7次』 浜松市教育委員会 2017『平成27年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2013a『浜松城跡8次』 浜松市教育委員会 2018a『浜松城跡12』
- 浜松市教育委員会 2013b『浜松城跡9次』 浜松市教育委員会 2018b『平成28年度 浜松市文化財調査報告』

3 浜松城跡の調査履歴

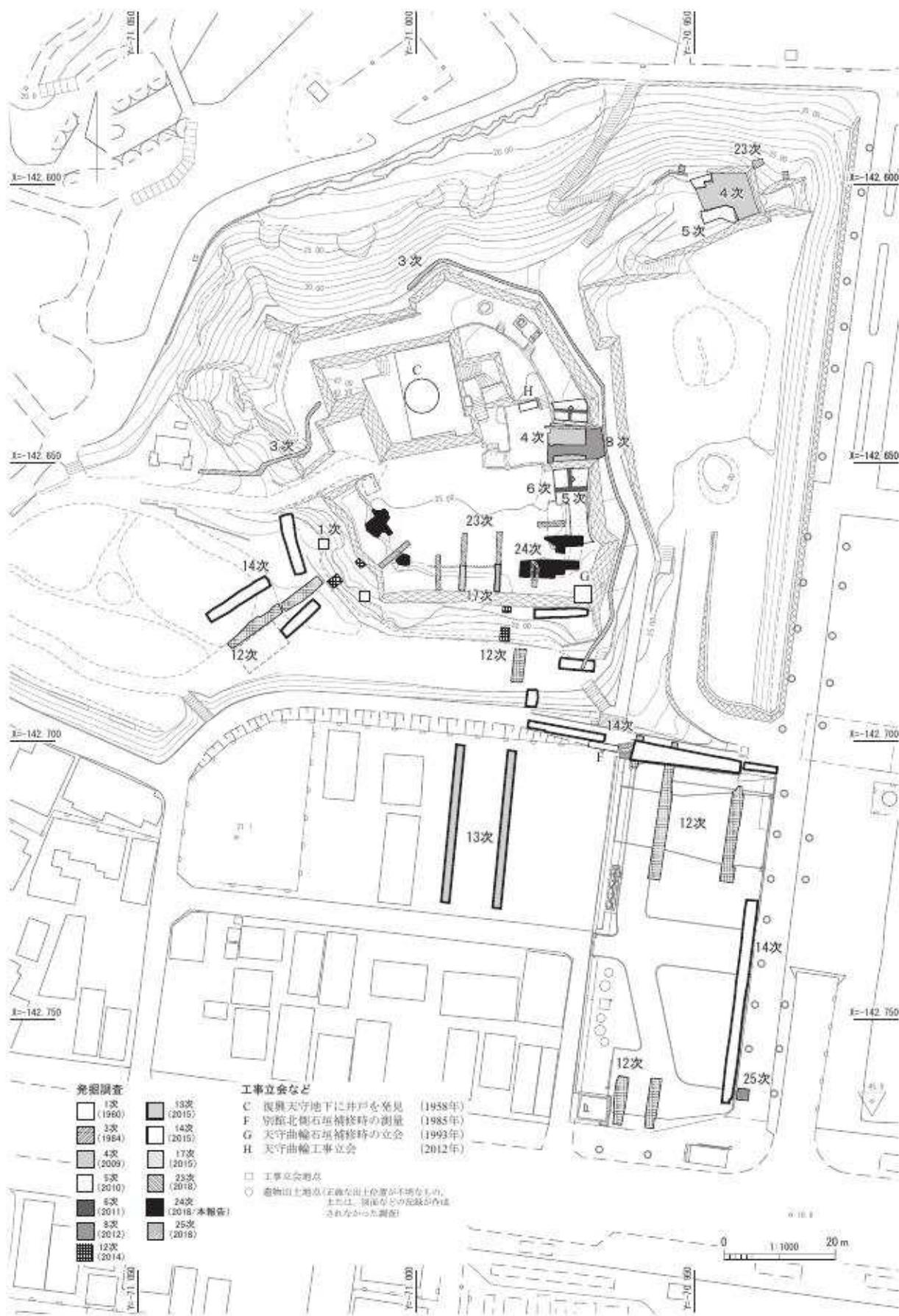


Fig.5 トレンチ配置図

4 浜松城跡の層位と時期区分

天守曲輪は、23次調査で石墨築造時の曲輪面まで調査されており、基本土層はその成果を基準とする。また、天守門南側における過去のボーリング調査で、標高30m付近まで盛土であるという結果が出ているため、こちらも合わせて参考としたい。

天守曲輪における基本土層は、上層から表土、明治時代以降造成土層（第5段階-1、2）、江戸時代堆積層（第4段階）、江戸時代整地層（第4段階）、江戸時代盛土層（第4段階）、安土桃山時代整地層（第3段階）、安土桃山時代地業層（第3段階）に大別できる。浜松城の変遷を紐解いていくと、15世紀代に築城された引間城から近現代までの5段階の時期に分けることができ（Tab. 2）、天守曲輪では、そのうち安土桃山時代から明治時代以降にあたる第3～5段階の時期の土層がこれまでに確認されている。また、戦国時代以前にあたる古墳時代の須恵器も出土することから、浜松城築城以前は古墳や横穴等の墓域として利用されていたことが推察される。石墨築造時の曲輪面（第3段階）は、現在の地表面から2m以上下で確認されている。安土桃山時代から江戸時代初頭にかけての時期（第3・4段階）には、何らかの理由によって短期間のうちに2m程天守曲輪内部が盛土され、その後公園造成などにより、現在の地表面の高さとなつた。標高30mより下は、東鴨江累層（地山）が堆積している。

なお、今回の調査時において、天守台東側の石垣の隙間から、瓦瓦の眼部と思われる遺物が表採された（Fig. 6）。

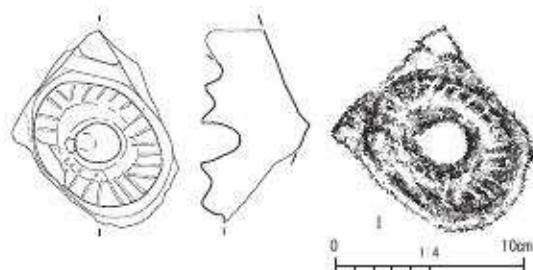


Fig. 6 天守台表採遺物

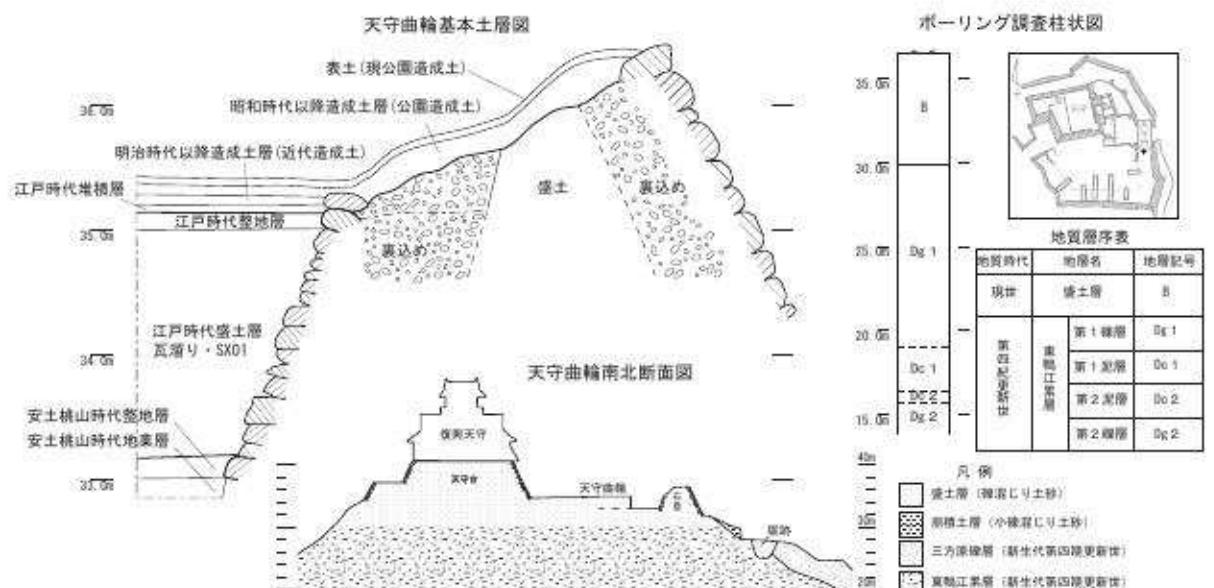


Fig. 7 天守曲輪基本土層図

Tab. 2 浜松城の時期区分

段階	時代	西暦	支配者	城主	できごと
第1段階	戦国時代前半期	15世紀～1570年	今川氏	飯尾氏（引間城）	15世紀代 引間城築城
第2段階	戦国時代後半期	1570年～1590年	徳川家康	徳川家康	浜松城に改称
第3段階	安土桃山時代	1590年～1603年	豊臣氏	堀尾吉晴・忠氏（～1600年）	織豊系城郭化
第4段階	江戸時代	1603年～1868年	徳川氏（将軍家）	譜代大名	城内と城下町の再整備
第5段階-1	明治時代～昭和時代初期	1868年～1945年	—	—	遊興地として市民に開放
第5段階-2	昭和時代～平成時代	1945年～	—	—	浜松城公園として整備

5 調査の方法と経過

調査区の設定 23次調査により明らかとなった石塁や瓦溜り等の遺構の詳細を確認するため、天守曲輪にトレンチを4箇所設定した。天守曲輪南東隅に約2m×1mと約6m×3mのトレンチ2箇所、南西隅に約2m×2mと約5m×3mの2箇所をそれぞれ設定した。トレンチの名称は、天守曲輪東から順に1～4トレンチとした(Fig. 10)。

調査方法 トレンチの掘削は、表土掘削から遺構検出まですべて人力で行った。石塁や瓦溜り上面の検出に努め、トレンチ壁面で層位を観察しながら掘り進めた。平面図・土層断面図・石垣立面図の測量は、浜松城公園内の基準点を用い、デジタル写真による三次元計測やトータルステーションを用いて縮尺20分の1で図面を作成した。写真撮影は主に銀塩フィルムを用い、中判フィルム(6×7判)と35mm判を使用した。また主要な遺構については4×5判を使用し、デジタルカメラを補助的に使用した。

現地調査 調査は2018年8月1日より開始した。天守曲輪に4箇所のトレンチを設定し(1～4トレンチ)、各トレンチについて石塁の延長や安土桃山時代の瓦が大量に出土した瓦溜りの範囲確認に努めた。成果として、瓦溜りの広がりおよび天守曲輪南東隅に石列が検出された。9月26日には、浜松城公園歴史ゾーン整備専門委員会による現地視察・指導があり、調査方法や成果に対する助言が寄せられた。現地調査は同年12月21日まで行った。

公開発掘・発掘調査通信 現地調査中、普段は見ることのできない発掘調査の作業風景を見学してもらうため、3回にわたり一般公開した。それぞれ、400名(8月18日)、450名(9月2日)、500名(10月7日)もの市民の方が発掘作業を見学した。また、調査期間中に調査の進捗状況やこれまでの成果をまとめた『発掘調査通信』を複数回発行し、見学者の方への情報公開を行った。

現地説明会 2018年11月3・4日に天守曲輪の発掘調査成果を公開する現地説明会を開催した。2日目はあいにくの天気であったにもかかわらず、2日間合計で875名の見学者を迎え入れ、市民らは新しく発見された石列や大量の瓦に興味深く見入っていた。

整理作業 現地調査終了後、2018年12月～2019年3月に、株式会社フジヤマ袋井営業所において整理作業を実施した。
(坂下)

現地調査参加者 大野功、澤木延文、鈴木義則、寺田達人、山口義信

整理作業参加者 奥野加織、高林美保、豊田七重、原田和子、藤田優子



Fig.8 公開発掘風景



Fig.9 現地説明会

第2章 調査成果

I 検出遺構

(1) 1トレンチ検出遺構

調査区概要 (Fig. 12・13) 石垣の基底面を確認する目的で、約2m×5mの東西方向に長いトレンチを設定した。北側に隣接する23次調査9トレンチの調査では、石垣内側石垣を検出できなかったため、23次調査よりさらに東側へ調査区を設定し、石垣内側石垣の検出に努めた。途中、調査状況に応じて、南へ約1.5m×1m、東へ約2m×2.5m拡張した。

1トレンチは近代以降の造成により、深くまで攢乱が及んでいた。深い箇所では地表から2m下まで造成されている。そのなかで層の最大厚が1mある8層は、明治時代の所産である磁器(82)や大正9年硬貨(83)など近代以前の遺物が多くを占めている。近代の天守曲輪では、茶店が置かれており、土層も近代土層の再堆積層と考えられる。

天守曲輪南東隅石垣 トレンチ中央部で石垣を構成する石列を検出した。延長約4mの石列が東西方向に延び、途中南へ直角に折れ、後述する2トレンチの石垣石垣に接続すると推定される。隅角を含む東の2石は、石垣の石垣に使用されている石材と異なり、幅50～60cm、奥行40cmの扁平で大型の礫を使用している。その上面は平坦である。隅角から3石目は石材が抜けているが、次の石材までの幅から、3石目も大型の礫が使用されていたと推定される。石列の内側では、直軸20～30cmの角礫が充填されるように検出された。角礫は、調査区外の南側まで広がっていると思われる。また、下層状況を確認するため石列北側にサブトレンチを設定し掘削したところ、石列より一段下がったところに扁平な礫が検出された。調査区の制約により1石しか確認はできなかったが、石列とは20cmほどの段差となり、階段の可能性が考えられる。その一段下の礫を埋めている土層は砂礫とシルトの互層となっており、石列の高さで整地されていることが確認された。整地面の標高は34.8mで、23次調査で確認された、天守曲輪の石垣を埋めた後の整地面の標高と近似する。よって石列天端まで埋められたのも、同時期と考えられる。また、石列東側で、東西方向に延びる石垣が1～2段確認された。石列と接続しており、検出状況から、石列は石垣築造後に付加されたものと思われる。

1トレンチ遺物出土状況 トレンチ南西隅の江戸時代堆積層から、後述の瓦溜り(SX01)の一部とも考えられる瓦が検出された。その直上の近代造成土からは、軒瓦や棟瓦を含む瓦がまとまって出土した。公園造成土(8層)からは、大正9年製の1銭硬貨や、明治期と思われる磁器碗が出土した。

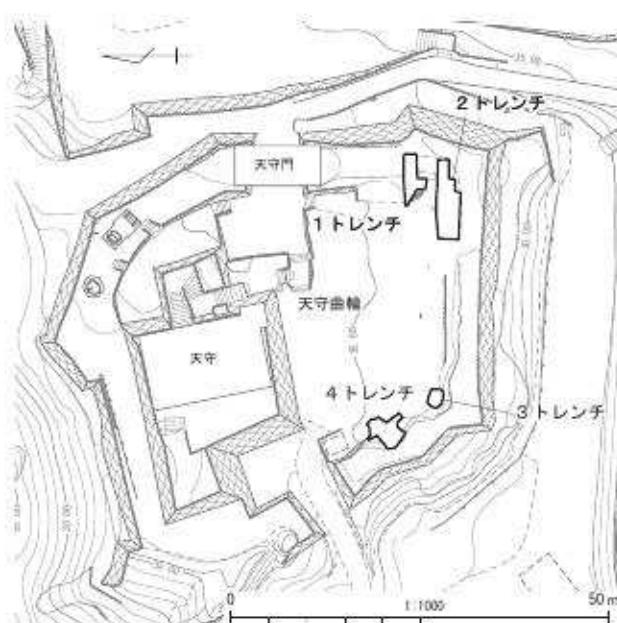


Fig.10 24次トレンチ配置図

1 檢出邊構

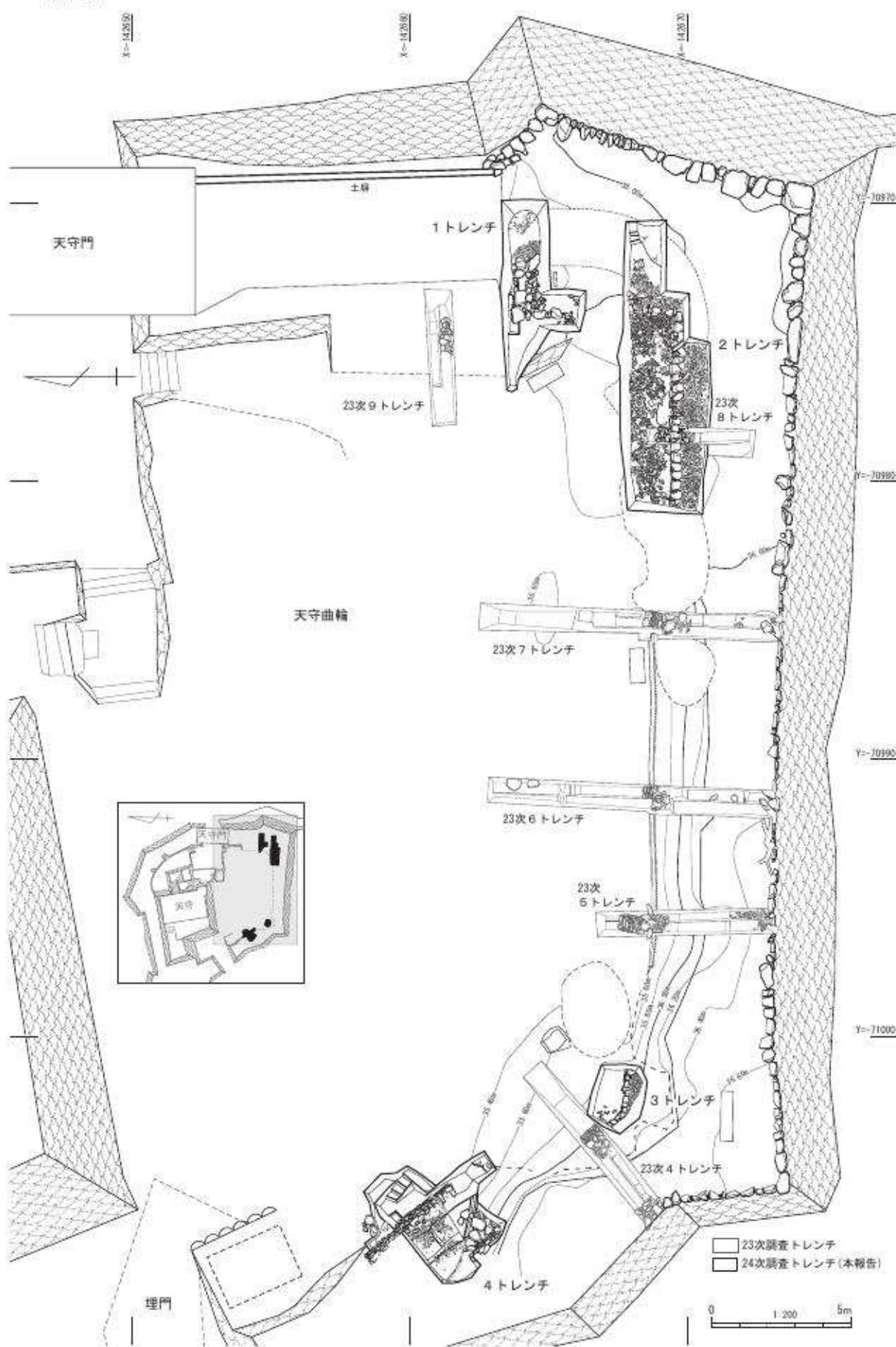
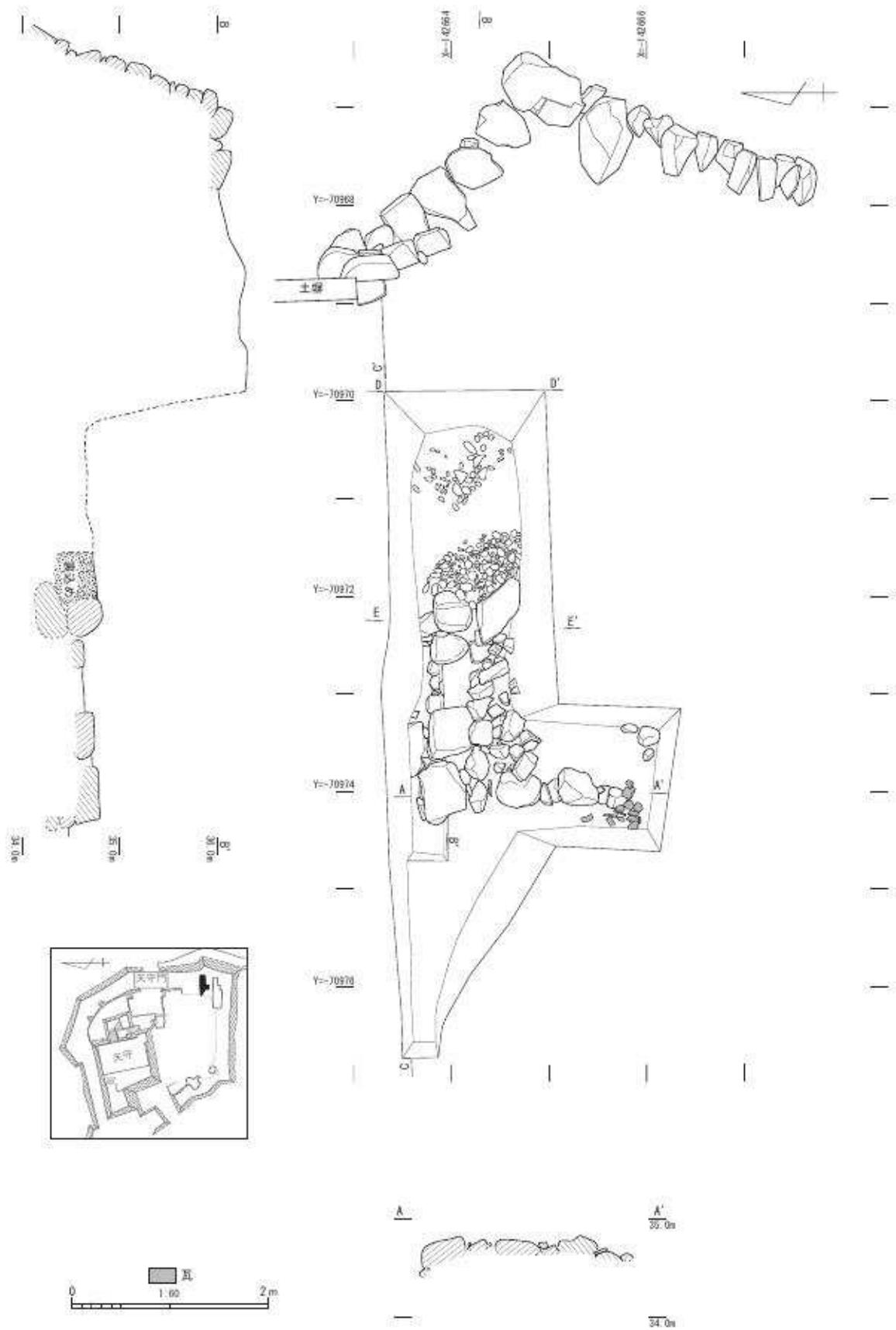


Fig.11 天守曲輪トレンチ配置図



1 検出遺構

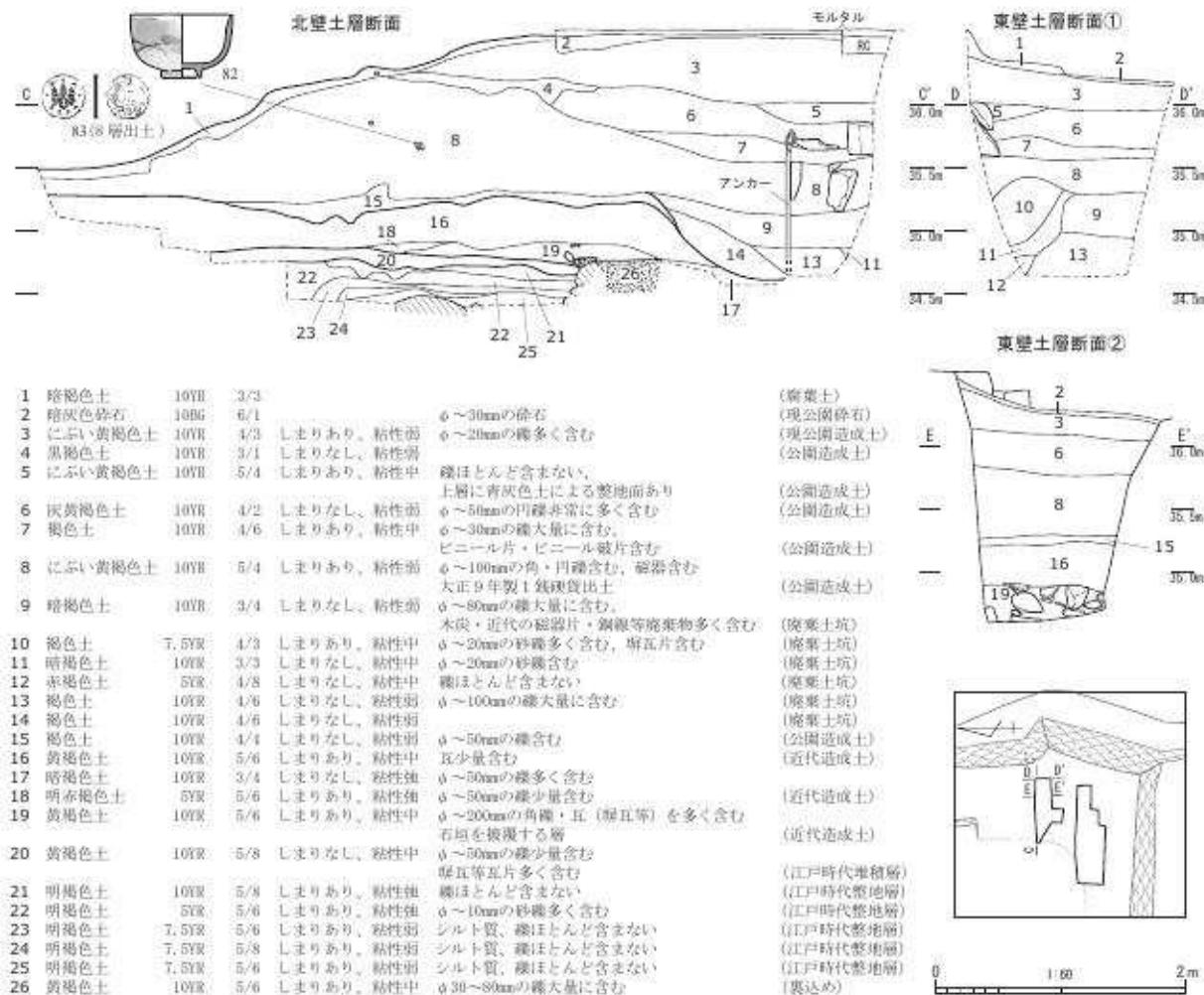


Fig.13 1 トレンチ 土層断面図

(2) 2 トレンチ検出遺構

調査区概要 (Fig. 14 ~ 19) 2 トレンチは、23次調査で確認された瓦溜り (SX01) の範囲確認と櫓等の遺構確認を目的として設定した。トレンチの大きさは約 2.5 m × 6 m である。途中、調査状況に応じて、東へ約 4 m 拡張した。

2 トレンチにおいても、近代以降の造成が石壙天端まで及んでいるのが確認された。一部は瓦溜りまで掘り込まれているが、全体的には瓦溜りの残存状況は良好である。瓦溜りは、江戸時代の整地層 (13 層) 直下に、製作技法など古い様相を示す瓦を多く含む SX01 と、整地層直上に新しい様相を示す瓦を多く含む SX02 を検出した。

天守曲輪南東隅石壙 1 トレンチで検出された、石壙石列の南側延長部分が 2 トレンチにおいても検出された。1 トレンチの石壙北西隅角から南へ約 6 m のところで西へ直角に折れ、東西方向の石壙北側石垣へ接続している。トレンチを東へ拡張し石列の内側を調査したが、拳大以下の礫が充填された裏込めを検出したのみで、櫓礎石などの基礎構造は明らかにされなかった。トレンチ東隅では、表土付近から南東隅の石壙へ向かって深く掘り込まれた擾乱が確認された。覆土の混入物や位置から、平成 5 年に行われた天守曲輪南東隅の石壙積み直し時の擾乱と考えられる。

SX01 (瓦溜り) 2 トレンチの石壙北側でほぼ全面にわたり瓦溜り (SX01) が検出された。SX01 は、江戸時代の整地層 (13 層) の直下にあたり、標高は 34.8 m 付近である。残存する石壙天端石

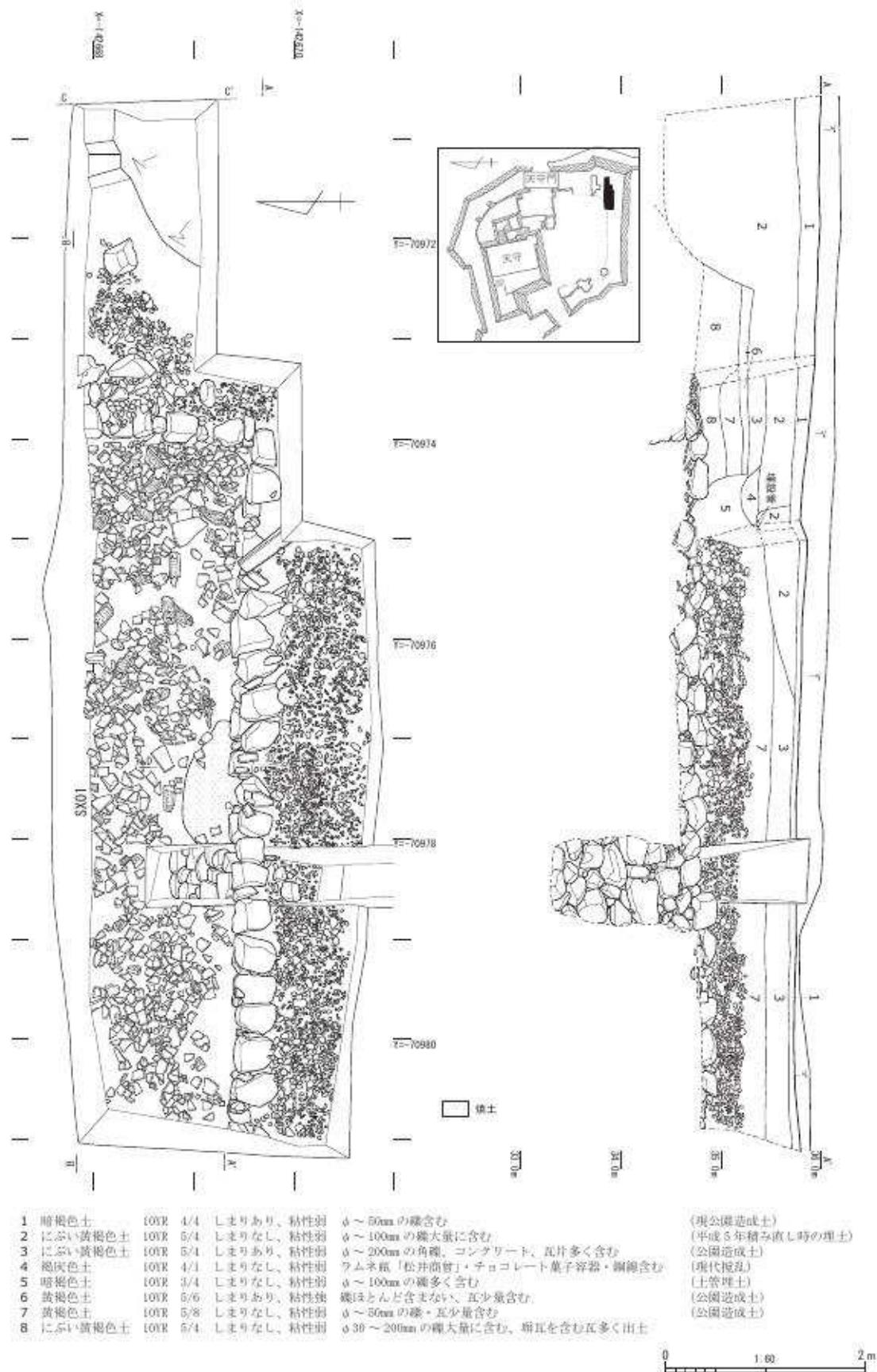


Fig.14 2トレンチ実測図

1 検出遺構

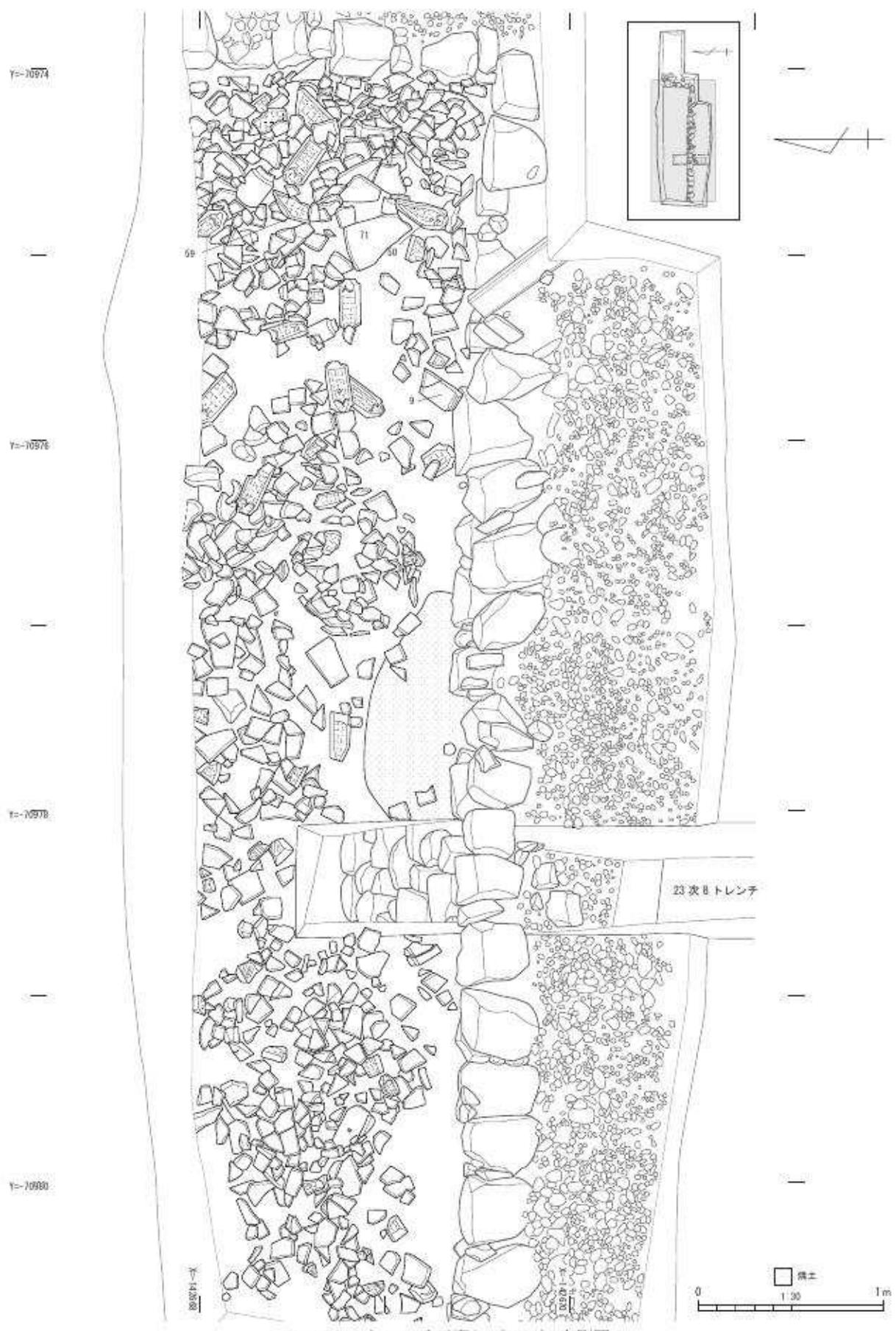


Fig.15 2トレンチ瓦福り (SX01) 実測図

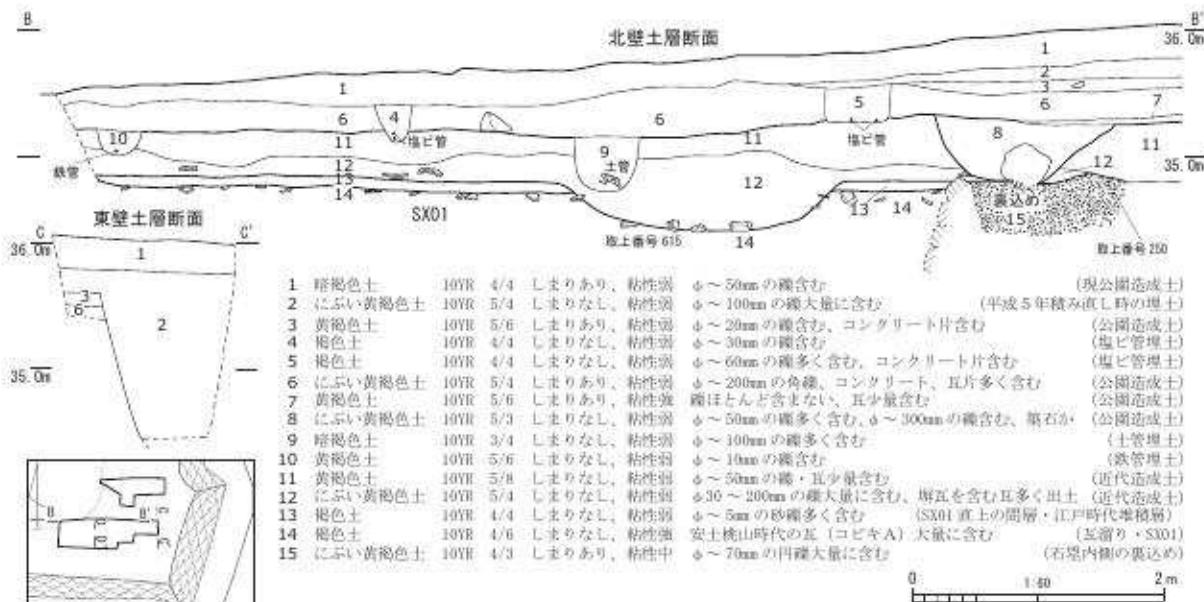


Fig.16 2トレンチ 土層断面図

まで堆積しており、深さは少なくとも 1.4 m 以上ある。瓦は特に南東隅に集中しており、南東隅から離れるにつれ瓦の堆積密度は薄くなっているのが観察できる。完形に近い個体や遺存部分が大きい個体が多く、それぞれが折り重なるようにして検出された。また、谷丸瓦や鬼瓦などの道具瓦もそれぞれ近接して複数個体出土しており、瓦葺きの建物が倒壊して瓦が堆積した可能性を示唆している。

また、23次調査8トレンチを利用し、8トレンチ西側を30cm幅で断ち割りを行った(Fig.17)。瓦を1点ずつ計測し、層位的に瓦を取り上げた。掘削可能な深さまでではあるが、SX01の内部は瓦の密度の違いでおおよそ3層(i～iii層)に分けることが可能であった。堆積土は同一であるが、下層にいくにつれ瓦の堆積密度が濃くなる様子が観察された。特にiii層は間に土を殆ど挟まず、瓦が隙間なく堆積していた。土を殆ど挟まない状況から、これら SX01 の大量の瓦は、比較的短期間



Fig.17 2トレンチ SX01 土層断面図

1 検出遺構

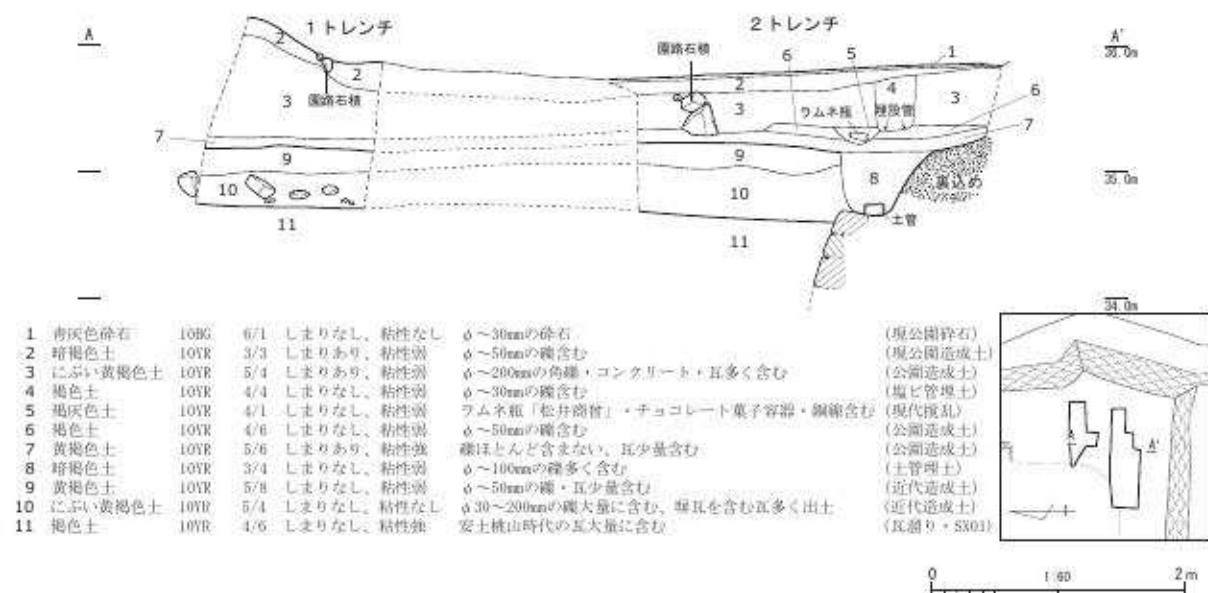


Fig.18 1・2トレンチ 土層断面図

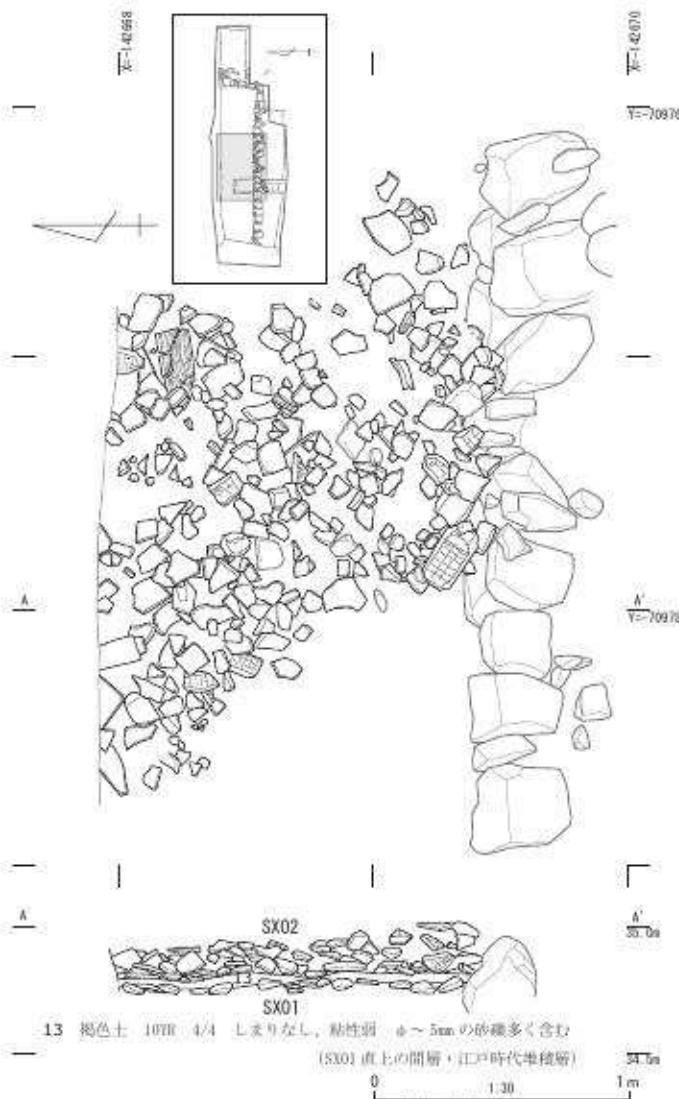


Fig.19 2トレンチ SX02 実測図

に形成されたとみられる。

SX02 江戸時代の整地層直上で検出された瓦溜りで、検出面の標高は34.9 m付近である。完形に近い瓦も見受けられるが、小破片が多くを占める。SX02からは、塙瓦や家紋瓦など新しい様相を示す瓦が一定量存在する。古い様相を示す瓦のみが出土するSX01とは異なり、SX01とSX02では時期差が認められる。SX01と比較すると堆積の厚さも10 cm程と薄く、瓦溜りの広がりも限定的である。

2トレンチ遺物出土状況 SX01からは、丸瓦や平瓦が多く検出され、軒瓦は少數であった。一方、谷丸瓦や鬼瓦、SX01に含まれる可能性が高い鰐瓦も含めると、道具瓦は一定量出土している。いずれも、SX01は完形に近い遺存部分の大きいものが折り重なるように堆積している。一方、SX02は相対的に小破片が多く、塙瓦や家紋瓦など新しい様相を示す瓦が確認されるなど、コビキA技法主体の古い様相を占めるSX01とは出土状態や出土する瓦の種類に違いがみられる。

(3) 3トレンチ検出遺構

調査区概要 (Fig. 20) 3トレンチは、天守曲輪を囲う石垣の南西隅角を明らかにする目的で設定した。その大きさは約2m四方である。23次調査4・5トレンチの中間にあたり、両トレンチで検出した石垣石垣の延長を結んだ位置にあたる。

調査の結果、天守曲輪南西隅の石垣内側隅角が検出された。

天守曲輪南西隅石垣内側石垣 検出された石垣は、総延長2.1m分が確認され、浅い箇所では、地表面から30cm程掘削したところで確認された。トレンチ東端から約1.5mで北西に鈍角に折れ、南西隅角の角度は約137°を測る。石垣の墨線方向は、隣接する23次調査4トレンチで検出した石垣と一致する。

最大の築石は、幅40cm、高さ15cmを測り、石垣は最も高い箇所で築石3段分（残存高約40cm、標高35.6m付近）、低い箇所は築石1段分（残存高約10cm）が確認された。最上段の築石が水平ではないことから、石材が抜かれている箇所があるとみられ、石垣上面は近現代の造成により削平されていると考えられる。検出された石垣内側石垣は、石垣外側石垣の天端と1mほどの比高差がある。石垣に伴う裏込めには、直径20～50mm前後の栗石が大量に使用され、固く締まっている。地表から約0.6mで、江戸時代の堆積層とみられる層から瓦が面的に検出されたため、下層の調査は行わず、調査は瓦検出面で終了した。

3トレンチ遺物出土状況 石垣屈曲部より西側の江戸時代堆積層と考えられる層より、平瓦・丸瓦等がある程度集中して出土した。いずれも小破片が多い。これらは記録後埋め戻し、地中保存とした。

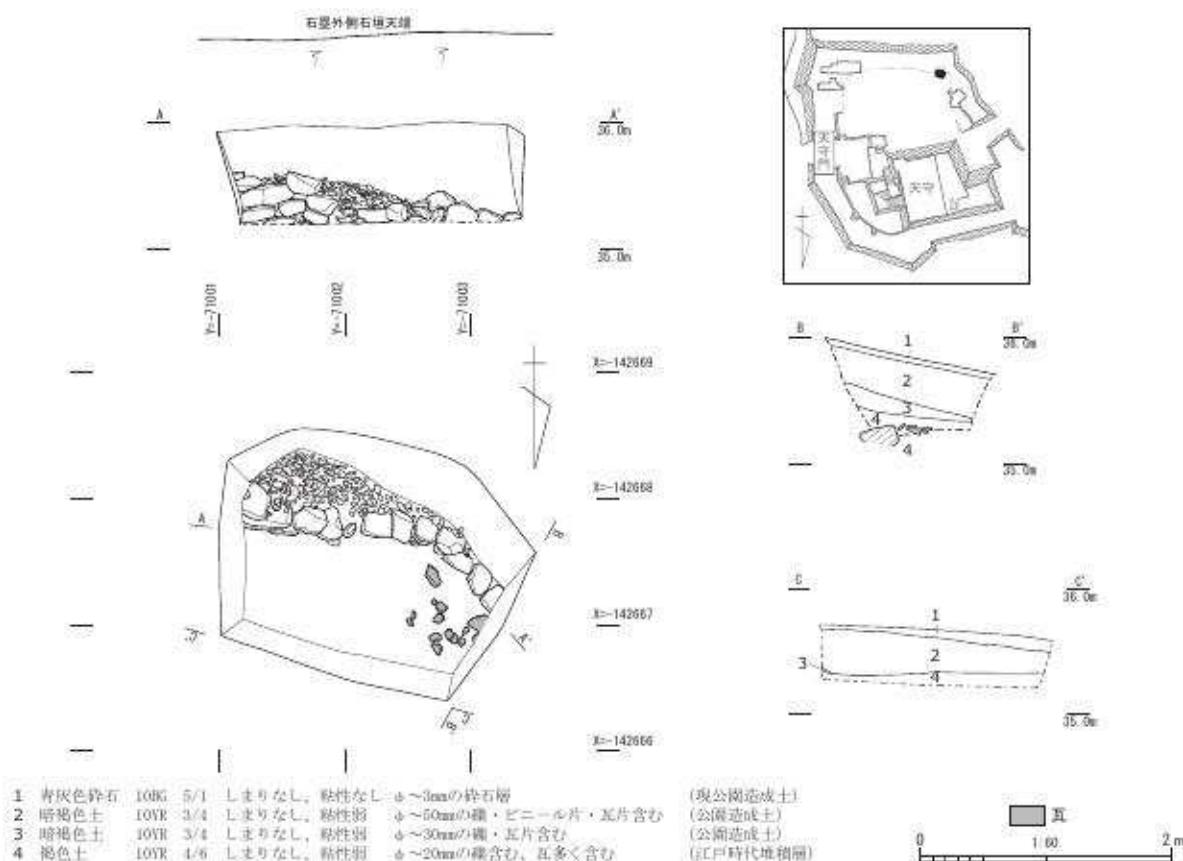


Fig.20 3トレンチ実測図

(4) 4トレンチ検出遺構

調査区概要 (Fig. 21) 4トレンチは、石壘基底面と屏風折内側の墨線を明らかにする目的で、埋門から南へ約6mの箇所に設定した調査区である。トレンチの大きさは約5m×4mである。調査前は埋門から約6mの箇所で石垣が消滅していたが、調査によってその延長の墨線を確認した。

天守曲輪西石壘内側石垣 埋門から南側へ延びる石壘内側石垣の墨線約4mを新たに検出した。埋門から南へ約6mで石垣は途切れしており、それより南側では確認されなかった。石壘内側石垣の平面形は、ほぼ直線で南東方向に墨線が延びている。地表面から約0.7m掘削したところで固く締まった整地面が検出され、基底石が確認された。基底部の標高は34.4mで、23次調査で確認された安土桃山時代の曲輪面の標高(33.0m)とは大きく異なる。整地面下層の状況を確認したところ、整地層(11層)は約8cmの厚さがあり、その下層は締まりのない埋土が堆積している。この埋土は、23次調査で確認されている、江戸時代に短期間で石垣が埋められた際の埋土と同一の可能性が高い。これらのことから、検出した石垣は天守曲輪が埋められたあとに築造された江戸時代の遺構と考えられる。

検出した石垣は、高さ約0.8mで、地上に露出していた石垣を含めると残存高約1mを測る。自然石を積んだ野面積の石垣で、使用石材はほとんどが角礫の珪岩であるが、一部円礫の使用も認められる。築石は、大きいもので幅30cm、高さ20cmを測る。築石の控えは確認できるもので50cmを測るものがある。石垣勾配は、築石から2段目までは81°と急勾配であるが、それより上部は72°とやや緩く勾配が変化している。標高35.0m付近で、石垣の築石と築石の間から土管が露出している箇所が2箇所みうけられる。それを境に、石垣の上部はやや乱雑に積まれているため、地上に露出していた石垣は、後世に積み直されていると考えられる。石垣の裏込めは、直径2~10cmの栗石が大量に使用されており、裏込めの幅は0.8mを測る。

石壘内側石垣から西に約2.5mのところで、石壘内側石垣とほぼ平行して延びる石垣が新たに検出された。検出された石垣は、延長約1.5m、残存高約0.5mと低い。木の根の影響や後世の攢乱によって築石が動いているものや割れているものもみうけられ、残存状況はあまり良くない。石垣前方には扁平な礫が敷かれるように検出された。最大の礫で、幅40cm、長さ50cm、厚さ20cmを測る。また、石壘内側石垣の裏込め部分は、北から南に向かって20cm程の段差も確認できる。これらのことから、約2m幅の階段遺構になると考えられる。

4トレンチ遺物出土状況 遺物の出土状況は、比較的希薄であるが、扁平な礫が検出された南側では、多くの瓦がまとまって検出された。また、近現代の遺物も少量ながら出土している。

2 出土遺物

1トレンチ出土遺物 (Fig. 22) 1は、石壘を被覆する層(19層)から出土した家紋瓦である。繋九目結紋で、本庄(松平)氏在城期(1702~1729年、1749~1758年)の所産とみられる。2は、連珠三ツ巴紋の鳥伏間瓦で、凹面に目の細かい布目と突起が確認できる。3は、宝珠紋の中心飾りをもち、子葉をもつ唐草紋が両側にあしらわれている。天守門跡(浜松市教委2013、Fig. 15-10)からも同じ紋様の軒平瓦が出土している。また、横須賀城跡や久野城跡にも類例が知られている(加藤1993a)。4は、19層から出土した谷唐草瓦である。5は、平な瓦に線刻が施されているが、小片のため種類は不明である。6は、8層から出土した鰐瓦の胴部片である。鱗はU字形のスタンプにより鱗同士をきれいに重ねて表現されている。

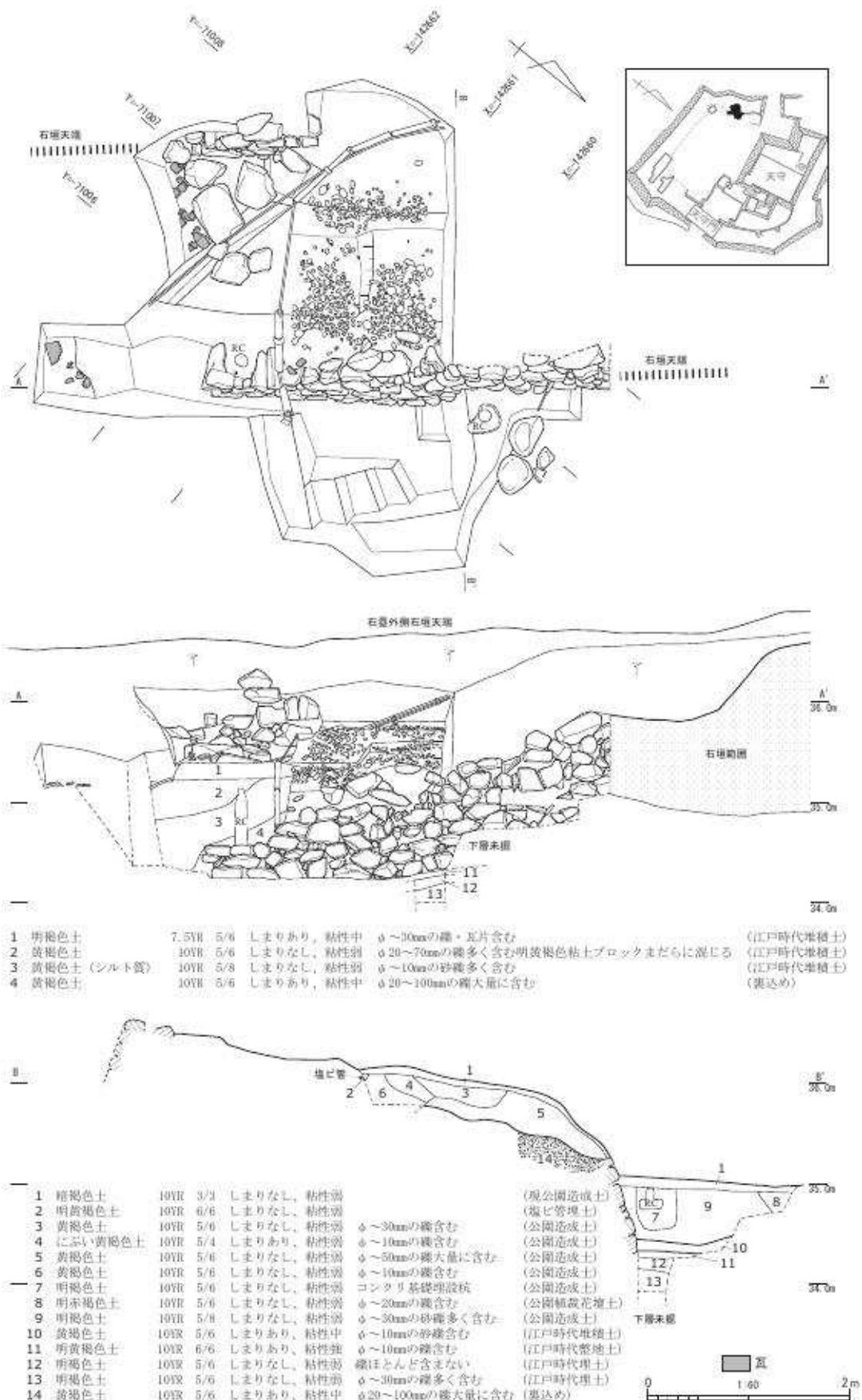


Fig.21 4トレンチ実測図

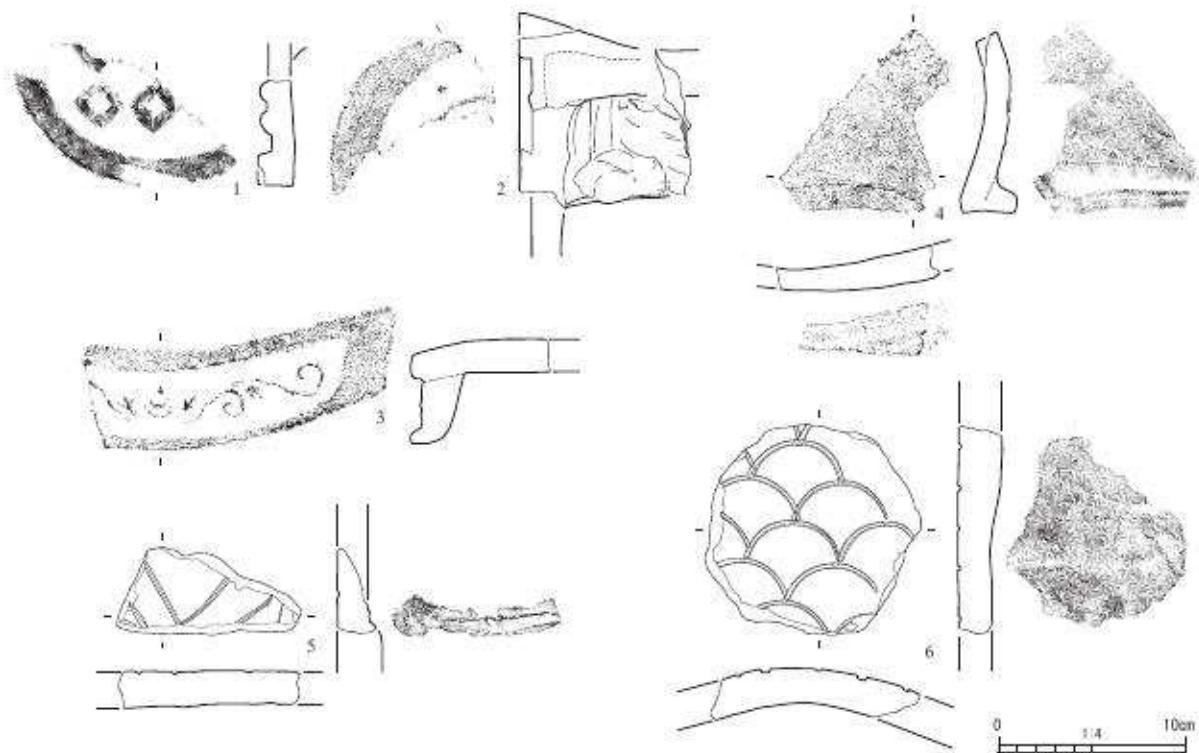


Fig.22 1 トレンチ 出土瓦

2 トレンチ SX01 出土遺物 (Fig. 23 ~ 30) 7 ~ 62 は SX01 から出土した遺物である。このうち、29 ~ 43、47 ~ 58 は 23 次調査で出土した遺物である。63 は上層から出土した遺物であるが、SX01 に伴う可能性が高いことから合わせて示す。

7・8 は鳥伏間瓦で、それぞれ i 層と ii 層から出土した遺物である。7 は三ツ巴紋のみで連珠がなく、外縁が細くなっている。8 は連珠三ツ巴紋で、長く伸びた巴紋が圈線に繋がっている。丸瓦部の凹面は、コビキ A 技法と横縫い取り痕、四角い釘穴痕が観察できる。9~14 は軒平瓦で、それぞれ i 層 (9・10)、ii 層 (11・14)、iii 層 (12・13) から出土した。9~12 は 3 反転飛唐草紋の范切り縮めで、そのうち中心飾のわかる 10~12 は三葉紋である。13~14 は 3 反転均整唐草紋で、中心飾のわかる 14 は五葉紋である。両者とも水返しが付く。頸部の成形は、瓦当貼り付け技法 (9・11・13) と頸貼り付け技法 (12・14) がみられる。15~43 は丸瓦で、SX01 の断ち割りによって i 層 (15)、ii 層 (16~20)、iii 層 (21~28) からそれぞれ出土している。凹面にコビキ A 技法がみられるものがほとんどを占め (15~26、29~40)、横縫い取り痕 (15~21、24~41) や吊り紐圧痕 (16~20、22~26、29~36、39、40、43) も多く観察される。同時に、縦方向の工具刺突痕が残る棒状叩痕 (15、21~23、27、28、30~32) がみられる個体も一定数存在する。44~58 は平瓦である。44~45 は i 層、46 は iii 層からそれぞれ出土した。44 は他と比較しても大型の平瓦で、凸面には焼成前に指で描いたと思われる文字のようなものが確認されるが、判読はできない。ほとんどの平瓦は、板ナデにより丁寧に作られているが、49 のように指圧痕が残る個体もみうけられる。59~62 は、道具瓦である。59・60 は谷丸瓦で、i 層から出土した。両者とも丸瓦の左下部分が斜めにカットされている状況で、丸瓦部上半に釘穴が穿たれている。61・62 は鬼瓦と思われる破片で、iii 層から出土した。61 は、表面に幅約 6 cm の外縁があり、一段低くなった内側は、櫛状の工具で縦方向にやや乱雑に刻みを入れている。内側は焼き斑がみられるため、刻みを入れた箇所に何かが接合されていたと考えられる。裏面は、丁寧にナデが施されており、右下に釘穴が穿たれている。

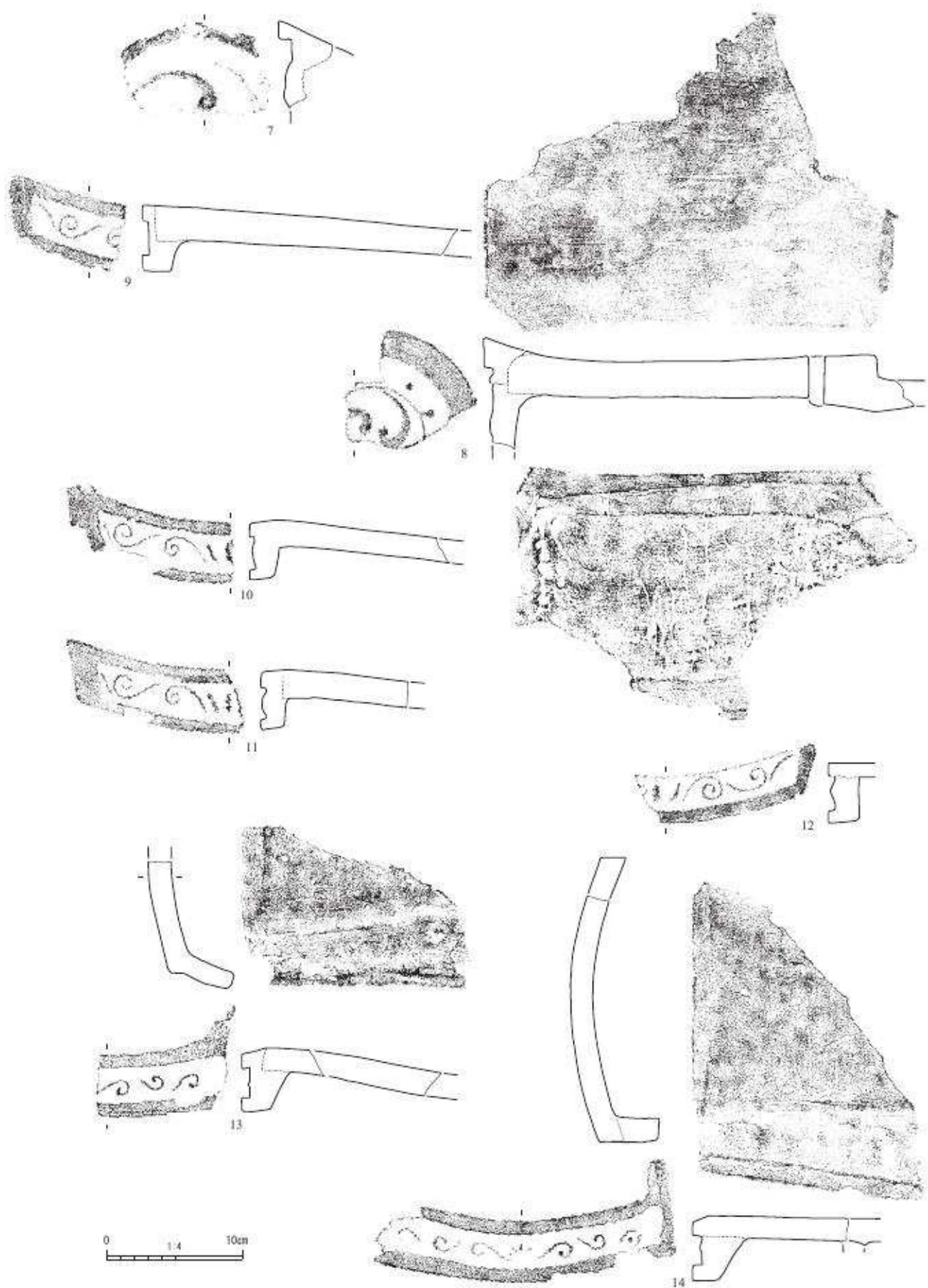


Fig.23 2 トレンチ SX01 出土軒瓦

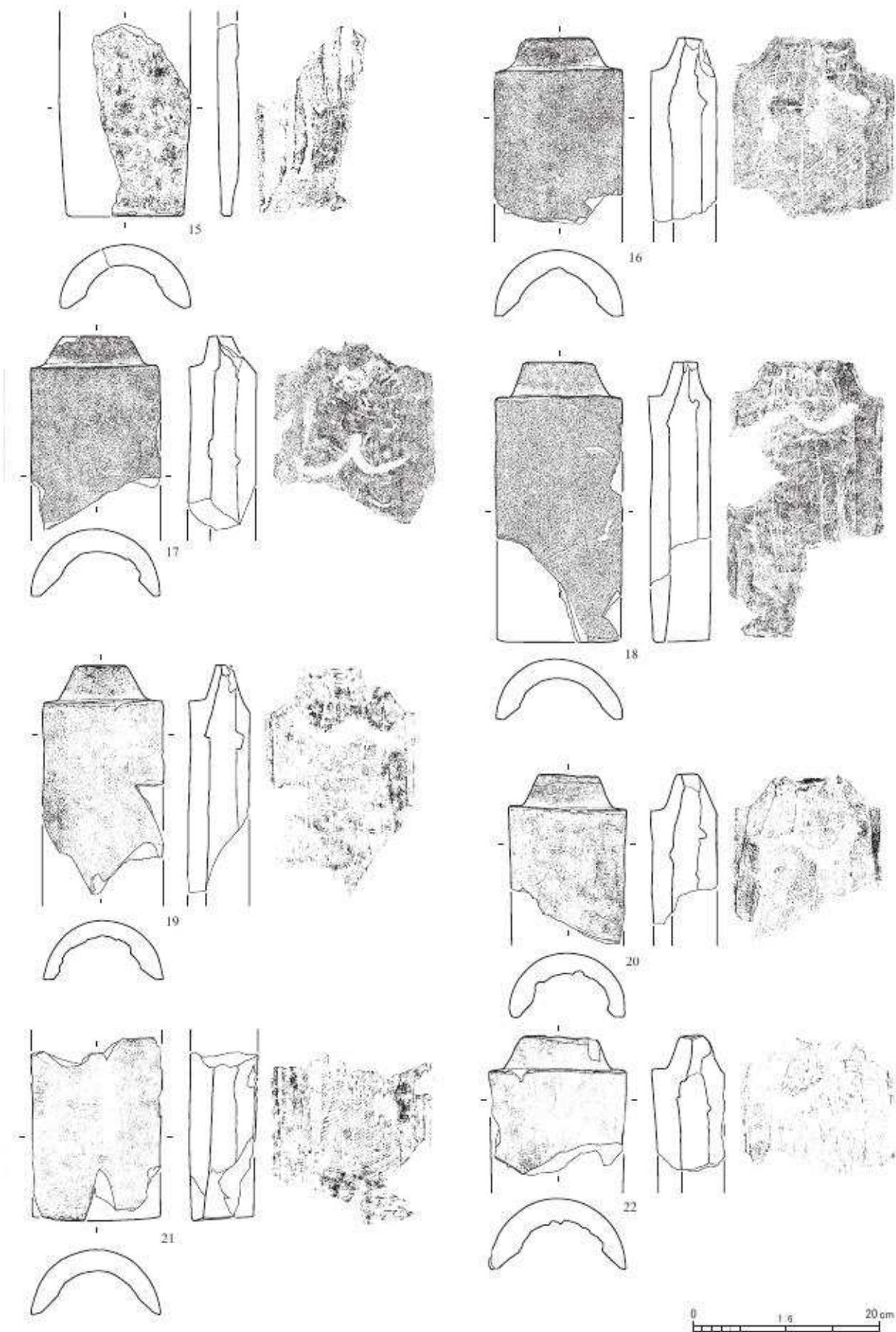


Fig.24 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (1)

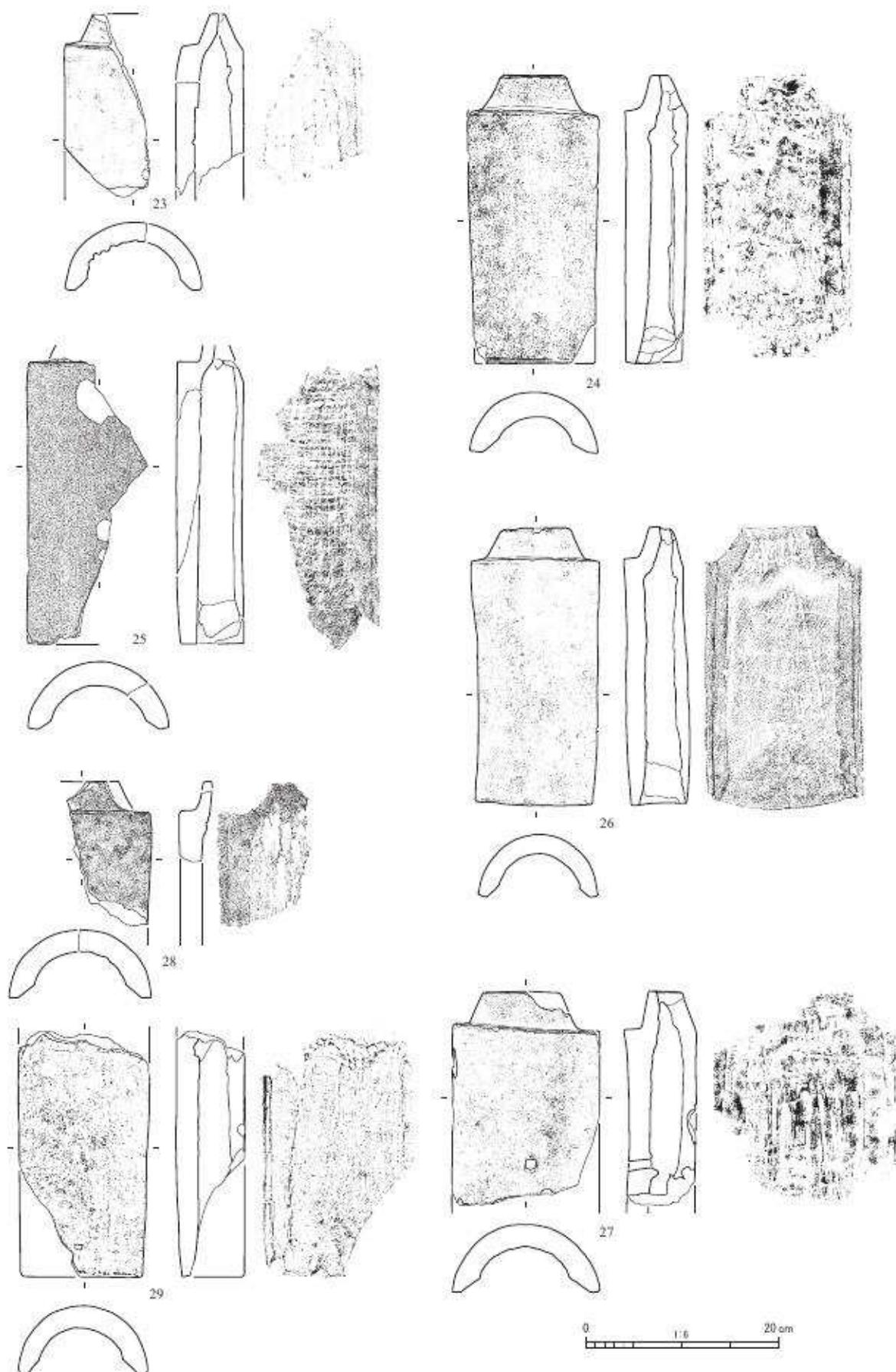


Fig.25 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (2)

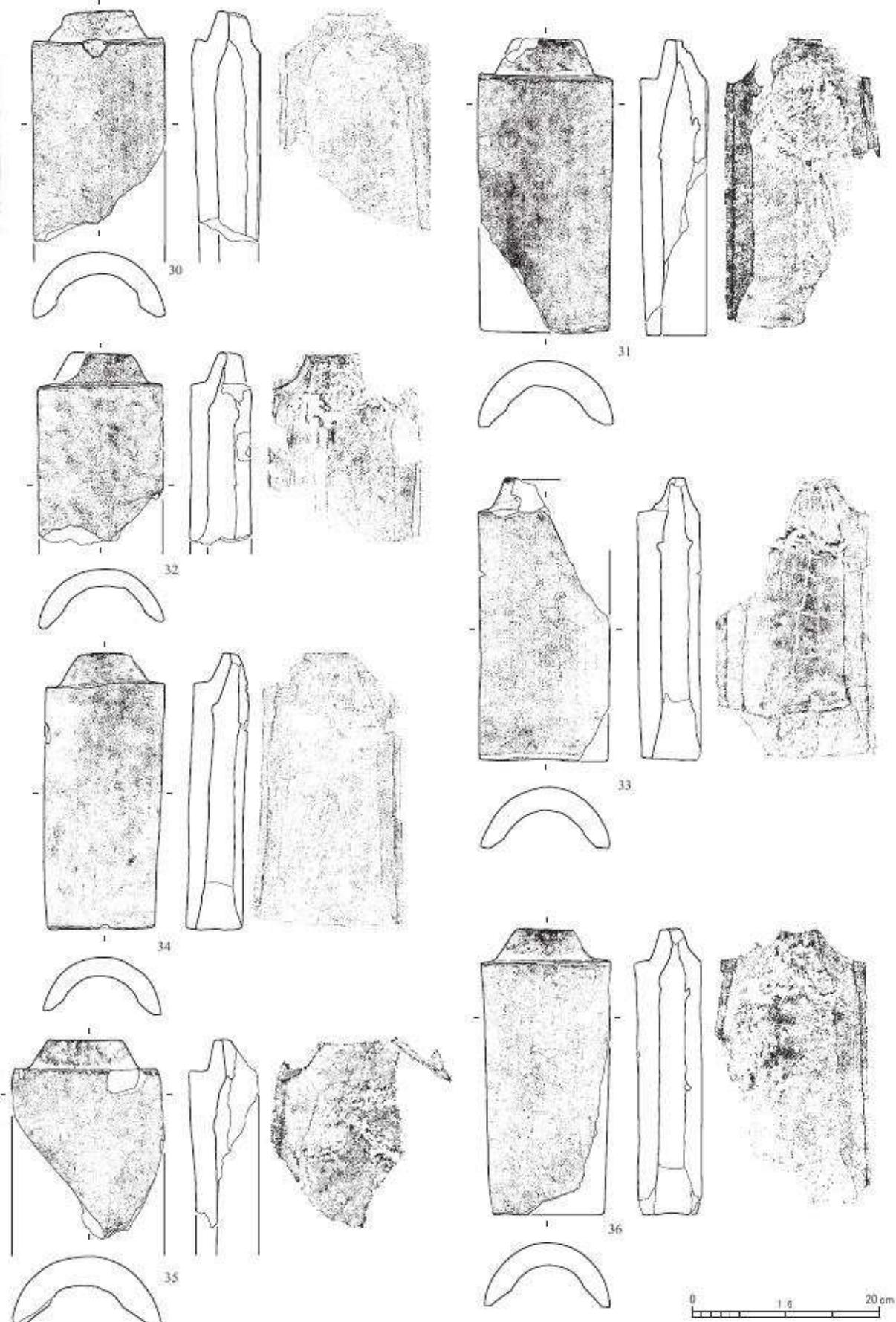


Fig.26 2トレンチ SX01 出土丸瓦 (3)



Fig.27 2 トレンチ SX01 出土丸瓦 (4)

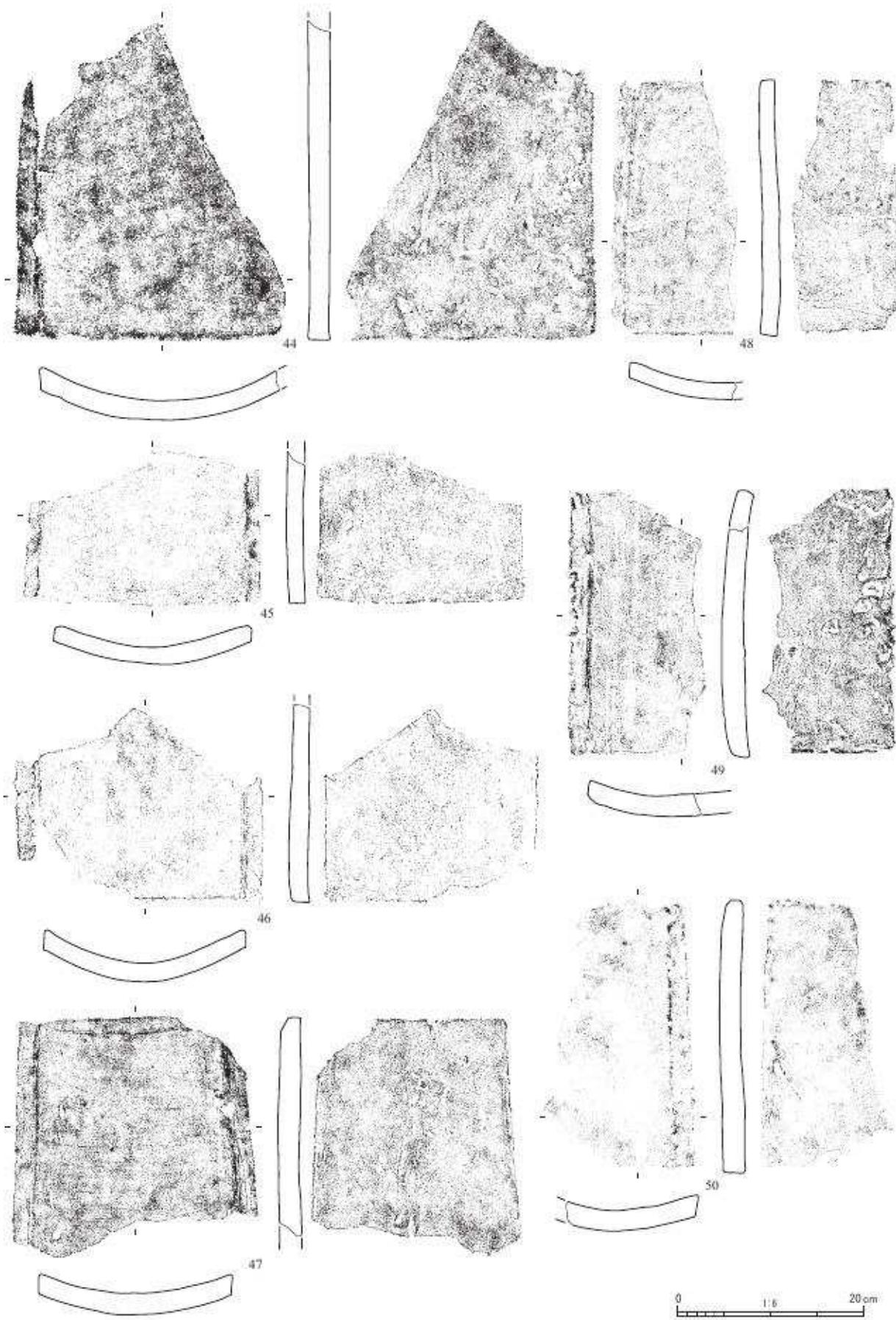


Fig.28 2トレンチ SX01 出土平瓦 (1)

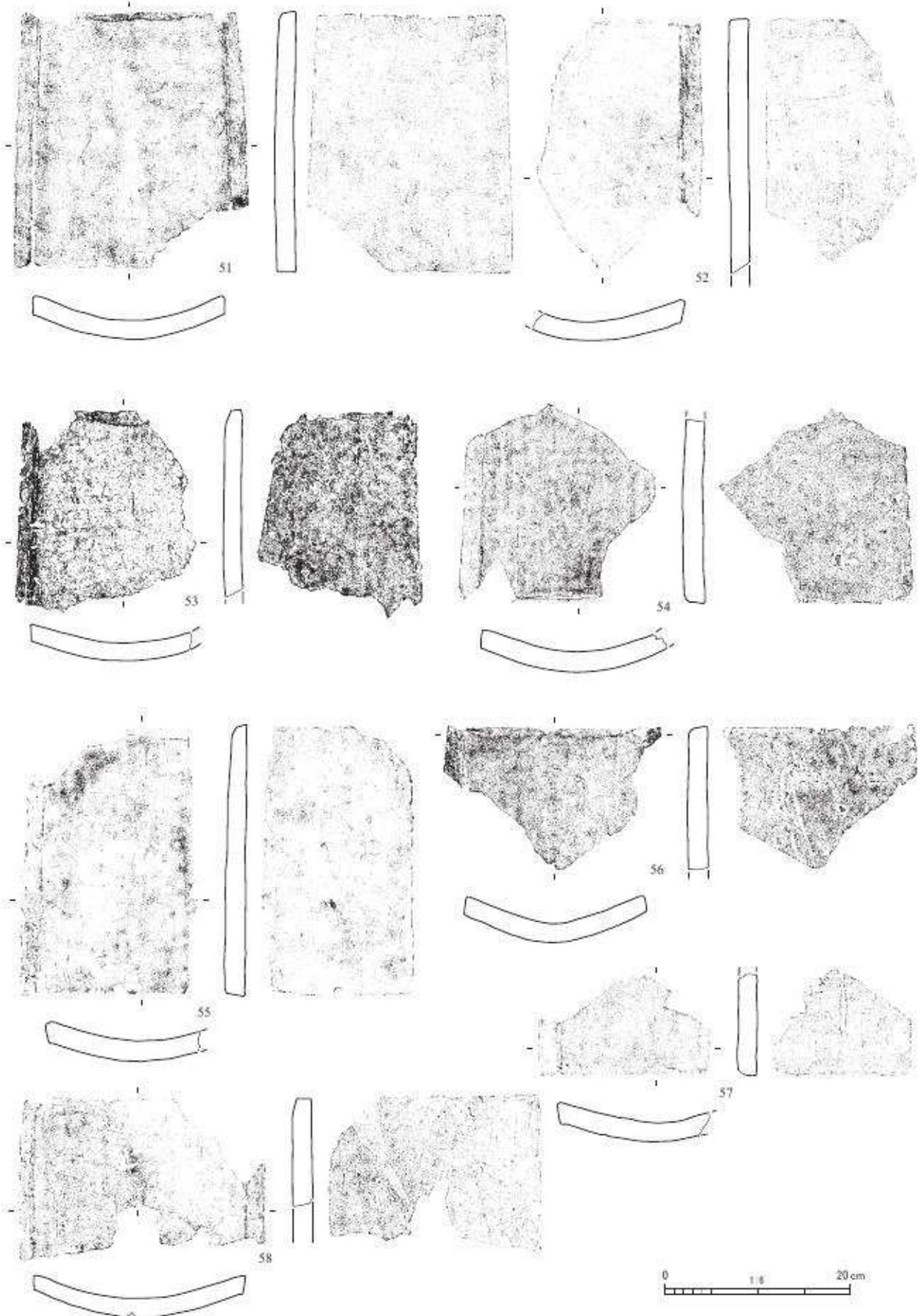


Fig.29 2トレンチ SX01 出土平瓦 (2)

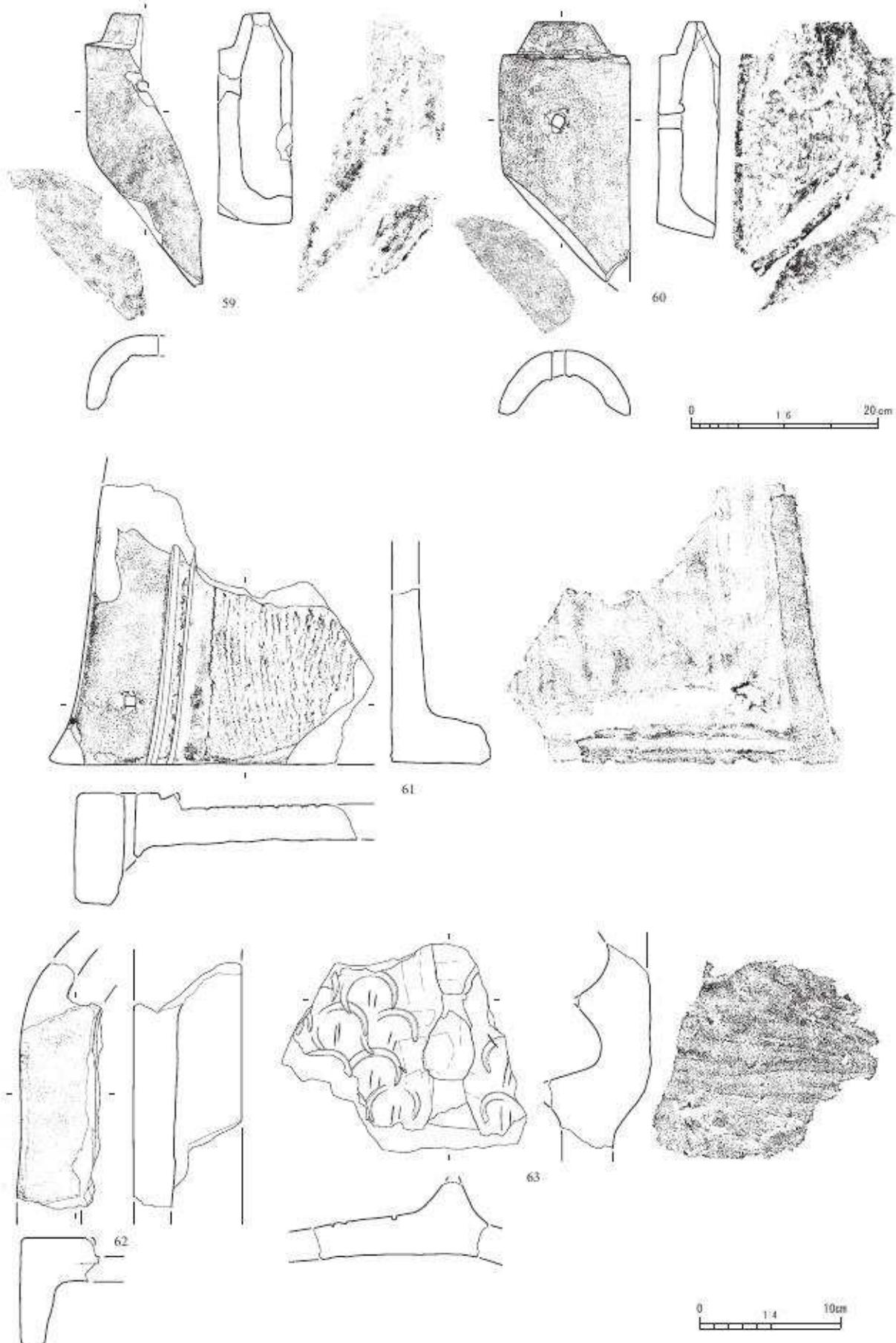


Fig.30 2 トレンチ SX01 等出土道具瓦

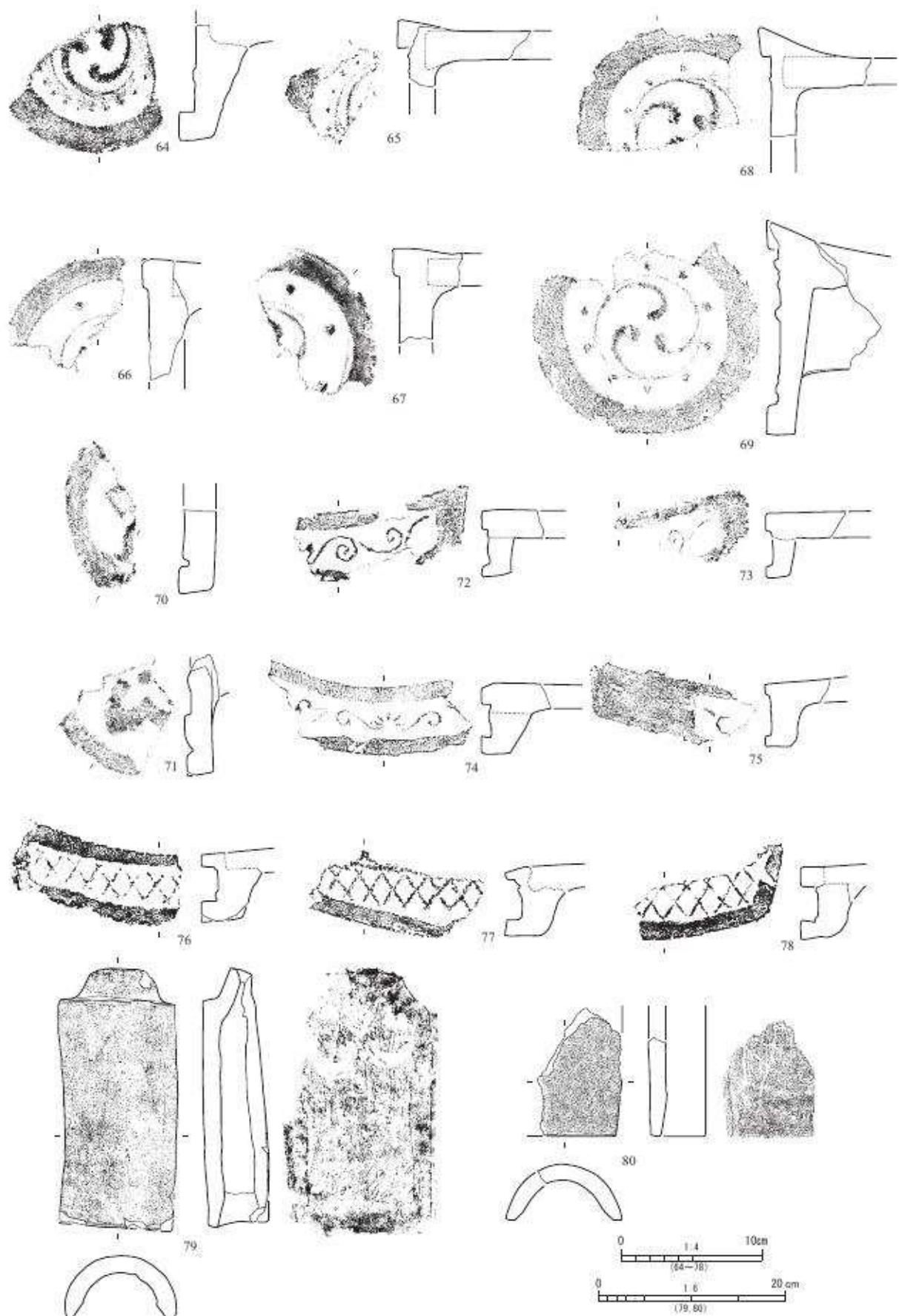


Fig.31 2 トレンチ 出土瓦

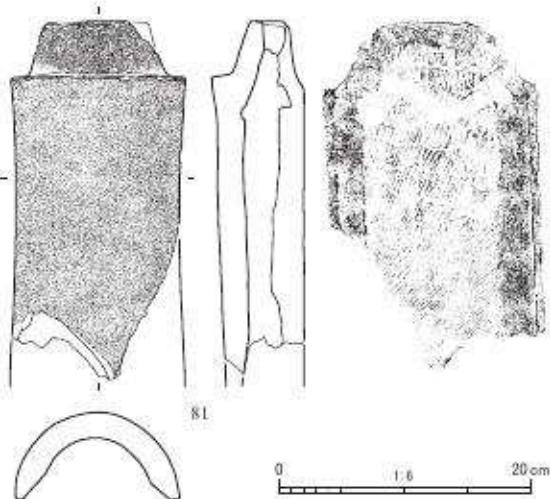


Fig.32 4トレンチ出土丸瓦

62も61とよく似た破片で、外縁の一部と考えられる。外縁の幅が少し細いため同一個体ではないと考えられるが、破片上部が緩やかに曲がっていることから、鬼瓦の一部と思われる。63は、土管攪乱内から出土した鰯瓦である。体部から背縁にかけての破片で、1トレンチ出土の鰯瓦と比較しても器壁が厚い。鱗はU字スタンプの中に縦の細い線刻を2本ずつ刻んでいる。鱗の表現は、富士見櫓で出土した鰯瓦（浜文振2011、Fig. 17-69）と類似している。裏側は指で丁寧になでられている。

2 トレンチその他出土遺物 (Fig. 31) 64～

67は軒丸瓦である。64・65は連珠三ツ巴紋で、連珠が小さく多いのが特徴で、連珠と三ツ巴の間には圓線がめぐっている。68・69は鳥伏間瓦で、圓線を有する連珠三ツ巴紋である。70（4層）・71（排土内採集）は家紋瓦である。両者とも桔梗紋であるが、紋様が異なる。いずれも太田氏在城期（1644～1678年）の所産とみられる。72～78は軒平瓦である。72は三葉紋3反転均整唐草紋で、73も同一の紋様と思われる。両者とも第3唐草が外縁に接しているため、範が切り縮められている。顎部の成形は、顎貼り付け技法である。74は五葉紋3反転均整唐草紋と思われる。75は中心飾が不明で、外縁の左端が幅広くなっている。76～78は、6層から出土した斜格子紋の軒平瓦で、いずれも瓦当貼り付け技法で成形されている。79・80は12層から出土した丸瓦で、79は凸面に繩目叩きが、凹面にはコビキA技法と吊り紐圧痕、目の細かい布目が観察できる。80は、今回の調査ではあまり確認されなかったコビキB技法が凹面にみられる。その他にも図示はしていないが、提瓶などの須恵器片が数点出土しており、付近にかつて古墳や横穴が存在していたことが伺われる。

4 トレンチ出土遺物 (Fig. 32) 4トレンチでは、石壙上面から丸瓦(81)が出土した。凹面にはコビキA技法と吊り紐圧痕がみられる。

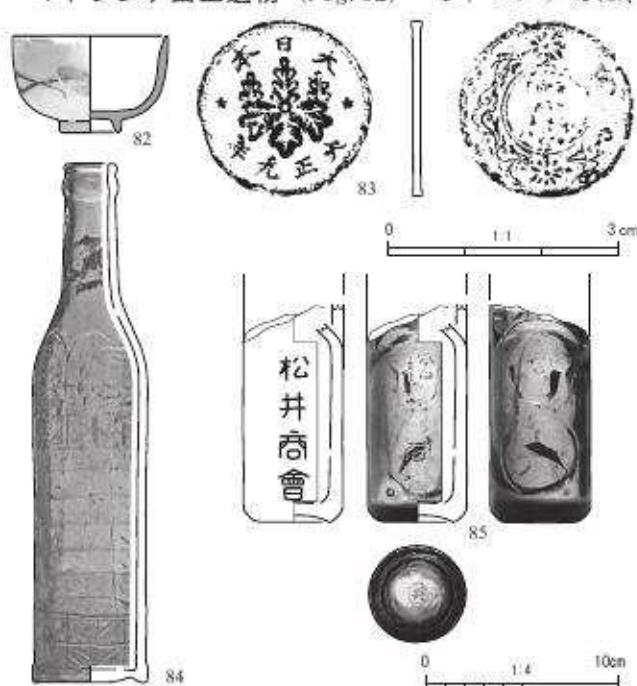


Fig.33 近現代出土遺物

近現代出土遺物 (Fig. 33) 82～85は1・2トレンチから出土した近現代の遺物である。82は、磁器の湯呑である。瀬戸・美濃産と考えられ、明治時代の所産と思われる。83は大正9年製の一銭硬貨で、1トレンチ8層から出土した。84・85は飲料瓶で、84の頸部に「STRAW」のシールが貼られ、体部には薔薇の模様があしらわれている。飲料の瓶であると思われる。85はラムネ瓶で、「松井商會」「商標登録」「○に共」とある。松井商會は、愛知県蒲郡市から浜松市篠原町に移り、ラムネの販売を始めた会社である。のちに（株）松井商店となつたが、現在は廃業している。ラムネ瓶は、大正～昭和初期頃のものと考えられる。

(坂下)

第3章 後論

I 浜松城跡における軒瓦と鰐瓦について

(1) はじめに

浜松城跡の発掘調査は2009年以降、継続的に実施されており、出土資料は近年飛躍的に増加した。今回の発掘調査で確認した瓦温りSX01のように、層位的な関係が明確な一括資料が得られたことは、従来、型式学的な検討から想定していた浜松城跡出土瓦の位置づけをより明確にしうるものとして特筆できるだろう。ここでは、今回の発掘調査で得られた資料の詳細をうかがう基礎作業として、浜松城跡から出土した軒瓦と鰐瓦をとりあげ、模様系統や製作技法の違いから分類し、出土位置や層位などの情報を加味し、それぞれの帰属時期についておよその展望を示しておきたい。

(2) 軒丸瓦

分類 浜松城跡から出土した軒丸瓦には、三ツ巴紋瓦と家紋瓦の2種が認められる。前者については瓦当模様の特徴と凹面に残るコビキ痕（森田1984）からI類およびII類に、後者については家紋の違いからIII～VI類に分類する。また、各類の中でも細分が可能な場合がある。その詳細を以下に示す。

I類 三ツ巴紋軒丸瓦で凹面にコビキA技法をもつもの

I a類 連珠が小さく数が多い（20点程度）のもの

I b類 連珠が大きく数が少ない（10点程度）もの

II類 三ツ巴紋軒丸瓦で凹面コビキB技法をもつもの、もしくはI類と瓦当模様が異なるもの

II a類 連珠数が12点のもの

II b類 連珠数が8点のもの

II c類 連珠数が7点のもの

（さらに、三ツ巴の形状や連珠の特徴によって別類型が存在する）

III類 桔梗紋軒丸瓦（太田氏家紋）

III a類 桔梗の花弁が立体的に表現されるもの

III b類 桔梗の花弁が隆帯で表現されるもの

IV類 無字錢紋軒丸瓦（青山氏家紋）

V類 繫九目結紋軒丸瓦（本庄（松平）氏家紋）

VI類 井桁紋軒丸瓦（井上氏家紋）

軒丸瓦I類 凹面にコビキA技法をもつ軒丸瓦I類は、かねてより堀尾氏在城期（1590～1600年）の所産とされていたものである（加藤1993a、1999）。I a類は瓦当面の直径が13～14cmとやや小型であり、I b類は瓦当面の直径が15cm程度と、I a類と比べて大きいものが多い。I a類の三ツ巴の巻き方には頭部の傾きが時計回りのものと、反時計回りのものがある。いっぽう、I b類については、現状では時計回りのもののみが知られる。軒丸瓦I類の三ツ巴紋は全体的に小振りで尾が細長く、尾の延長部分によって円形の圈線が形成される。

軒丸瓦I類は、天守曲輪を中心に出土例が多い。比較的大量に生産され、かつある程度の期間に

わたり使用されたものと捉えられる。なお、後述するように、富士見櫓では、軒丸瓦I類は出土していない。

軒丸瓦II類 四面にコビキB技法をもつ三ツ巴軒丸瓦は、明確な資料に恵まれないが、近世の所産と評価しうる。発掘調査での出土品では、4次調査出土品（13、浜松市教委2010、Fig.9-6）や5次調査出土品（14、浜松市教委2011、Fig.10-6）などに限られ、瓦当模様も明確でない。家紋瓦のうち、コビキB技法がみられるのは、V類とする繫九目結紋軒丸瓦で、本庄（松平）氏が浜松城主であった1702～1729年、1749～1758年に接点がある。遠江におけるコビキB技法の出現は、1600年前後のことと捉える考え方（山崎2008）と、正保年間（1644～48年）以降と捉える考え方（加藤1994）がある。5次調査の報告書では前者の可能性を示唆したが（鈴木2011）、その後も17世紀前半の基準資料に恵まれず、結論は得られていない。

軒丸瓦II類とした近世の三ツ巴紋軒丸瓦は、巴の形状が大振りになり、軒丸瓦I類ほどには尾が長く伸びない。連珠の数からIIa類（連珠数12）とIIb類（連珠数8）、IIc類（連珠数7）を設定したが、それ以外の類型もありうる。また、連珠数が一致する同一類型の中でも瓦筋が異なり、時期差がある可能性も高い。現状では瓦当模様と丸瓦部の製作技法を繋ぐ良好な資料に恵まれないので、その推移については、今後の検討課題としておきたい。

軒丸瓦II類は、天守門跡を含む天守曲輪、および富士見櫓、本丸南側など、広範囲から出土する。軒丸瓦I類と比べても存続時期が長いことから、今後、新たな類型が加わる可能性が高い。

軒丸瓦III類 太田氏の家紋である桔梗紋をあしらった軒丸瓦で、桔梗の花弁が立体的に表現されるIIIa類と桔梗の花弁が隆帯で表現されるIIIb類がある。模様の退化を想定するなら、IIIa類からIIIb類への推移が考えられる。太田氏が浜松城主であった1644～1678年の所産と捉えられる。丸瓦部が残る資料には、粗い布目がみられるがコビキ痕は観察できない（鈴木2011）。

軒丸瓦III類の出土地点は、天守曲輪（天守門跡を含む）および富士見櫓、本丸南側など広域である。現在までに20点以上が出土しており、家紋瓦の中で最も数が多い。

軒丸瓦IV類 青山氏の家紋である無字錢紋をあしらった軒丸瓦である。青山氏が浜松城主であった1678～1702年の所産と捉えられる。丸瓦部が残る資料（24、浜松市教委1996、図20-69）には、粗い布目があり、棒状刺突痕が顕著に残る（鈴木2011）。この資料にはコビキ痕はみられない。

軒丸瓦IV類は、14次調査において本丸南側で出土した資料（25、浜松市教委2016、Fig.35-61）があるほかは、数点の採集品が知られる程度である。家紋瓦の中では比較的数が少ない類型である。

軒丸瓦V類 本庄（松平）氏の家紋である繫九目結紋をあしらった軒丸瓦である。本庄（松平）氏が浜松城主であった1702～1729年、1749～1758年の所産と捉えられる。丸瓦部が残る資料は複数知られ、先述のとおりコビキB技法がみられる資料のほか、棒状刺突痕が顕著に認められる資料がある（鈴木2011）。一般的な軒丸瓦以外にも、鬼瓦などの大型の個体（浜松市教委2015、Fig.30-52）が知られている。

軒丸瓦V類は、天守曲輪（天守門跡を含む）および富士見櫓、本丸南側、西端城曲輪などから出土しており、分布は広域である。現在までに10数点が出土しており、家紋瓦としては軒丸瓦III類に次いでその数が多い。

軒丸瓦VI類 井上氏の家紋である井桁紋をあしらった軒丸瓦である。井上氏が浜松城主であった1758～1817年、1845～1868年の所産と捉えられる。丸瓦部が残る資料（28、浜松市教委1996、図20-70）には、粗い布目があり、細かい棒状刺突痕が顕著に残る（鈴木2011）。

軒丸瓦VI類は、2009年以降の発掘調査で出土した事例がなく、完形の資料1点が知られるのみ

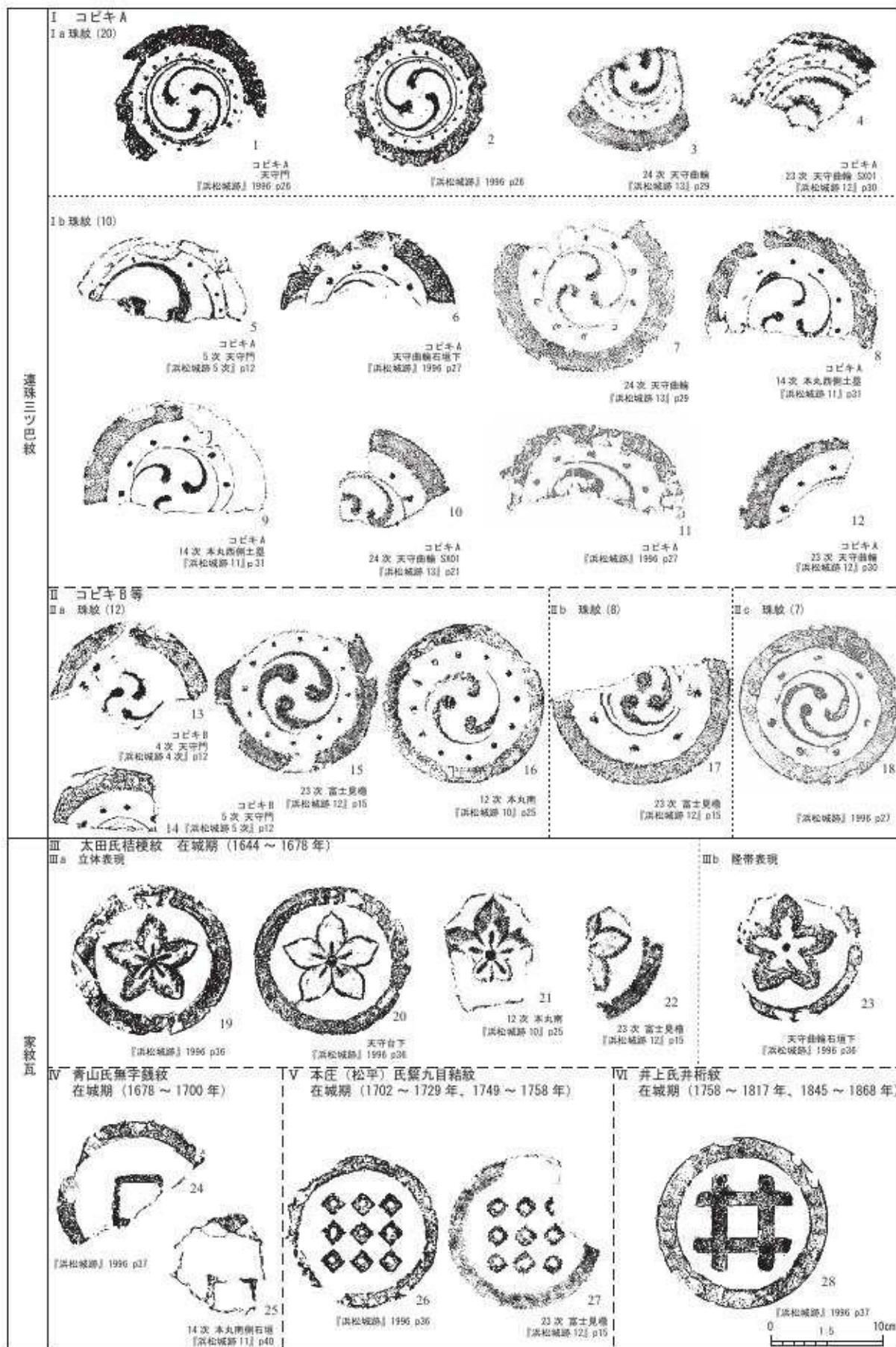


Fig.34 浜松城跡出土軒丸瓦集成図

である。元々、井桁紋の軒丸瓦が少なかった可能性があるが、井上氏は江戸時代における最後の浜松城主であったことから、建物の解体とともに家紋瓦も取り外され、当地に残されなかつたことも考えられる。

(3) 軒平瓦

分類 浜松城跡から出土した軒平瓦には、均整唐草紋、斜格子紋の2種がある。前者は中心飾りや唐草紋の特徴から細分が可能である。堀尾氏在城期もしくは近世初頭頃の所産とみられる軒平瓦をI～III類に、近世以降の軒平瓦をIV～VII類に、全体の模様が不明なものをZ類に分類する。軒平瓦と同様に各類型の中で細分化が可能なものがある。その詳細を以下に示す。

I類 三葉紋3反転均整唐草紋軒平瓦

II類 五葉紋3反転均整唐草紋軒平瓦

II a類 圏線をもつもの

II b類 圏線をもたないもの

III類 宝珠紋2反転均整唐草紋軒平瓦

IV類 斜格子紋軒平瓦

V類 三葉紋2反転均整唐草紋軒平瓦

V a類 唐草紋の巻きが強いもの

V b類 唐草紋の巻きが弱いもの

VI類 五葉紋2反転均整唐草紋軒平瓦

VII類 菊紋3反転均整唐草紋軒平瓦

VIII類 澤瀉紋唐草紋軒平瓦

Z類 全体形状が不明なその他の軒平瓦

軒平瓦 I類 中心飾りが太目の三葉紋で、3反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。3反転目の唐草が途中で切られ渦紋部がみられない。瓦范の左右を詰めたものと捉えられる。従来から、堀尾氏在城期（1590～1600年）の所産とされていたものであり（加藤1993a、1999）、遠州横須賀城出土品と共通性が高いものとして知られている。

軒平瓦 I類は天守曲輪（天守門を含む）と本丸南西側から集中して出土している。その数は軒平瓦III類と並んで多いが、現在までのところ、富士見櫓では出土していない。

軒平瓦 II類 中心飾りが小型の五葉紋で、3反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。圏線をもつII a類と圏線をもたないII b類がある。左右の第一唐草は中心飾り直下まで伸び双方が接する。唐草は単線で表現され、それぞれの巻き込みが大きく、先端が丸みを帯びる左右の終周縁が切り落とされるものが散見でき、平瓦本来の大きさと比べ瓦范が大きかつたことがうかがえる。

軒平瓦 II a類は、軒平瓦の模様としては古い様相とみられる圏線をもつ点で、軒平瓦 I類とは系統が異なる。軒平瓦 II a類は、二の丸と本丸の間の御誕生場で確認された井戸（7次調査、SE01）において、瀬戸美濃窯の大窯3期前半に下限が位置づけられる陶磁器類と共に出土した（6、浜文振2012、Fig.8-33）。大窯3期前半は1560年頃～1570年代に接点があることから（藤澤2007）、軒平瓦 II a類は堀尾氏領有期よりも遡る可能性に言及した（鈴木2012）。しかし、その後に実施した14次調査では、本丸南西部において軒平瓦 II a類が出土し、軒丸瓦 I類や軒平瓦 I類も近い位置で出土していることが確認できた（浜松市教委2016）。いずれも断片的な情報であり、決定的な状況とはいがたいが、14次調査での調査成果をふまえると、現状では軒平瓦 II a類のみを突出

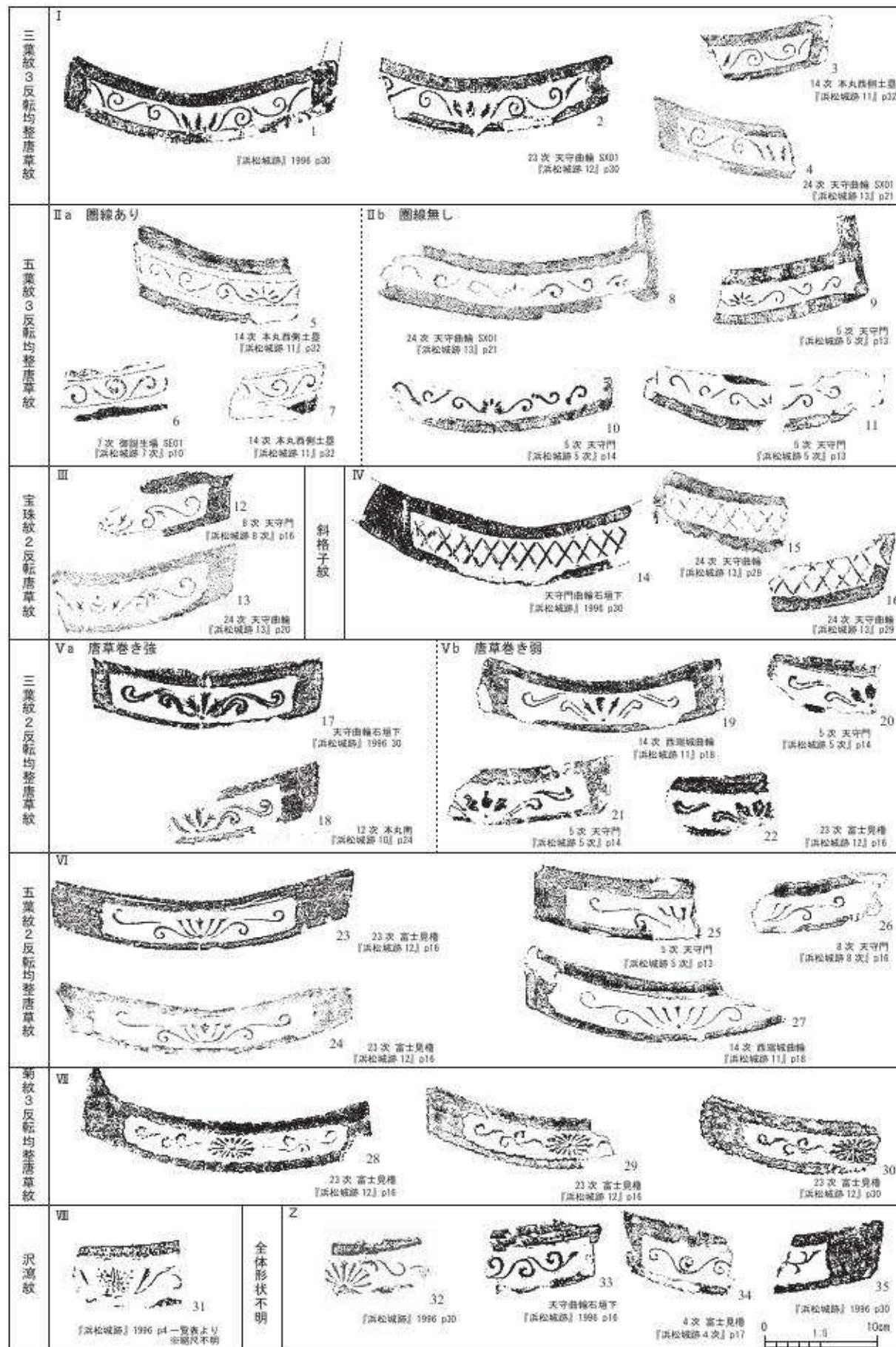


Fig.35 浜松城跡出土軒平瓦集成図

して古く位置づけることは難しいと判断する。

軒平瓦II b類は、軒平瓦II a類の圈線を省いたもので、中心飾りや唐草紋の特徴は共通する。天守門跡から比較的多く出土しており、天守門に葺かれた瓦である可能性が高い。

軒平瓦III類 中心飾りが宝珠紋で、子葉をもつ2反転の唐草紋をもつ。横須賀城に一定量みられるもので、渡瀬繁詮の在城期（1590～1595年）の所産とみられる（加藤1999）。本類型は、現在までに、天守曲輪において2点が確認されている。軒平瓦I類とともに、浜松城と横須賀城の強い関係を示すものといえる。

軒平瓦IV類 模様がすべて斜格子で埋められる軒平瓦である。周辺地域に類例はみられず、帰属時期を明確化することが困難であるが、今回の調査ではSX01の直上層からまとまって確認された。SX01に伴わないとすれば、本類型は近世に位置づけることができる。

軒平瓦IV類は現在までに7点が発掘調査報告書において紹介されているが、出土位置が天守曲輪南東部もしくはその南側の本丸南西部に集中する。この近辺の特定の建物に用いられた瓦と考えられるだろう。

軒平瓦V類 中心飾りは点珠に膨らみがある小型の三葉紋で、重線で表現された2反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。唐草紋の巻きが強いV a類と巻きが弱いV b類がある。V a類の中心飾りには、子葉の先端に三つの小突起をもつものがある。V b類の中心飾りはおしなべて不定形で肥大化している。

軒平瓦V類は、軒平瓦I類とともに、浜松城での確認例が多い類型である。出土位置も広範であり、天守曲輪（天守門跡を含む）のほか、西端城曲輪、本丸南側、富士見櫓などにみられる。近世浜松城の整備に合わせて大量に製作されたものと考えられる。

軒平瓦VI類 中心飾りは点珠と端部に屈曲をもつ小型の五葉紋で、単線で表現された2反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。第一唐草と第二唐草は互いに接し、唐草先端の巻きは強い。瓦面には複数あり、細分が可能である。本類型は23次調査で富士見櫓台北東隅部の最上層から出土している。層位的に軒平瓦V類よりも上位に位置する。この認識が正しいとすれば軒平瓦V類より新しい時期に位置づけられる可能性がある。

軒平瓦VI類は絶対量は少ないものの、天守曲輪（天守門跡）のほか、西端城曲輪、富士見櫓など出土位置は広範である。軒平瓦V類とともに近世浜松城の整備に合わせて比較的多く製作されたものと捉えられる。

軒平瓦VII類 中心飾りは菊紋で、単線で表現された3反転均整唐草紋をもつ軒平瓦である。唐草は短めで互いに接する。本類型は今までのところ、富士見櫓でしか確認できない。近世のある時期、富士見櫓（正確には櫓名称は不詳）に限定的に用いられた瓦と考えられる。本類型は23次調査で富士見櫓台北東隅部の比較的深い層位から出土している。層位的には軒平瓦V類よりも下位に位置する。この認識が正しいとすれば軒平瓦V類より古い時期に位置づけられる可能性がある。

軒平瓦VIII類 中心飾りに水野氏の澤瀉紋をもつ軒平瓦で、唐草紋の全体形状は不明確である。水野氏が浜松城主であった1817～1845年の所産と捉えられる。家紋をあしらった軒平瓦は極めて少なく、特殊な位置に用いられた瓦である可能性がある。

軒平瓦Z類 全体形状が不明な軒平瓦をZ類として暫定的にまとめておく。中心飾りが8葉以上のもの（32）、3反転の唐草紋の端部に子葉が接続するもの（33）、比較的長い3反転の唐草紋が互いに接するもの（34）、唐草紋の子葉が小さく表現されるもの（35）などが知られている。いずれも1点のみの出土例であり、今後の資料の増加を待ち類型化すべきものといえる。

(4) 鱗瓦

分類 現在までに浜松城跡で検出されている鱗瓦についても触れておきたい。浜松城跡から出土した鱗瓦は、全体形状が不明瞭ながら、その表現に違いがあり、時期的な変遷をたどることができる。以下、表現に多様性が看取できる鰐、鱗について、分類試案を示す。

鰐 段差表現があるものを鰐I類、線刻表現のものを鰐II類とする。前者が古相、後者が新相を示すと捉えられる。

鱗 太いスタンプ紋で内側に二線が入れられるものを鱗I類、太いスタンプ紋で線刻がみられないものを鱗II類、細いスタンプ紋で鱗が表現されるものを鱗III類とする。I類からII類、III類へと推移すると考えられるが、3者の重複がどの程度あったか不明瞭である。

その他 12や13など、鰐の目や顔面などの資料が知られるが、いずれも断片的であり、詳細な分類や推移を推定することは難しい。

推移 鱗瓦は、鰐や鱗の表現から新古の傾向が指摘できるものの、その推移を確定的に示すことは難しい。以下、鱗瓦の製作時期をうかがう手がかりについて、触れておきたい。7は本来SX01に含まれる遺物と捉えるなら、鱗I類がみられる7は、堀尾氏在城期に位置づけられる可能性が高い。いっぽう、新相の特徴をもつ鰐II類と鱗II類は、10において共存する。10が出土した富士見櫓は、後述するように近世の瓦が集中することを考慮すると、10は近世に降るものと捉えてよいだろう。

鰐I類については、天守門において1・2が、富士見櫓において3が出土している。前者は後者と比べ、立体的に表現されており、より古い時期に位置づけられる可能性がある。前者は、堀尾氏在城期とみられる軒平瓦II b類や桐紋の瓦も近接して出土していることは示唆的である。いっぽう、富士見櫓出土遺物は近世に降るものが多いことを重視すれば3も同様に新しい時期の鱗瓦として捉えてよいだろう。

このほか、12や13は天守台もしくはその近辺から採集されている。現状では堀尾氏在城期に満る可能性が考えられる。

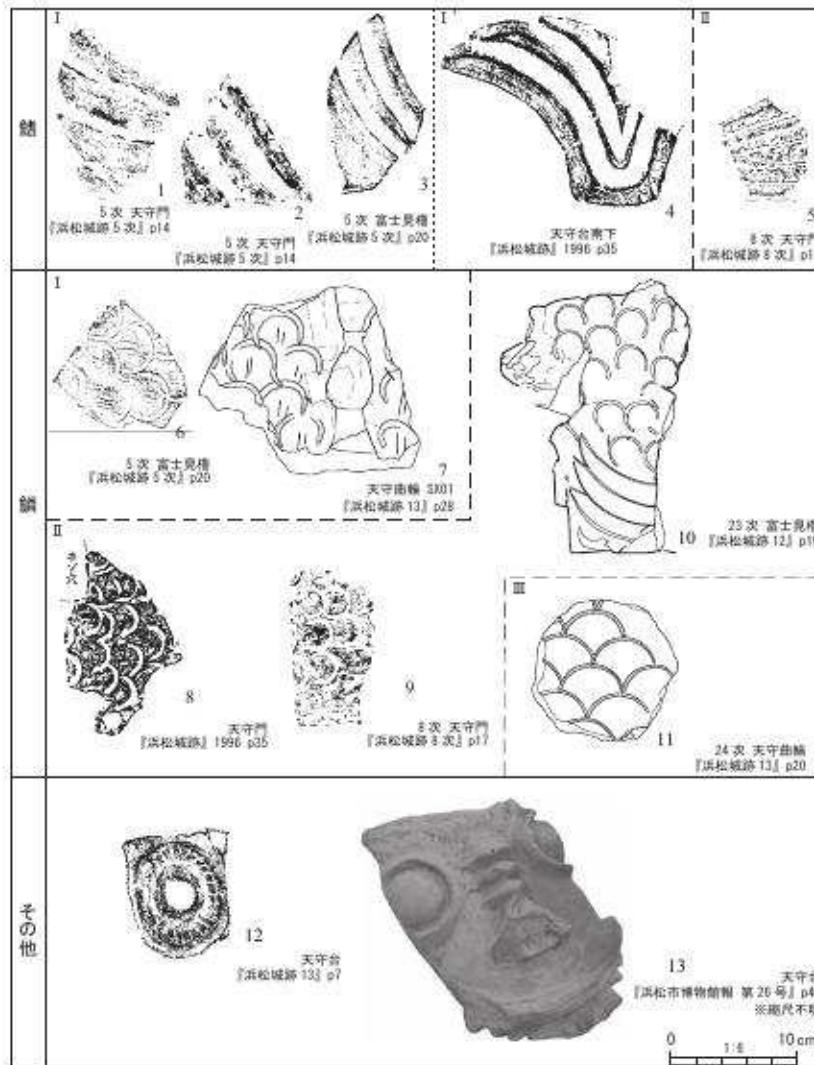


Fig.36 浜松城跡出土鱗瓦集成図

(5) 出土位置、層位にみる瓦の特徴

以上に整理した浜松城跡の軒瓦や鰐瓦は、製作年代が明確な家紋瓦を除き、明確な時期を決定する材料に恵まれていないものが多い。ここでは、今後の浜松城跡の調査にかかり留意すべき情報を指摘しておきたい。

天守曲輪出土瓦 23、24次調査によって天守曲輪の下層部に16世紀末に溯る遺物を含む造成土があり、南東部を中心に瓦溜り（SX01）が形成されていることが明らかになった。その詳細は後述するが、SX01出土遺物は、浜松城跡における初期の特徴を示す瓦の一括資料として認識できるものであり、層位関係から遺物群の相対的な新古がうかがえる重要な情報として特筆できる。

また、SX01出土遺物の分析によって、その上層に含まれる資料群は近世に降るものであることが明確になっている。今後、天守曲輪の発掘調査においては層位的な位置関係に留意し、出土遺物の時期的な推移を検討する必要があるだろう。

富士見櫓出土瓦 富士見櫓では、4次、5次、23次の3回にわたり発掘調査が行われており、比較的まとまった量の瓦が出土している。これらは必ずしも層位的に明確化されている資料とはいえないが、天守曲輪出土品と異なる傾向が見出せる。以下にその内容を示しておこう。

富士見櫓において現在までに知られている軒瓦を列記すると、軒丸瓦：II a類、II b類、III a類、IV類、軒平瓦：II b類、II類、V a類、V b類、VI類があげられる。富士見櫓出土品に、堀尾氏在城期の標識資料といえる軒丸瓦I類や軒平瓦I類が確認できない点は留意してよい。富士見櫓跡では、堀尾氏在城期の遺構面や遺物包含層に調査が及んでいない可能性もあるが、出土遺物の総体に時期差が反映されている可能性が考えられる。

富士見櫓出土遺物には、僅かであるが軒平瓦I b類や、凹面にコビキA技法といった16世紀末と捉えられる堀尾氏在城期の丸瓦が含まれている。このことに関する解釈としては、（1）これらの遺物が堀尾氏在城期よりも新しいことを示す、（2）堀尾氏在城期の瓦が近世以降にも利用されたことを示す、（3）堀尾氏在城期の前身建物に葺かれていた瓦が残存したことを示す、といった捉え方が成り立つ。不確定な事柄が多く、今後の検討課題といえるだろう。

なお、鱗I類をもつ鰐瓦についても、同様の問題が指摘できる。先に鱗I類をもつ鰐瓦は7など、堀尾氏在城期に溯る可能性に言及したが、富士見櫓から出土した鱗I類の鰐瓦（6、浜文振2011、Fig. 17-69）についての編年的位置づけは、慎重に検討を加える必要がある。

このように、多少の課題は残るもの、富士見櫓の出土品は、概ね近世以降に位置づけて問題ないとみられる。当該地の今後の調査によって、層位的に出土瓦の傾向がつかめるようになれば、浜松城跡における近世瓦の推移が明らかにできるものと期待できるだろう。

(6) 小 結

以上、浜松城跡から出土した軒瓦と鰐瓦を類型化し、出土地点の傾向やその推移について若干の展望を示した。限られた情報であるが、今後の課題についても明確化できたものといえる。

天守曲輪における層位関係については、堀尾氏在城期の遺物（SX01）を含む造成土の直上層が江戸時代でも比較的新しい段階（屏瓦が伴う時期）であることが明らかにされた。いっぽう富士見櫓では江戸時代の瓦の推移をうかがう資料群が埋もれている可能性が高い。浜松城跡の調査は、今後も継続的に実施され、資料は増え続ける。良好な一括資料や層位的な情報を踏まえた今後の検討の深化に期待したい。

2 浜松城跡天守曲輪の瓦溜りと櫓の想定

(1) はじめに

浜松城跡 23 次調査の 8 トレンチにおいて、天守曲輪南東部に瓦溜り (SX01) が確認でき、この度実施した 24 次調査の 1 トレンチおよび 2 トレンチにおいて、その範囲と埋没状況の詳細にかかる情報を得た。1 トレンチにおいて、石星の隅角を確認し、その上部に櫓などの建物が存在した可能性が想定できるようになった。ここでは、これらの遺構にかかる検討を加える。

(2) 瓦溜り SX01 について

遺構の特徴 瓦溜り SX01 は、石星内側の南東隅を基準に南北約 4 m、東西 9 m 前後の範囲に及ぶ。層位的には江戸時代における整地層（標高 34.8 m 前後、Fig. 16-13 層、Fig. 17-5 層）の直下にあたり、江戸時代の整地層から下に 1.4 m まで瓦が集積されていることを確認した。23 次調査で確認した石星構築時の整地層の標高は 33.0 m 前後であり、この整地層の直上から瓦が集積されていると捉えると、SX01 の厚さは 1.8 m におよぶ可能性がある。

23 次調査の 8 トレンチを利用したサブトレンチにおいて SX01 の断面を確認した (Fig. 17)。SX01 の内部は、ところどころに土を含む部分があるが、土を殆ど含まず瓦のみが堆積している箇所もみられる。サブトレンチの断面には瓦の堆積状況が明確に異なる箇所はみられない。SX01 は比較的短期間に形成されたものと考えられよう。

SX01 に含まれる遺物は、基本的に現地に残したが、最上層で露出している状態のよい資料を取り上げたほか、サブトレンチにおいて、上層 (i 層)、中層 (ii 層)、下層 (iii 層) に分けて、サンプルを採取した。その内容は Tab. 4 に示すとおりである。

SX01 出土遺物を試みにこれらの層位に分離し、製作技法や軒瓦の模様などに違いがあるか検討してみたが、層位の上下において新古を示すような有意な特徴を見出しがたかった。サブトレンチにおける部分的な情報であるが、SX01 の内で新古を示すような層位関係は認めにくくと判断できる。この見解は、SX01 が比較的短期間に形成されたと捉えるサブトレンチ断面の観察所見とも整合的である。

出土瓦の帰属時期 Tab. 4 には、SX01 以外で出土した瓦についても出土位置や出土層位ごとにその内容を整理した。この整理によって、今回の発掘調査で確認した遺物群は、(1) 丸瓦凹面にコビキ A 技法をもち、古相の軒瓦が伴う一群 (SX01 出土遺物)、と (2) 丸瓦凹面にコビキ B 技法をもち、新相の軒瓦が伴う一群 (SX02 及びその上位層出土遺物) に分離しうることが分かる。(2) の一群には埠瓦が一定量含まれることも留意され、家紋瓦や斜格子紋軒平瓦 (軒平瓦 IV 類) も含まれる。

浜松城跡から出土する丸瓦については、製作技法の推移から I ~ III 期の 3 期区分をした (鈴木 2011) が、上述の (1) と (2) の遺物群は、それぞれ I 期と II・III 期に相当するといえるだろう。SX01 の直上にあたる SX02 に埠瓦が一定量含まれることから、SX01 の最上部は江戸時代でも比較的新しい時期まで露出していた可能性がある。このため、SX01 の最上部から出土している遺物については、新しい時期の瓦が混入していないか注意が必要である。

このように、資料の取扱いについて留意すべきことはあるが、SX01 から出土した丸瓦はすべて四面にコビキ A 技法をもつ I 期に限定できる。瓦が集積された時間幅も他の時期の瓦が混入しない短期間の出来事であったとみてよいだろう。丸瓦がコビキ A 技法に限定される I 期の下限をどの時

Tab.4 浜松城跡出土瓦における諸属性

層位	丸瓦凸面 繩目タタキ	丸瓦凹面								軒平瓦		近世近代瓦	
		コビキ		布目		内面压痕		内面調整		瓦当貼付		桟瓦	端瓦
		A	B	細	粗	吊り紐	横縫取	刺突	指ナデ	鰐	瓦当		
公園造成土（2T 6層）	4	9	1	8	4	6	14	3	8	4	1	0	2
公園造成土（1T 8層）	3	9	0	7	8	1	9	6	0	0	0	0	10
近代造成土（2T 11層）	6	19	0	17	6	12	27	8	11	0	0	0	9
近代造成土（1T 16層）	0	1	0	1	3	1	1	4	0	0	0	0	15
近代造成土（2T 12層）	1	3	0	4	0	3	3	3	0	0	0	0	15
近代造成土（1T 19層）	5	3	1	5	3	3	5	3	0	0	0	1	17
SX02	14	52	3	30	7	25	48	12	3	1	0	0	20
SX01 I層	3	9	0	3	0	5	9	2	0	2	0	0	0
SX01 II層	10	12	0	12	1	11	14	0	0	1	0	0	0
SX01 並層	14	25	0	19	4	17	27	8	1	2	0	0	0

発布目の比率については、全体の50%以上を占めるものを新相とした。

古相

新相

期に求めるか、浜松城跡で確認した遺構の状況から必ずしも明確になしえないものの、現状では、堀尾氏が浜松城を領有した1590～1600年に位置づけておくことが最も妥当だと判断する（加藤1993）。SX01の瓦は16世紀末に製作された一括資料として資料的なまとまりをもち、当該期の基準資料として位置づけておきたい。

今一度、SX01の丸瓦にみられる製作技法をまとめておこう。1期の丸瓦は、凸面に繩目タタキ痕が、凹面にはコビキA技法、細かい布目痕跡、横目縫取痕、吊紐痕などがみられるが、それに加えて、棒状刺突痕をもつ資料も一定量含まれる（15、21～23、27、28、30～32）ことが明らかになった。棒状刺突痕を新しい時期の丸瓦に限定できる製作技法の指標と捉えること（鈴木2011）は難しく、かつての理解に対しては若干の修正が必要である。

SX01に含まれる軒丸瓦や軒平瓦についても触れておきたい。SX01に確実に含まれる軒瓦は、軒丸瓦Ia類、Ib類、軒平瓦I類、IIb類である。従来、堀尾氏在城期の軒平瓦はI類が代表例であったが（加藤1993、1999など）、SX01出土品の検討により、軒丸瓦I類や軒平瓦I類と、軒平瓦IIb類の同時代性が明らかになったといえる。この他、SX01からは鬼瓦（61、62）が出土している。また、SX01出土遺物の中に鰐瓦は確認できなかったが、直上層から出土した63も同時期の瓦である可能性が高い。さらに、SX01からは谷丸瓦が複数出土していることも留意したい。谷丸瓦は破風の接続部にかかる瓦とみられる。SX01を構成する瓦は、破風をもつような多層の建物に葺かれていたものであった可能性がうかがえる。

瓦の状態の特徴 SX01に含まれる瓦をみると、完形もしくは遺存部分が大きな資料が目立つ。また、SX01における集積状況をみると、石壘の内側隅にあたる南東部において瓦の累積が顕著であり、瓦の密度は隅部を中心に外側に向かって漸移的に希薄になる傾向が読み取れる。このことは、SX01を構成する大量の瓦が、南東部の石壘上から落ち込んだ可能性を示唆する。

建物の廃棄に伴い、不用となった屋根瓦が天守曲輪の南東部まで運ばれ、廃棄された可能性は否定できない。ただし、この場合は、再利用可能な瓦が数多く含まれることや、天守曲輪の南東部までわざわざ瓦が運ばれることについての合理的な理由を示す必要がある。SX01における瓦の遺存状態や集中具合の特徴を総合的に捉えると、天守曲輪の南東部に櫓などの建物があり、その屋根に葺かれていた瓦がまとめて落ち込んだものが瓦溜りとして遺存していると捉えることが、より妥当性の高い解釈として提示できるだろう。

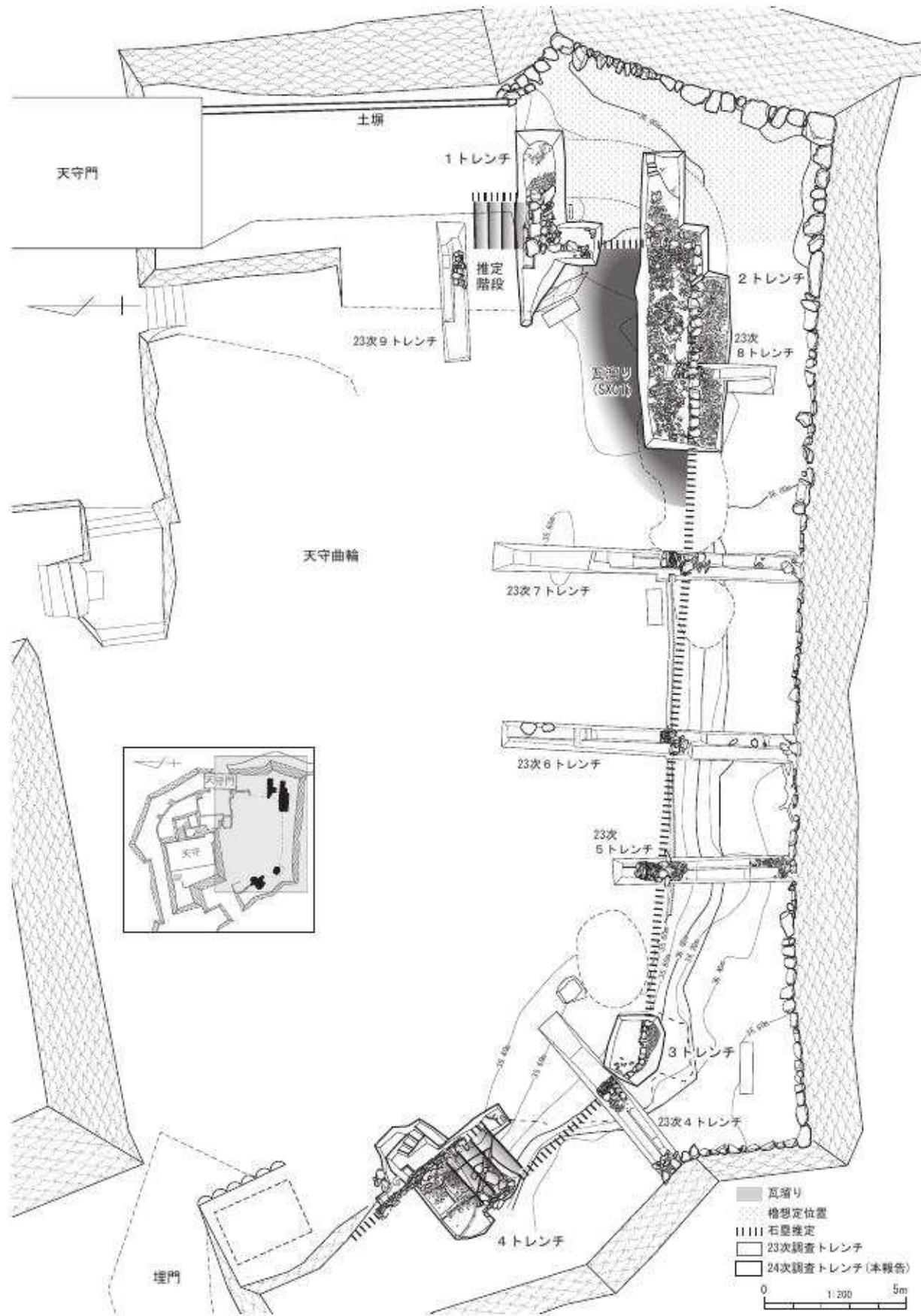


Fig.37 天守曲輪遺構推定図

(3) 天守曲輪南東隅における櫓の想定

石壘上部の遺構 1トレンチでは、南北方向から北西隅を経て直角に屈曲し東西方向に至る石壘の石列が確認できた（以下、この石壘部分を「屈曲部」と呼ぶ）。屈曲部における石列の上部は平坦な面が意識されており、石壘の天端石であった可能性が高いものといえよう。石列は北西部の隅石の他に南北方向に2石、東西方向に3石が確認できる。また、屈曲部の北西隅石から東へ約1.8m離れた位置には、天守門南側から延びる南北方向の別の石壘が確認されている。1トレンチで確認できた石壘の屈曲部は、南北方向の石壘を埋め殺して形成されている。調査範囲が限定されるので、屈曲部が付加されたものであるのか、当初から埋め殺し部分を設けて屈曲部を形成したものか、必ずしも明確でない。ただし、直線的な石壘を埋め殺して屈曲部を付加するように形成する技法は、富士見櫓においても確認できていることから、当初段階における造作の可能性が高いと捉えたい。屈曲部で確認した石列の標高は約34.8mである。いっぽう、東側の石壘上面の標高は現状で36.0mを超えており、屈曲部との標高差は1.2m以上ある。

発掘調査では、屈曲部を形成する石列の内側にやや小振りの石材が詰め込まれる状況も合わせて確認できた。石材の集積の範囲は不明確であるが、調査区外の南側に広がっている。また、屈曲部の石列の上面の高さである34.8mは、瓦溜り（SX01）の上面標高とも一致する。屈曲部の石列とSX01の形成は互いに関連性が高いと捉えてよいだろう。

櫓の想定 屈曲部を形成する石列に用いられた石材の表面は扁平であり、高さが揃っていることから建物の基礎構造であった可能性が指摘できる。北西隅石を基準にすると、屈曲部は東西に約一間分（1.8～2m程度）の空間が確保されていることも示唆的である。さきにSX01の瓦出土状況から天守曲輪東南隅に櫓を想定することについて触れたが、屈曲部で検出した石列とその平面形状の状況からもこの部分に櫓があったと想定しうる。櫓をこの位置に想定できるなら、屈曲部の内

側にみられる石材の集積は、基礎地業の一種であった可能性が考えられるだろう。屈曲部の東側には天守曲輪の輪郭が突出し、出隅部分が形成されている。この部分を本丸側から眺めると、あたかも櫓台のような景観を呈していることも、天守曲輪南東部に櫓を想定する根拠の一つに加えることができるだろう（巻頭図版3）。

屈曲部に櫓があったと捉えると、屈曲部とその東側の石壘本体部分とで高さが異なることが、問題として浮上する。この疑問にこたえるとすれば、西側の屈曲部の基礎が半地下式で一段低く、東側の石壘本体部分の基礎が高い、懸け造り状の構造であったと捉えることも考慮してよい。こうした基

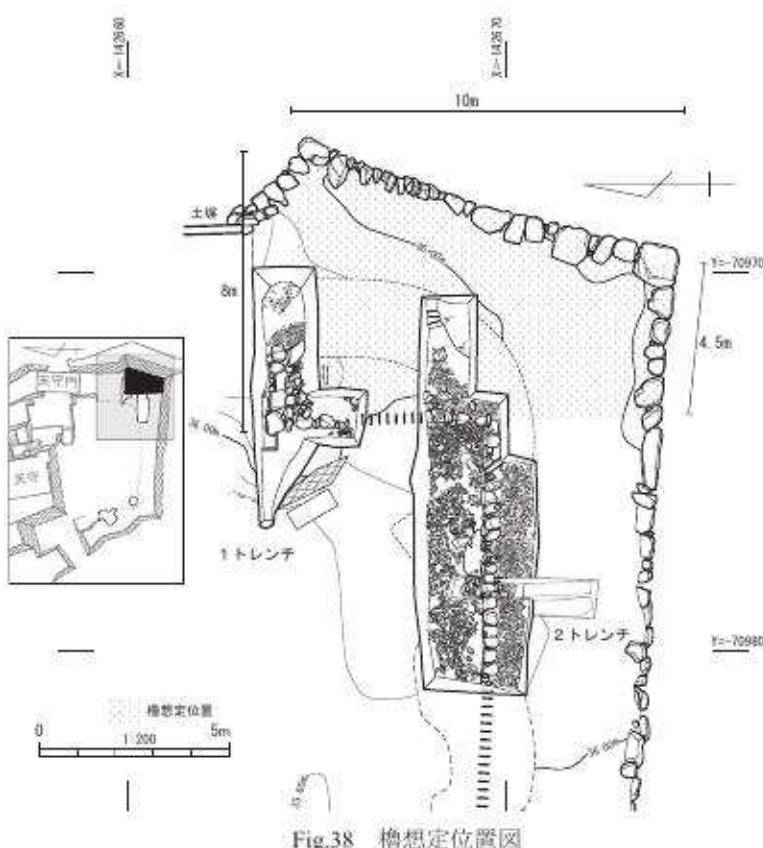


Fig.38 櫓想定位置図

礎部分の高さに違いがみられる櫓としては、近世に入る事例であるが、岡山城月見櫓に類似した事例がある（註1）。

浜松城天守曲輪の東南隅に櫓を想定することが許されたとしたら、その規模は、東西約8 m～4.5 m、南北約10 mである。SX01出土遺物から推定できる創建時期は、堀尾氏領有期（1590～1600年）とみられる。また、SX01に後世の瓦が混在しないことから考えると、その廃絶も堀尾氏領有期から大きく時期を隔てるものではないと捉えられる。また、鬼瓦や破風の存在を類推させる谷丸瓦がSX01中に含まれることを根拠にして、想像を逞しくすれば、当該地に想定できる櫓は、2層の構造であった可能性も指摘できるだろう。

礎石確認の必要性 上述のとおり、浜松城の天守曲輪南東隅に櫓を想定できる情報は複数あるが、当該地における調査は不十分であり、検討すべき要素も残されている。最も重要な課題としては、建物の礎石の確認があげられる。今回の調査では礎石列は未確認であり、今後、当該地を平面的に調査する必要があるだろう。ただし、平面構造を検討する上では懸念材料がある。残念ながら、天守曲輪南東部の隅角は崩落しており、1993年に石垣の積み直しを含んだ大規模な修理が行われている。2トレンチで確認された擾乱（Fig. 17-2層）がこの時の埋土とみられ、この解釈が正しければ、建物想定範囲の半分近くがすでに失われている可能性がある。

（4）近世における石壘の構築

階段の埋没 江戸時代の天守曲輪が比較的詳細に表現された絵図に、「青山家御家中配列図」（17世紀後半）がある。この絵図をみると、天守曲輪南東隅の石壘に接して階段が表現されている。この表現を参考にすると、1トレンチの中央北端で確認した東西の石列は、階段を構成する石列であった可能性が考えられるだろう。調査区の制約があつて全体像を明らかにすることができなかつたが、屈曲部の北側では天端石から一段下がった部分に階段状の石列が検出されており、南東隅部から北側に続く階段があった可能性は高い。

「青山家御家中配列図」に描かれた天守曲輪には櫓などの建物が描かれておらず、堀尾氏が在城した堀尾氏在城期の姿から改変された後の姿を示していると捉えられる。23次調査によって、17世紀には天守曲輪の内側が1.8 mほど盛り土されていると考えられるようになった。標高の検討から、1トレンチで検出した石列は、江戸時代にはすでに埋没している可能性が高いと考えられる。先にSX01の上面と現状の石壘上面の標高差が1.2 m以上あることを紹介したが、近世の石壘も1.2 m以上の高さがあったと想定できる。「青

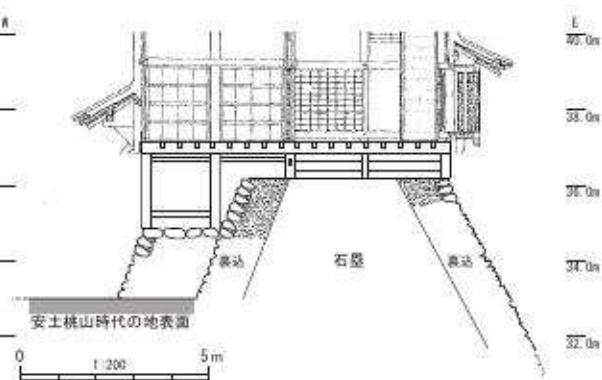


Fig.39 想定櫓台断面模式図

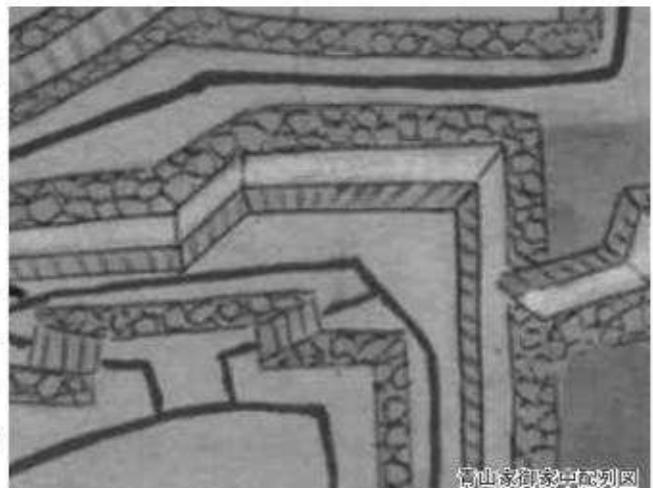


Fig.40 天守曲輪南東隅

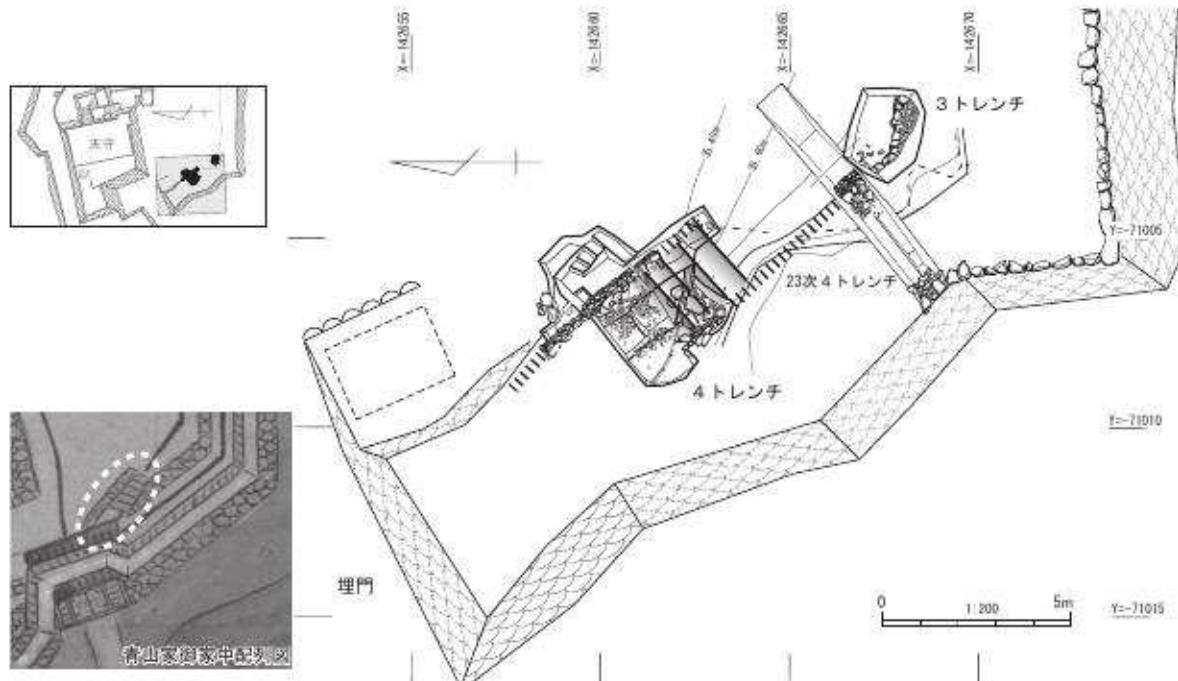


Fig.41 階段遺構図

「青山家御家中配列図」には、当該部分に少なくとも4段分の階段が表現されており、この想定と矛盾しない。近世の石壘の基底部がSX01よりも上位であると捉えると、絵図に描かれた階段は、1トレンチで検出した遺構とは異なるものであったと解釈できる。天守曲輪南東部には堀尾氏在城期に階段があった可能性があるが、天守曲輪内側の大規模造成が行われた近世以後も同じ場所に階段が設けられたものと考えられよう。この解釈が正しいなら、「青山家御家中配列図」に描かれた当該地の階段はすべて失われているとみられる。

埋門南側の階段 天守曲輪において近世に階段が新たに加えられたことは、4トレンチの調査によって明確になった。4トレンチで確認された石壘基底部の標高は34.4mであり、23次調査で確認された堀尾氏在城期の石壘基底標高(33.0m)と比べると1.4mほど高い。当該地の石壘基底部の標高は、むしろSX01上面の標高(34.8m)と近似する。石壘内側の石垣も、堀尾氏在城期の石垣と比べると築石の大きさが揃わず、乱雑に積んでいる印象をもつ。4トレンチで確認された石垣は、基底部の高さが揃わないことから、堀尾氏在城期の石壘が埋められた後に新たに付加されたものであり、このとき新たに階段が構築されたものといえるだろう。

4トレンチで確認された階段は、「青山家御家中配列図」にも表現されている。4トレンチで確認された階段と同一のものと捉えて矛盾はない。この解釈が妥当であるのなら、天守曲輪内部の盛土造成が行われた後、造成土上部に新たに石壘が構築されたのは、17世紀後半以前のことであると考えられる。この理解は、さきに1トレンチの状況で想定した近世における石壘の再構築、階段の付加という解釈とも整合的である。

(5) 小 結

23次調査で明らかになった堀尾氏在城期の石壘の情報に加え、24次調査では、瓦溜りSX01出土遺物の位置づけ、天守曲輪南東隅部における石壘と屈曲部の石列、埋門南側における近世の石壘といった新たな情報が得られた。これらのことがらと、「青山家御家中配列図」に描かれた天守曲輪

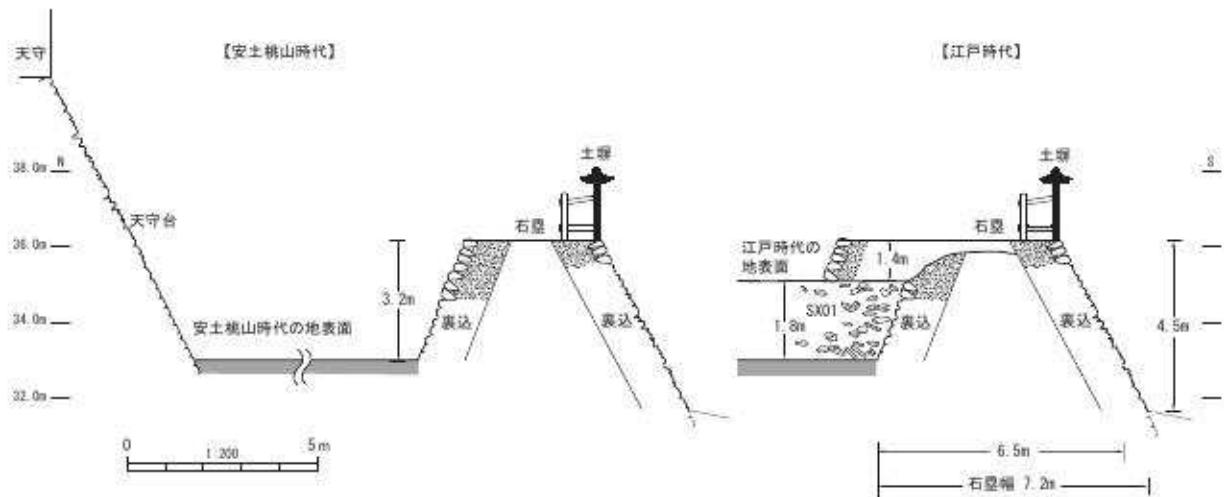


Fig.42 石堀断面模式図

の状況といった絵図の内容を総合的に判断すると、堀尾氏在城期から近世初頭（遅くとも17世紀後半）までの間に、浜松城天守曲輪には地面の造成を伴う大改修があったものと考えられる。この改修は、1.8mほどの天守曲輪内部の埋め立てのみならず、堀尾氏在城期に建てられた櫓などの建物の廃絶と屋根瓦の廃棄が伴うことに加え、同時に造成土の上に石堀内側を囲む石垣が新たに構築されたことも想定できるようになった。発掘調査が天守台下部に及んでいないことから、確証は得られないものの、この改修は、天守の廃絶と同時期であったことは想像に難くない。

天守曲輪内部全体を高さ1.8mほど埋め立てるには、相当の土量が必要である。造成の時期は、SX01出土遺物の編年的な位置づけなどを経て、さらに絞り込む必要があるが、この改変は、天守曲輪だけにとどまらず、二の丸や三の丸、それを囲む堀の掘削など含めた、浜松城の景観を一新する大造営と一連のものと考えることが妥当であろう。これだけ大きな景観の改変が想定できるのは、江戸時代の初期（17世紀前半）頃である可能性が最も高いといえるだろう。

江戸時代における天守曲輪の景観は、近世に作成された城絵図からその詳細をうかがうことができる。17世紀後半の様子を描いた青山家御家中配列図（天守曲輪全体は図版扉に掲載）をみると、天守曲輪には天守門と埋門があるだけで、天守や本稿で想定した隅櫓などの建物は既に失われていることが知られる。また、天守曲輪南側には内側に石垣を伴う石堀がめぐり、2箇所にわたり階段が設けられていることも分かる。今回の発掘調査によって、こうした江戸時代の天守曲輪の景観が整えられた過程が明らかにできた意義は大きい。

織豊期の城郭が否定され、江戸時代初期に改修されることとは、大坂城や駿府城の事例をひくまでもなく、全国の数多くの城郭でみられる。浜松城の場合、天守をはじめとした建物群が並び建ち、高低差3m以上の石堀で囲まれた姿を取りやめ、建物の多くが廃棄され、曲輪内部も1.8mほどが瓦など建物廃材とともに埋め立てられ、石堀の高さも半分以下にされたと考えられる。江戸時代の初頭、城郭の性格が、軍事拠点から政務の中心に変わるためにあたり、防御上最も重要な城郭の中核は、簡素で象徴的な空間に変わっていったものと捉えられる。

以上、浜松城跡24次調査で確認した遺構と遺物について、検討を加えた。残された課題は多いが、今回の調査は織豊期の浜松城の具体像を明らかにしたことにしておらず、全国的な城郭の変遷過程をあとづける上でも重要な成果をもたらしたものと評価できよう。

3 今後の展望

以上、浜松城跡から出土した軒瓦の分類を基礎作業として、24次調査の成果と、関連する遺物、遺構の情報を整理し、特筆すべきことがらについて触れた。さいごに、これらの情報をふまえた課題を整理し、今後の展望を示したい。

本書では、天守曲輪東部において検出した瓦溜りSX01の出土遺物を、織豊期（堀尾氏在城期、1590～1600年）のものと考えた。ただし、その遺構の広がりや、形成時期にかかる情報は、未だ不十分である。また、瓦の遺存状況から天守曲輪南東隅に堀尾氏在城期の櫓を想定し、その屋根に葺かれていた瓦が落ち込んだものと解釈したが、その歴史的な意義を含め恣意性を完全に排除することはできない。天守曲輪南東部に櫓を想定することについては、礎石列が未確認であることなど、遺構検出状況においても検討の余地が残されている。

天守曲輪南側をめぐる石星の詳細な形状についても、不明確な部分が多い。今回の調査で、近世に石星や階段が付加されていたことが判明したが、堀尾氏在城期における階段の有無や、改修状況の把握が新たな検討項目としてあげられるようになった。これらの課題の追求には、近世の遺構の破壊が避けられない場合を考えられ、調査の進め方についても議論を深める必要がある。さらに、未調査区域として、天守台の下部、天守門西側虎口、埋門などが残されており、将来的には全体的な基礎構造の解明も重要な検討項目といえる。

浜松城跡天守曲輪に埋もれている遺物や遺構は豊富であり、その遺存状態も良好であることが明確になっている。今後に残された課題は多いが、埋没した貴重な歴史情報を慎重に解きほぐし、想定した解釈の検証を繰り返す姿勢が求められるであろう。
(鈴木)

註

(1)天守曲輪南東隅に想定する櫓の基礎構造について、岡山城月見櫓を参考例にあげることは、三浦正幸氏から教示を得た。

参考文献

- 加藤理文 1993a 「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城跡IV』袋井市教育委員会
加藤理文 1993b 「静岡県内における家紋瓦の成立」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会
加藤理文 1994 「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論文集
加藤理文 1999 「横須賀城出土瓦から見た豊臣政権の城郭政策」『史跡横須賀城跡史跡等活用特別事業報告書』大須賀町教育委員会
鈴木一有 2011 「出土遺物の特徴」『浜松城跡5次』(財)浜松市文化振興財団
鈴木一有 2012 「総括」『浜松城跡7次』(財)浜松市文化振興財団
浜松市教育委員会 1996 『浜松市指定文化財 浜松城跡—考古学調査の記録—』
浜松市教育委員会 2013 『浜松城跡8次』
浜松市教育委員会 2015 『浜松城跡10』
浜松市教育委員会 2016 『浜松城跡11』
浜松市教育委員会 2017 『浜松城跡12』
(財)浜松市文化振興財団 2010 『浜松城跡4次』
(財)浜松市文化振興財団 2011 『浜松城跡5次』
(財)浜松市文化振興財団 2012 『浜松城跡7次』
藤澤良祐 2007 「総論 濱戸大窯の時代」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濱戸系 愛知県
森田克行 1984 「畿内における近世瓦の成立について」『浜津高櫛城本丸跡発掘調査報告書』高櫛市教育委員会
山崎信二 2008 『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報 第78冊 奈良文化財研究所

Tab. 5 出土遺物観察表 (1)

Fig. No.	遺物 No.	取上 No.	トレンチ No.	遺構 名	地区	層位	種別	種別	反転 (cm)	幕高 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)	色調	標考
0 1 253	-	天守台 東側	天守曲輪	表塀	丸	丸瓦	-	(8.2)	(10.2)	5.7	灰白	537/1		
22 1 26	1	-	天守曲輪	黄褐色土 19層	丸	軒丸瓦	-	(8.0)	-	-	灰黄	2.5V6/2	紫丸結紋	
22 2 50	1	-	天守曲輪	にぶい黄褐色土 8層	丸	馬伏圓瓦	-	(4.8)	(6.7)	2.5	灰	535/1	連珠三ツ巴紋、突起1、布目単位10~12本/cm ²	
22 3 252	1	-	天守曲輪	にぶい黄褐色土 8層	丸	軒平瓦	-	(16.9)	(7.4)	1.0	灰	N5/	宝珠紋子葉唐草紋	
22 4 66	1	-	天守曲輪	黄褐色土 19層	丸	谷唐草瓦	-	G3. D	(14.4)	2.0	灰	7.5V6/1	はなれ模	
22 5 264	1	-	天守曲輪	にぶい黄褐色土 8層	丸	鬼瓦か	-	(9.7)	(4.6)	1.0	灰	N5/		
22 6 43	1	-	天守曲輪	にぶい黄褐色土 8層	丸	鰐瓦	-	(11.2)	(11.2)	2.0	灰	N5/		
23 7 264	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 I層	丸	馬伏圓瓦	-	(11.0)	(4.3)	-	灰	535/1	連珠三ツ巴紋	
23 8 609	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	馬伏圓瓦	-	14.7	(31.9)	2.8	灰	535/1	連珠三ツ巴紋、浦目叩痕、コビキA横縫い取り痕、布目単位8本/cm ²	
23 9 611	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 I層	丸	軒平瓦	-	(9.3)	(29.1)	2.4	灰	535/1	三葉紋3反転飛唐草紋(切り縮め)	
23 10 271	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 I層	丸	軒平瓦	-	(11.6)	(16.0)	1.0	灰白	10YR8/2	水返し、三葉紋3反転飛唐草紋(切り縮め)	
23 11 610	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	軒平瓦	-	(12.7)	(11.5)	1.0	灰白	7.5V7/1	三葉紋3反転飛唐草紋(切り縮め)	
23 12 590	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	軒平瓦	-	(13.2)	-	-	灰	7.5V6/1	三葉紋3反転飛唐草紋(切り縮め)、額貼付 け技法	
23 13 615	2	SX01	天守曲輪	褐色土 III層	丸	軒平瓦	-	(9.2)	(16.9)	1.0	オリーブ灰 2.5GY6/1	水返し、3反転均整唐草文		
23 14 609	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	軒平瓦	-	(22.8)	(17.5)	1.7	灰	635/1	水返し、五葉紋3反転均整唐草紋、額貼付 け技法	
24 15 308	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 I層	丸	丸瓦	-	(9.7)	(20.7)	2.2	にぶい黄褐色 コビキA技術	横縫い取り痕、布目単位8本/cm ²		
24 16 313	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	丸瓦	-	13.9	(20.0)	2.4	灰	7.5V5/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位14本/cm ²	
24 17 319	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	丸瓦	-	13.9	(16.7)	2.4	灰白	コビキA技術、横縫い取り痕、吊り紙痕、 布目単位8本/cm ²		
24 18 365 369 391	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	丸瓦	-	13.6	30.1	2.2	灰	N5/	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位12本/cm ²	
24 19 353	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	丸瓦	-	12.9	(24.6)	2.1	灰	N4/	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位12本/cm ²	
24 20 508	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 II層	丸	丸瓦	-	12.6	(17.5)	2.2	灰	7.5V6/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位15本/cm ²	
24 21 447 448	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	14.1	(18.4)	2.4	灰	N5/	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位12本/cm ² 、棒状叩痕	
24 22 496	-	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	14.7	(14.9)	2.6	灰	N5/	浦目叩痕、コビキA技術、吊り紙痕、 布目単位16本/cm ² 、棒状叩痕	
25 23 558	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	(8.6)	(17.2)	2.4	灰	N4/	浦目叩痕、コビキA技術、吊り紙痕、布目 単位10本/cm ² 、棒状叩痕	
25 24 469	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	13.6	29.9	2.7	灰	N4/	浦目叩痕、吊り紙痕、布目単位12本/cm ²	
25 25 564	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	(12.5)	29.3	2.5	灰	535/1	浦目叩痕、コビキA技術、吊り紙痕、 布目単位10本/cm ²	
25 26 516	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	13.3	28.8	2.0	明オリーブ灰 2.5GY6/1	吊り紙痕、布目単位14本/cm ² 凸面一端布目あり布目単位15本/cm ²		
25 27 599	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	15.3	(21.9)	2.3	灰	N4/	阿穴1、浦目叩痕、横縫い取り痕、 布目単位7本/cm ² 、棒状叩痕	
25 28 585	2	SX01 断剝	天守曲輪	褐色土 III層	丸	丸瓦	-	(8.3)	(13.4)	2.2	灰	N6/	浦目叩痕、横縫い取り痕、布目単位8本/cm ² 、 棒状叩痕	
25 29 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	13.5	(25.5)	2.3	灰	7.5V5/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位15本/cm ²	
26 30 39	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	14.2	(23.0)	2.4	灰	N6/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位8本/cm ² 、棒状叩痕	
26 31 45	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	14.4	31.3	2.0	灰	D96/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位10本/cm ² 、棒状叩痕	
26 32 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	13.4	(20.4)	1.9	灰	7.5V7/1	浦目叩痕、吊り紙痕、布目単位14本/cm ² 、 棒状叩痕	
26 33 39	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	13.9	30.2	2.4	灰	7.5V6/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位17本/cm ²	
26 34 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	12.8	29.4	2.3	灰白	7.5V7/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位17本/cm ²	
26 35 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	15.9	(21.2)	2.3	灰白	N7/	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位10本/cm ²	
26 36 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	13.8	30.6	2.3	灰	7.5V6/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 吊り紙痕、布目単位11本/cm ²	
27 37 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	15.6	(18.8)	2.4	灰	535/1	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 布目単位10本/cm ²	
27 38 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	14.7	(17.0)	2.1	灰	N5/	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 布目単位11本/cm ²	
27 39 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	13.8	30.1	2.1	灰	535/2	浦目叩痕、コビキA技術、横縫い取り痕、 布目単位17本/cm ²	
27 40 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	13.0	29.8	2.2	灰	7.5V6/1	浦目叩痕、横縫い取り痕、吊り紙痕、 布目単位15本/cm ²	
27 41 40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	12.4	30.2	2.1	灰	10Y5/1	浦目叩痕、横縫い取り痕、吊り紙痕、 布目単位8本/cm ²	
27 42 39	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	丸	丸瓦	-	14.6	(26.0)	2.1	灰白	7.5V7/1	浦目叩痕、横縫い取り痕、吊り紙痕、 布目単位8本/cm ²	

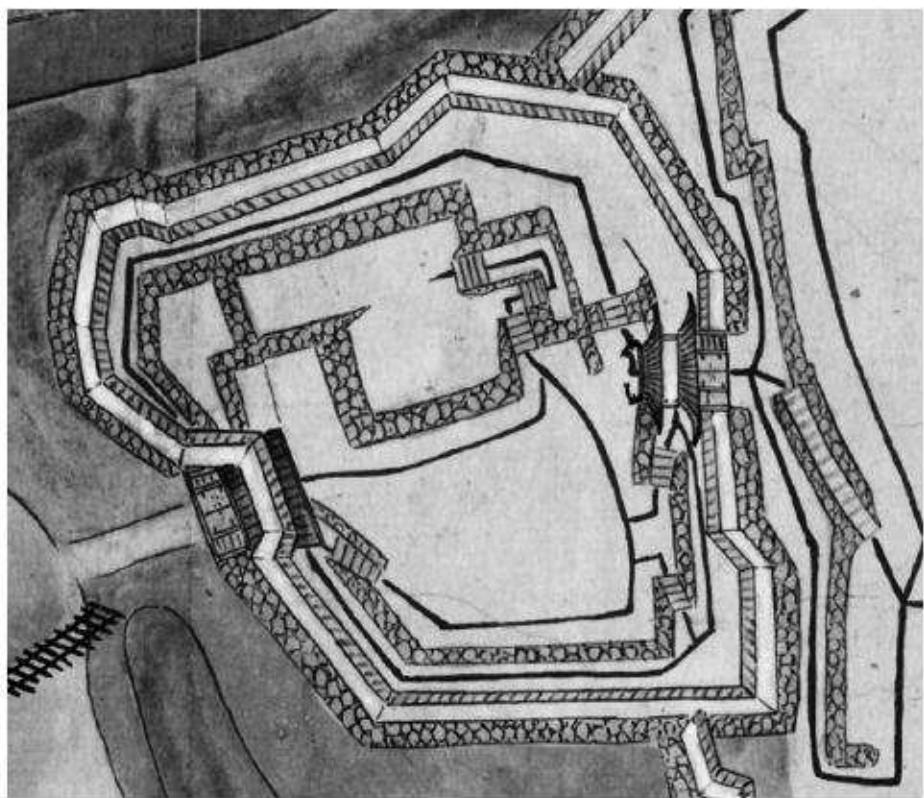
Tab. 6 出土遺物観察表 (2)

Fig. No.	遺物 No.	數上 No.	トレンチ No.	遺構 No.	地区	層位	種別	種別	反転	口径 (cm)	幕高 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)	色調	備考
27	43	39	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	丸瓦	-	13.2	(26.5)	2.3	灰 7.536/1	網目印痕、横縫い取り痕、吊り紐痕 布目単位 8 本 / cm ²	
28	44	618	2	SX01	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	平瓦	-	(27.2)	(35.5)	2.4	灰 NA/	縦方向・斜め方向板ナデ(ハケ)	
28	45	295	2	SX01 断削	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	平瓦	-	21.4	(16.7)	1.8	灰白 518/1	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
28	46	529	2	SX01 断削	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	平瓦	-	21.9	(21.3)	2.0	灰 7.536/1	縦方向・斜め方向板ナデ(ハケ)	
28	47	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	21.8	(26.2)	2.3	灰 7.536/1	横方向・多方向板ナデ(ハケ)	
28	48	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(12.1)	27.9	1.8	灰黄 2.537/2	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
28	49	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(14.0)	(29.0)	2.3	灰 NA/	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
28	50	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(14.2)	29.4	2.3	オリーブ黒 7.533/1	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	51	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	21.4	28.2	2.0	灰 1015/1	縦方向・横方向・多方向板ナデ(ハケ)	
29	52	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(16.4)	(27.3)	2.1	灰 NA/	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	53	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(17.3)	(26.2)	1.9	灰白 7.537/1	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	54	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(20.1)	(19.9)	2.2	灰オリーブ 7.536/2	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	55	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(16.7)	29.3	2.2	灰 NA/	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	56	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	19.7	(15.4)	2.0	灰 7.535/1	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	57	39	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	(16.4)	(11.6)	2.1	に赤い黄緑 10187/4	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
29	58	40	8 (23次)	SX01	天守曲輪	褐色土	瓦	平瓦	-	12.0	(17.8)	2.0	黄灰 2.535/1	縦方向・横方向板ナデ(ハケ)	
30	59	617	2	SX01	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	谷丸瓦	-	(9.5)	21.6	2.2	灰 1016/1	新穴 1、網目印痕、コピキ A 技法、横縫い 取り痕、吊り紐痕、布目単位 10 本 / cm ²	
30	60	616	2	SX01	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	谷丸瓦	-	14.0	25.9	2.6	灰白 517/2	新穴 1、網目印痕、コピキ A 技法、横縫い 取り痕、吊り紐痕、布目単位 12 本 / cm ²	
30	61	582	2	SX01 断削	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	唐瓦	-	(21.0)	(20.0)	1.9	灰 NA/	新穴 1、底面輪トチノ痕か	
30	62	569	2	SX01 断削	天守曲輪	褐色土 1層	瓦	唐瓦	-	(5.7)	(17.5)	3.0	灰 NA/		
30	63	53	2	-	天守曲輪	暗褐色土 9層	瓦	鏡耳	-	(16.3)	(14.5)	3.1	灰白 7.517/1	U字スタンプ	
31	64	5	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒丸瓦	-	(13.0)	-	-	灰白 2.538/2	連珠三ツ巴紋	
31	65	13	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒丸瓦	-	(8.8)	(19.9)	2.0	灰 7.536/1	連珠三ツ巴紋、コピキ A、横縫い取り痕 布目単位 11 本 / cm ²	
31	66	42	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒丸瓦	-	(7.4)	-	-	灰黄 2.537/2	連珠三ツ巴紋	
31	67	52	2	-	天守曲輪	暗褐色土 9層	瓦	軒丸瓦	-	(7.2)	(5.0)	2.4	灰 NA/	連珠三ツ巴紋	
31	68	40	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	鳥伏間瓦	-	(12.3)	(8.0)	2.2	灰白 NA/	連珠三ツ巴紋	
31	69	48	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	鳥伏間瓦	-	16.0	(3.3)	-	灰 NA/	連珠三ツ巴紋	
31	70	49	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 4層	瓦	軒丸瓦	-	(6.0)	-	-	オリーブ黒 7.533/1	枯梗紋	
31	71	619	-	拂土内	天守曲輪	-	瓦	軒丸瓦	-	(7.4)	-	-	灰黄 2.537/2	枯梗紋	
31	72	39	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒平瓦	-	(12.3)	(10.5)	2.0	淡黄緑 10188/3	三葉紋 3 反転唐草紋(切り縮み)、額貼付 け技法	
31	73	44	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒平瓦	-	(11.7)	(15.7)	1.9	淡黄緑 10188/3	唐草紋(切り縮み)、額貼付け技法	
31	74	93	2	SX01 直上	天守曲輪	に赤い黄褐色土 12層	瓦	軒平瓦	-	(15.7)	(6.0)	2.0	灰 7.536/1	五葉紋 3 反転均整唐草紋か	
31	75	23	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒平瓦	-	(12.6)	(4.7)	1.6	黄灰 2.535/1	飛唐草紋	
31	76	10	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒平瓦	-	(12.4)	(5.8)	-	灰 NA/	斜格子紋	
31	77	23	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒平瓦	-	(14.3)	(4.2)	-	灰 NA/	斜格子紋	
31	78	7	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	瓦	軒平瓦	-	(9.7)	(5.7)	-	灰 NA/	斜格子紋	
31	79	230	2	SX01 直上	天守曲輪	に赤い黄褐色土 12層	瓦	丸瓦	-	12.6	27.7	1.9	灰 7.536/1	網目印痕、コピキ A、吊り紐痕 布目単位 16 本 / cm ²	
31	80	99	2	SX01 直上	天守曲輪	に赤い黄褐色土 12層	瓦	丸瓦	-	(9.0)	(13.7)	1.8	灰 1015/1	コピキ B、横縫い取り痕、布目単位 12 本 / cm ²	
33	81	239	4	階段直上	天守曲輪	黄褐色土 5層	瓦	丸瓦	-	13.9	(28.8)	2.1	灰 NA/	コピキ A、横縫い取り痕、吊り紐痕、布目 単位 14 本 / cm ² 、当面一部布目あり、布目単 位 12 本 / cm ²	
32	82	614	1	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 8層	磁器	湯呑茶碗	反	8.0	5.1	3.0	灰白	瀬戸・美濃窯	
33	83	248	1	東側柱脇	天守曲輪	に赤い黄褐色土 8層	古鏡	貨幣	-	-	-	-	-	直径 2.3cm、厚さ 0.15cm	
33	84	64	2	-	天守曲輪	規定性	ガラス 瓶	飲料瓶	-	2.5	27.2	5.9	無色(透明)	頭部にシール「STRAW」	
33	85	51	2	-	天守曲輪	に赤い黄褐色土 6層	ガラス 瓶	ラムネ瓶	-	-	(11.4)	3.8	緑色(透明)		

※層位は、Fig.13 (1トレンチ)、Fig.16 (2トレンチ)、Fig.21 (4トレンチ) の土層番号をそれぞれ基準とした。

() 括弧内の数値は残存値

図版
PLATE



青山家御家中配列図（天守曲輪拡大）



天守曲輪南東隅瓦溜り (SX01) 検出状況 (2トレンチ・北西から)

PL. 2



1 1 トレンチ 石列検出状況（北から）



2 1 トレンチ 石列検出状況（南西から）



3 1 トレンチ 石列下部検出状況（東から）



1 2 トレンチ SX01 検出状況（北東から）



2 2 トレンチ SX01 検出状況（北西から）



3 2 トレンチ SX01 検出状況（西から）



1 2トレンチ 石垣検出状況（北から）



2 2トレンチ SX01 断ち割り断面状況（東から）



3 2トレンチ 石墨及び裏込め検出状況（東から）



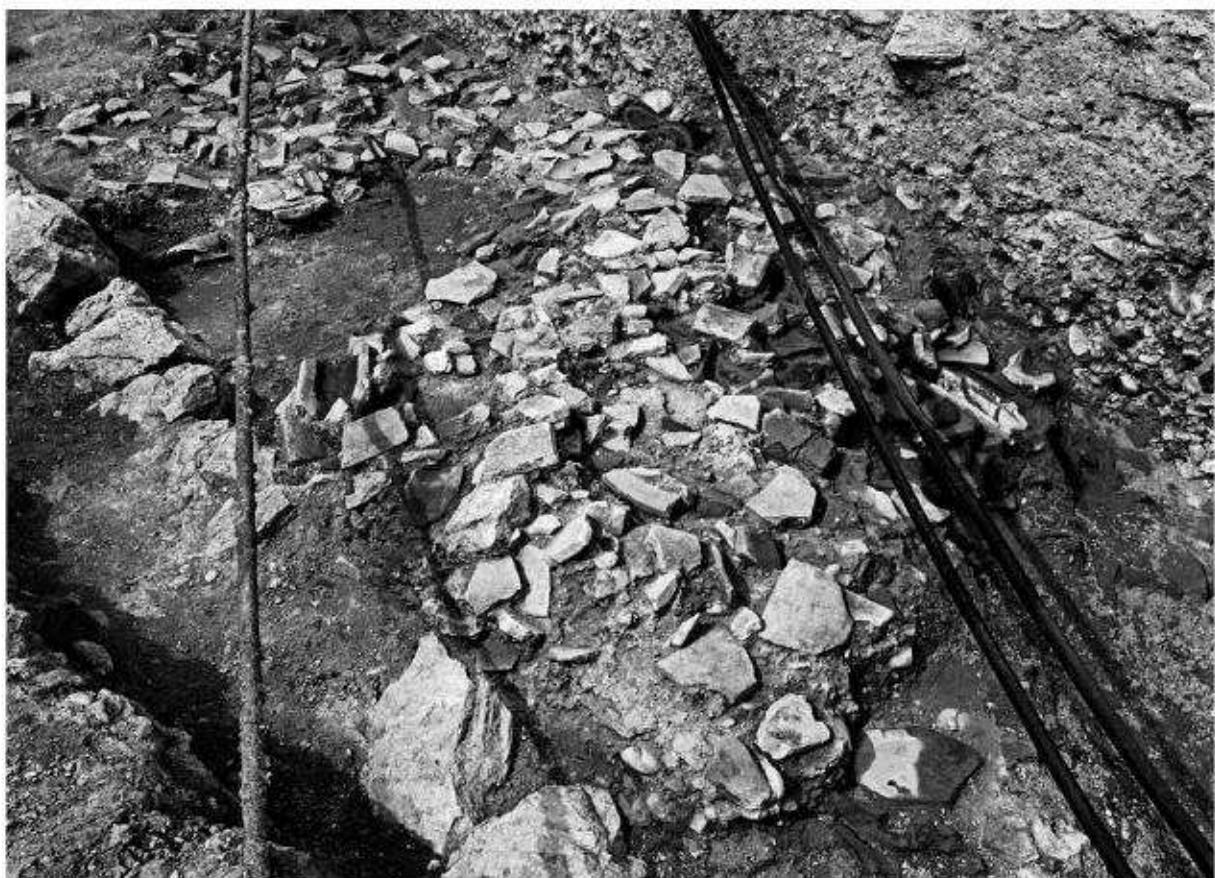
4 2トレンチ 石墨及び裏込め検出状況（北から）



1 2トレンチ SX02 全景 (南東から)



2 2トレンチ SX02 検出状況 (北西から)



3 2トレンチ SX02 検出状況 (南東から)



天守曲輪南西部石垣検出状況（4トレンチ・南東から）

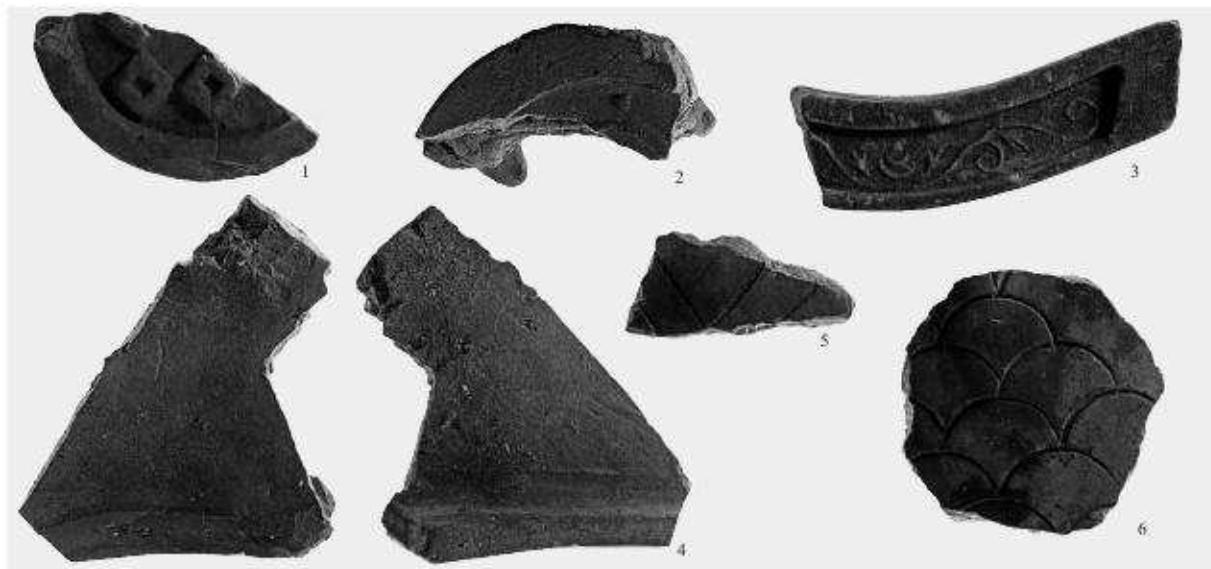


1 3 トレンチ 石壘南西隅検出状況（北東から）



2 4 トレンチ 石壘石垣検出状況（南東から）

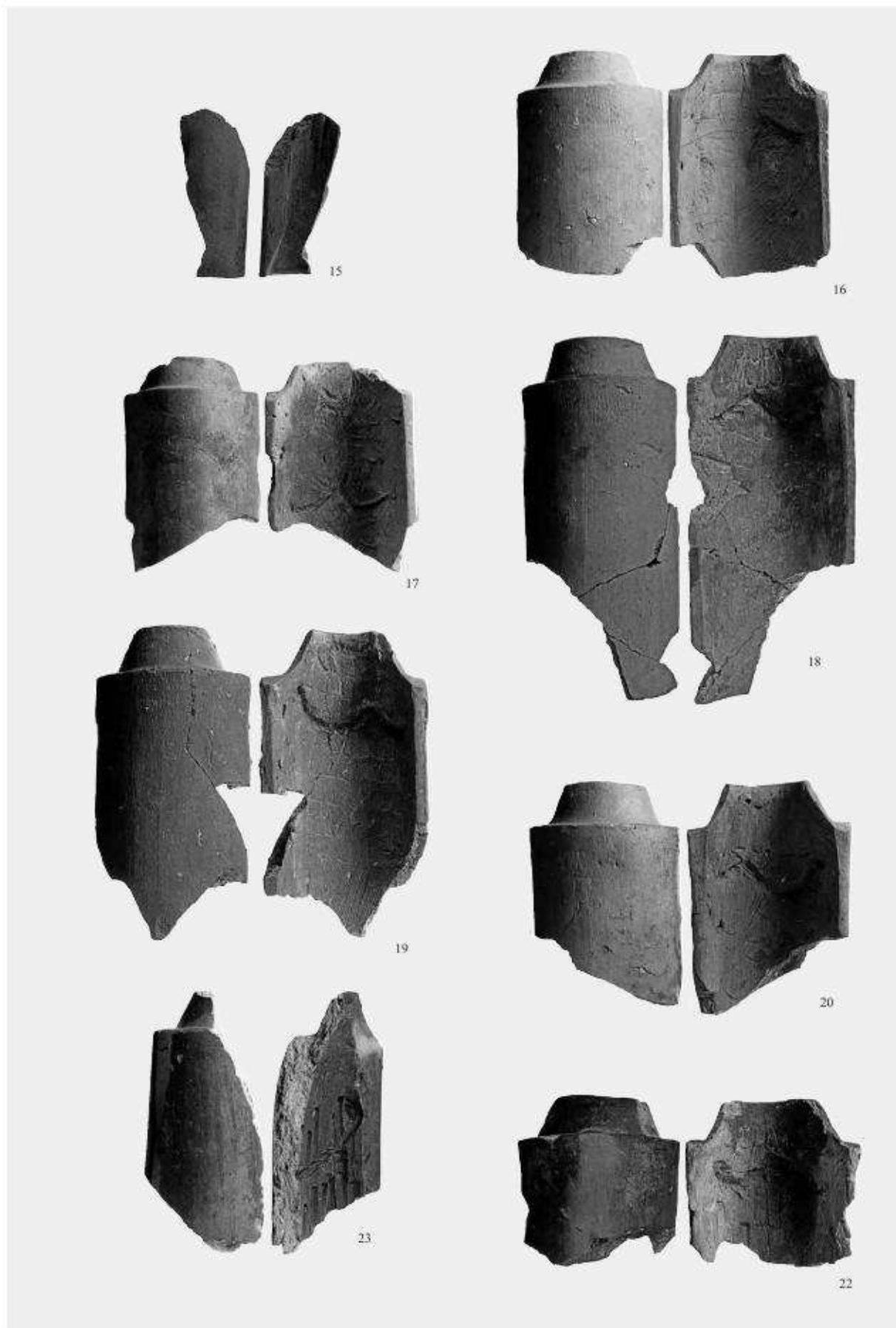
PL. 8



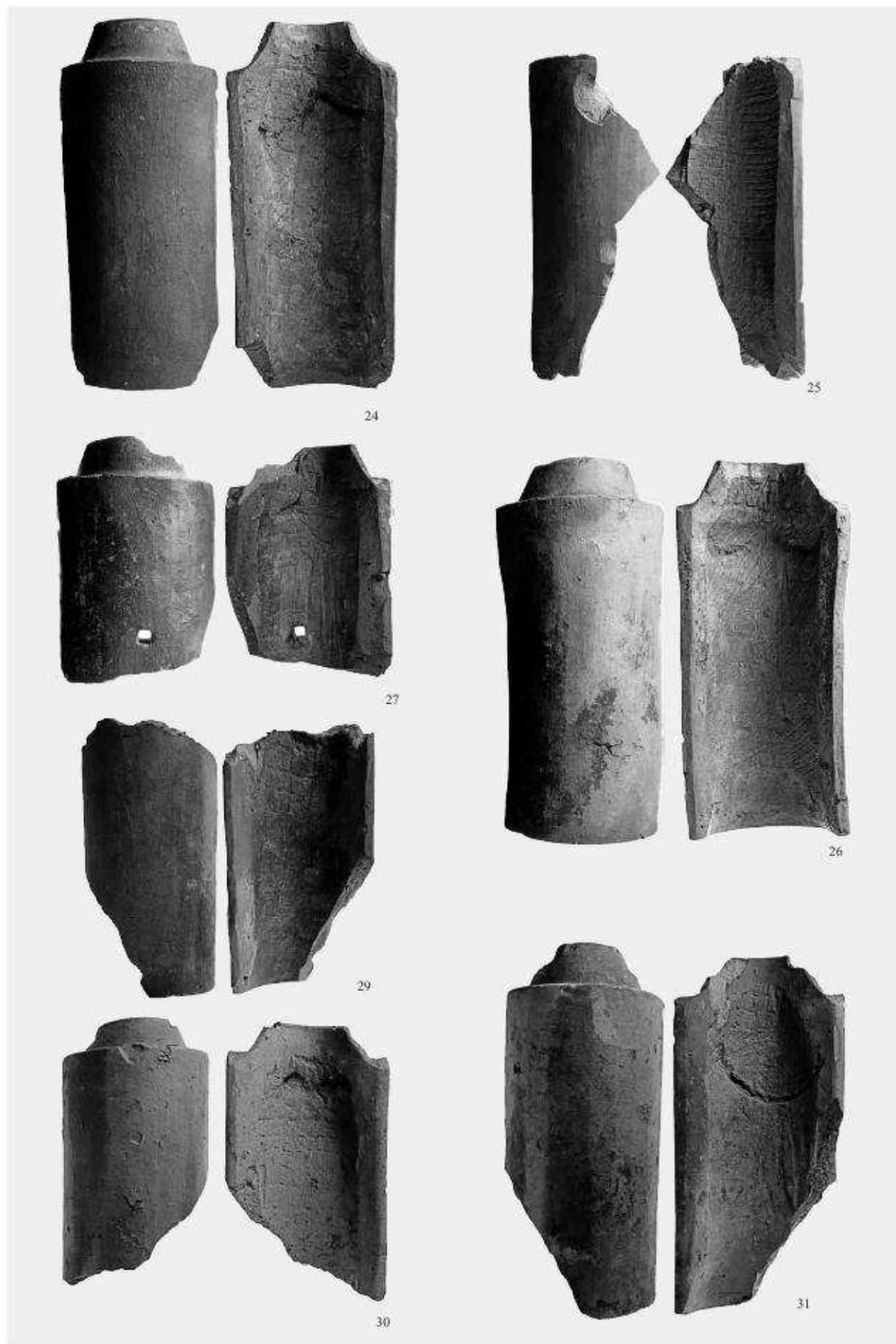
1 1トレンチ 出土瓦



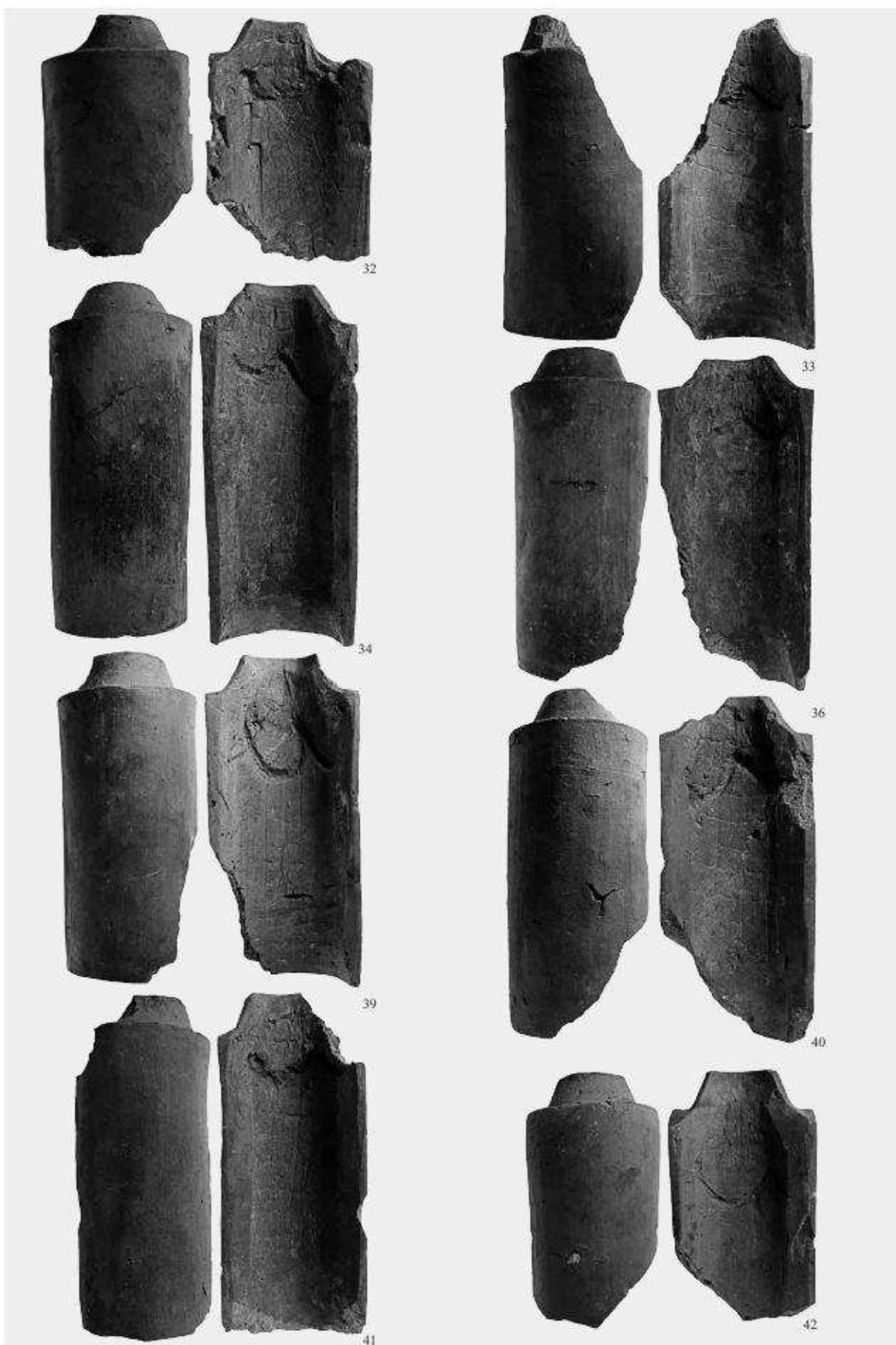
2 2トレンチ SX01 出土軒瓦



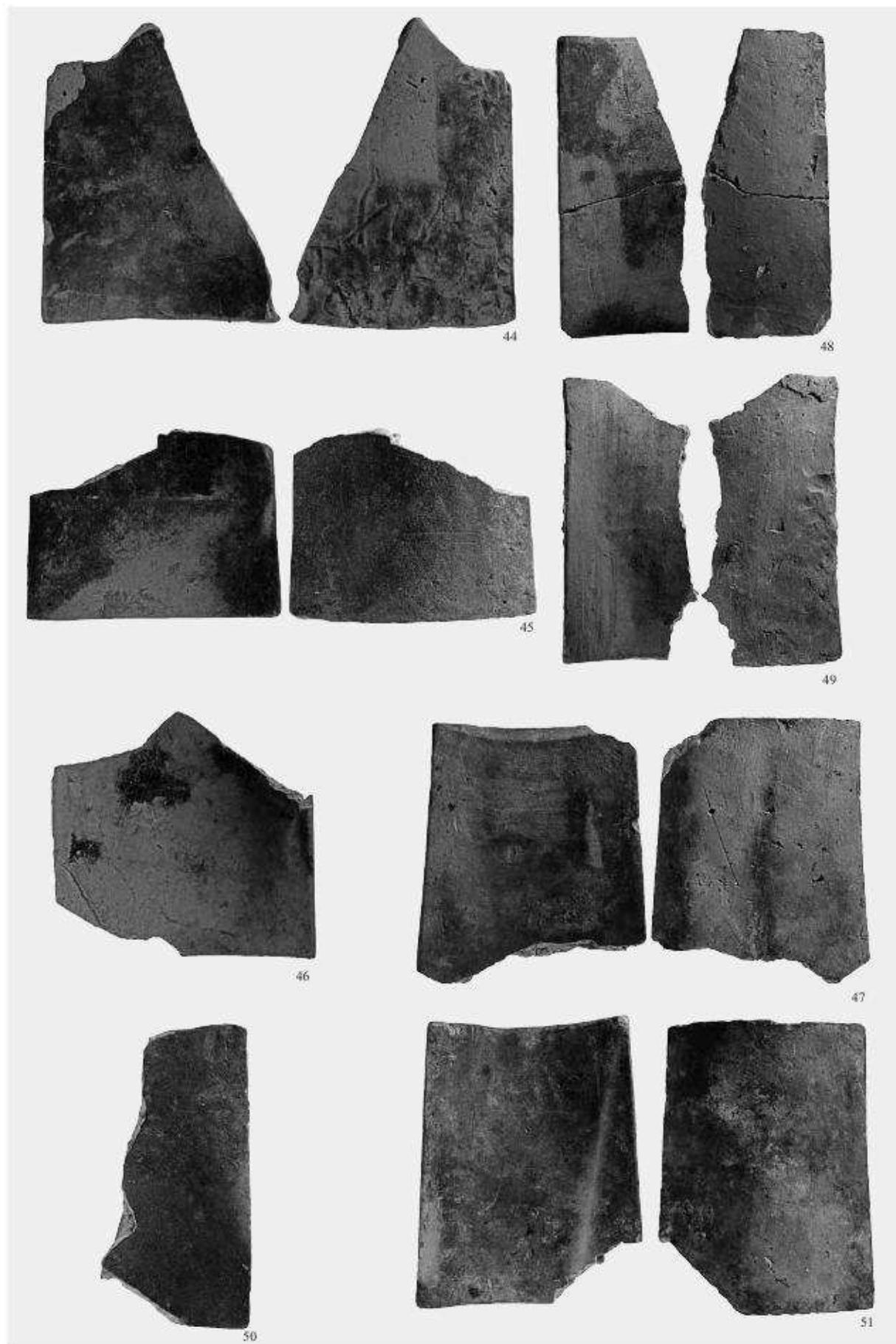
2 トレンチ SX01 出土丸瓦 (1)



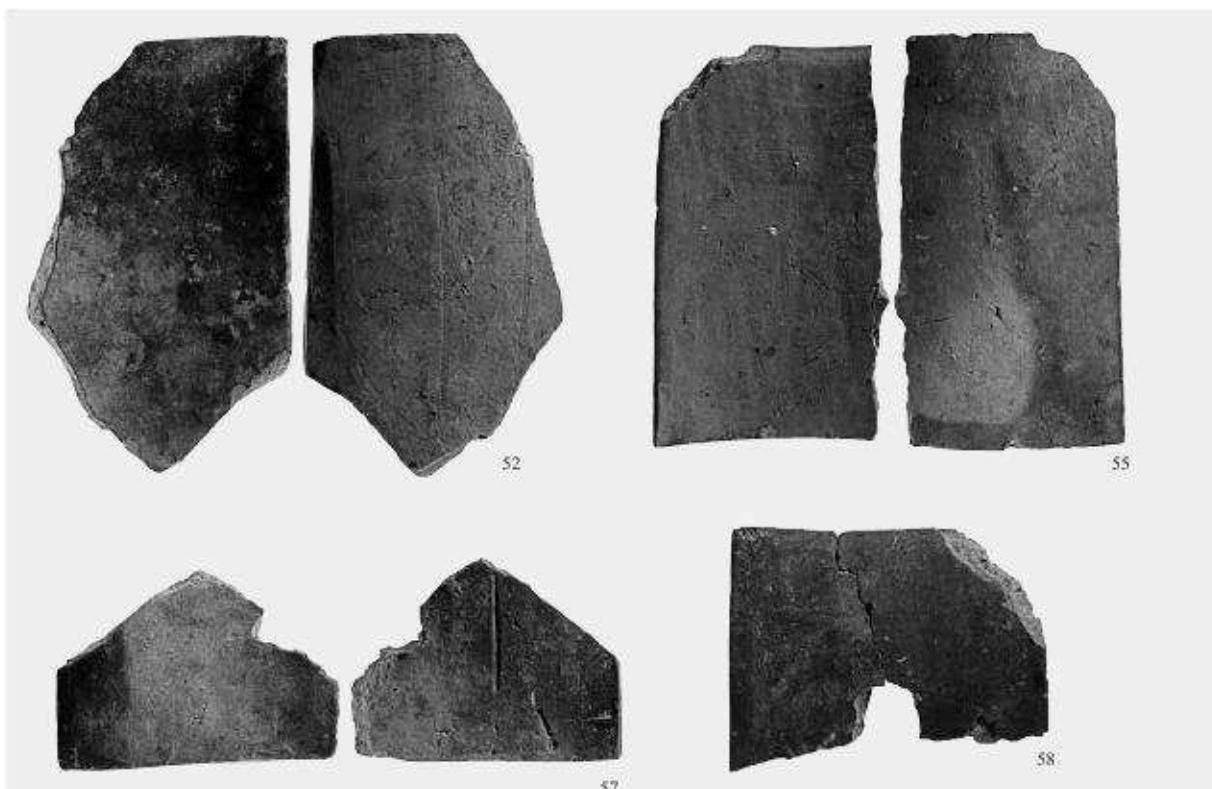
2 トレンチ SX01 出土丸瓦 (2)



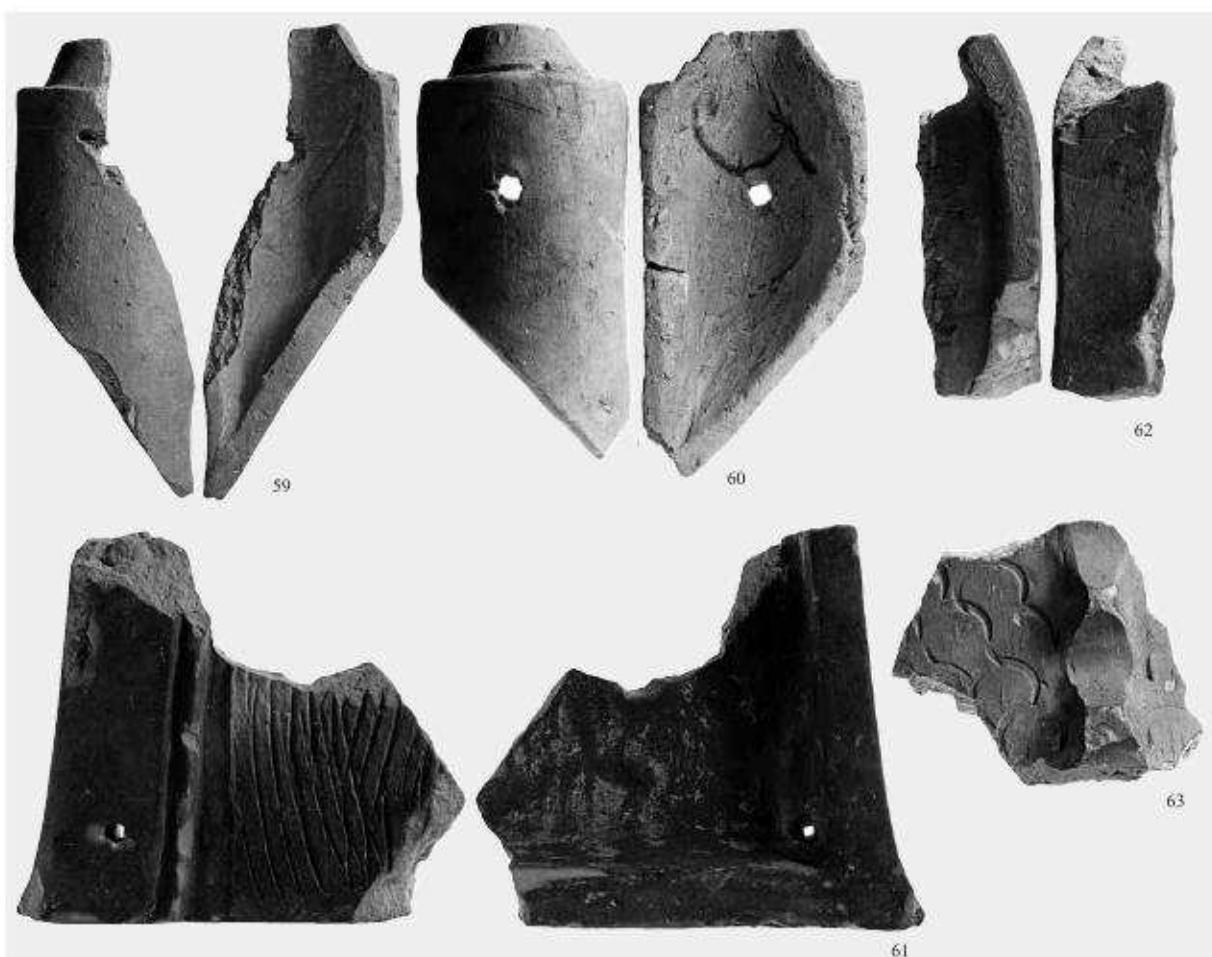
2 トレンチ SX01 出土丸瓦 (3)



2 トレンチ SX01 出土平瓦 (1)



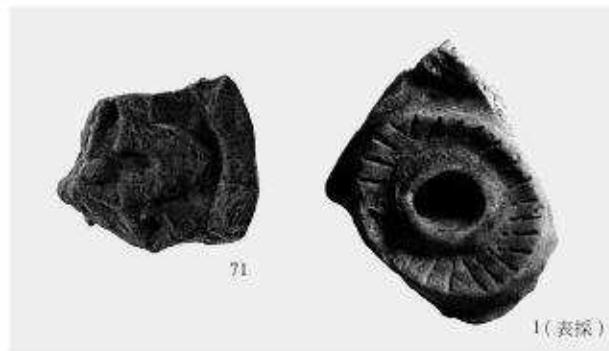
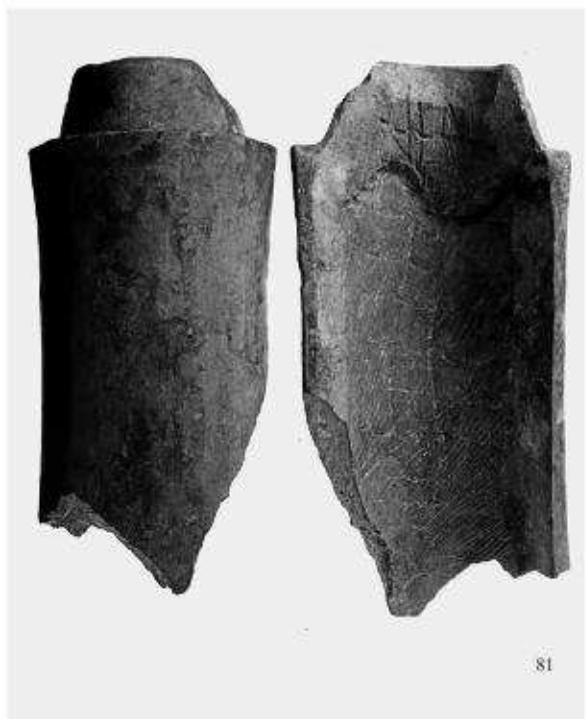
1 2 トレンチ SX01 出土平瓦 (2)



2 トレンチ SX01 等出土道具瓦

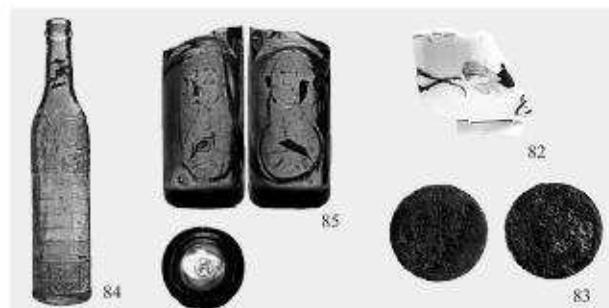


1 2 トレンチ 出土瓦



1(表採)

3 その他・表採瓦



2 4 トレンチ 出土丸瓦

4 近現代出土遺物

報 告 書 抄 錄

浜松城跡 13

2019年3月29日

発 行 浜松市教育委員会

編集 浜松市市民部文化財課
(教育委員会の補助執行機関)
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

印 刷 中部印刷株式会社

Hamamatsu Castle

The 24th excavation report

A Report of Archaeological Investigation
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka,Japan



March,2019

Hamamatsu Municipal Board of Education